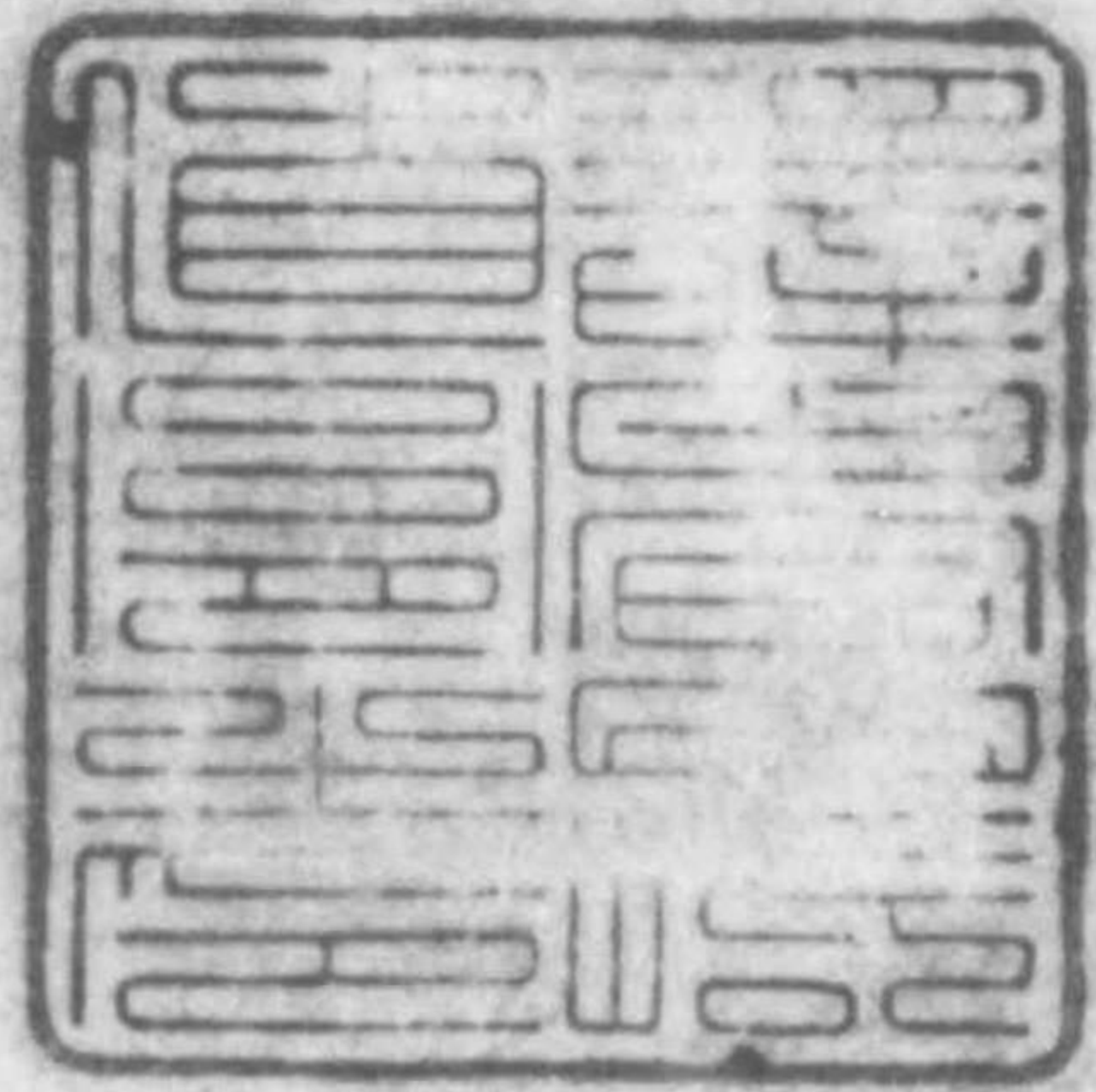


549

司 法 省 文 庫			
和 書 部 門	政 治 及 法 律	參 查 參 四	
冊 架 函 號			

5 6 7 8 9 10⁴m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10⁴m 1 2 3 4 5 6 7

第壹號



山崎直胤譯

佛國
民
濩
註
釋

明治九年
二月出版

村上勘兵衛刊行



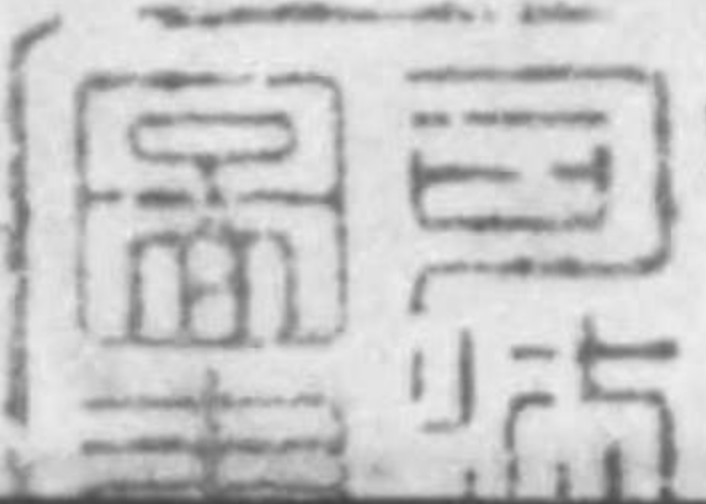
B300

P 1

1

二月廿七日
東京法律大學
圖書部
藏書
大正十一年
三月廿七日
心也直藏書

佛國民法註釋



佛國民法註釋
例言

方今佛國民法ノ我邦ニ行ハル、人其讀ミ難キヲ苦シム頃者予谷森眞男櫻井能監横山由清
股野琢ト相謀リ之ヲ讀讀セント欲ス因テ試ニ「ピコー」氏著ス所ノ註釋數葉ヲ譯シテ之ヲ
示ス諸子其簡明解シ易キヲ喜ヒ予ニ勸メテ之ヲ續譯セシメ相會シテ校訂スル數次皆曰フ
是亦民治ノ一端之ヲ世ニ公ニセハ教化ニ裨補スル淺勘ナラスト予之ヲ然リトシ遂ニ官ニ
請ヒ先ツ初卷ヲ刊行ス餘ハ隨テ譯シ隨テ刻シ全部終リテ後ヲ重訂セントス讀者幸ニ校正
ヲ賜ヘ

一此書ハ佛國法律學士巴里府上等裁判所附代言師ピコー氏政府及ヒ諸學士ノ訓條并ニ裁判
事例ニ因リ各條ニ註釋ヲ加ヘ題シテ「ユードナボレオンエキスプリケー」ト云フ千八百七
十一年巴里府ニ於テ刊行セシモノナリ民法註釋ノ書多シト雖モ未タ此ノ書ノ如キ簡明ナ
ルモノアラス凡ソ外國人ノ佛國民法ヲ讀ム者亦必ス此書ヲ以テ其要ヲ得タリトス
一書中穩當ノ譯字ヲ得サルモノアレハ原語ヲ載セ（中ニ解譯ヲ附ス

一書中古語ニ曰ト記シ傍ハラ〇〇〇〇ナ附スルハ皆法律ノ原則トナリシ羅句語ヲ標スルナ
リ

一(中ノ解譯多クハ「デルツル」「ログロン」「ムーロン」三氏ノ民法註解ヨリ引用シ本條(插
註)ノ參照ハ「トリビエー」氏編纂ノ法典ニ依ル

一本條(插註)ニ民何々トアルハ民法何條ト云フノ畧ニテ憲ハ憲法訴ハ訴訟法刑ハ刑法治ハ
治罪法商ハ商法森ハ森林法ノ畧ナリ憲法ハ千八百五十二年制定ノモノニ因ル

明治八年十一月

譯者山崎直胤 誌

B870
P 1

佛
國
民
法
註
釋

〇緒言

〇「ロアー」、「ドロアー」、「ジュスチース」、「ジュリスプリュダンス」、「ノ事

第一「ロアー」(法)ト云フ詞ヲ解シテ曰フ時ハ、人ノ遵奉スヘキ權柄(則政府)ニテ定メタル、
人間ノ行爲一般ノ規則ナリ、

人ハ生來自由ニシテ、且同權ナレハ、其行爲ノ規則ヲ定メ、之ニ遵ハシムルノ權ヲ有スル
者ハ、獨リ上帝アルノミ、上帝ハ直不直ノ方法ヲ以テ其旨意ヲ顯ハシ得ル者ナリ、上帝ヨリ
直ニ出ル所ノ法ハ人生自然親子ノ愛情アルカ如ク、常ニ其心中ニ感銘シテ動カサル者ナ
リ、故ニ此法ハ世界一般公同ニシテ且不動不易ノ者トス、人生縱令ヒ醜行ニ陥リ、或ハ德行
ニ進ム等ノ變易ヲ爲ス「アリトモ、其天賦ノ本性ニ至テハ毫モ變スル者ニアラス、此不動
不易ヨリ成立ツ所ノ法ヲ名ツケテ「ロアー」ナチエ「ノール」(自然法)ト云フ、

上帝ヨリ不直ニ出ル所ノ法ハ、正道ニ從テ成立シタル權柄即政府ノ天ニ繼テ定立シタル所
ノ者ニシテ各國成立進歩ノ摸樣ト其求需トニ因テ其趣キヲ異ニス、此法ヲ名ケテ「ロアー

ボジチーヴ」(人定法)ト云フ

予輩今茲ニ講究セントスル所ノ者ハ、自然法ニアラス、又教法ニ在ラズシテ、人定法ニ在リ、之レヲ解明スレハ即チ公ケノ權柄ニ於テ制定シ、且「サンクシヨ」(制可)シタル行爲ノ規則ナリ蓋シ「サンクシヨ」トハ立法者ニ於テ、法ヲ守ル者ヲ賞シ法ヲ犯ス者ヲ懲ス所ノ規格(刑法ハ民法ノ「サンクシヨ」ナリト云フカ如シ)ナリ、

抑法ノ原質ハ禁スルト命スルト許ストニ在リ、故ニ法ヲ分ツテ「ロアープロイビチーヴ」(禁制法)「ロアーアムベラチーヴ」(命令法)「ロアーベルミシーヴ」(免許法)ノ三者トス

第二「ドロアー」(權利或ハ法律)ト云フ詞ハ其意一ナラス、第一コ人々ヲ統理スル所ノ行爲ノ規則ヲ「ドロアー」ト云フ、此場合ニ於テハ「ロアー」ト其意大同小異ナリ、第二ニ學問ノ實ノ如ク思考セラル、之レヲ説明スレハ善惡曲直ヲ區別スルノ術即チ「ドロアー」ノ數種ノ教ナリ、其教ハ下ノ三則ヲ以テ之レヲ總括シ得ヘシ、曰ク生直ニ生活スルヲ、曰ク他人ヲ害セサルヲ、曰ク各自ニ其有スヘキ物ヲ有セシムルヲナリ、第三ニ法律ヲ以テ固定シタル權力ヲ指スノ意アリ、例ヘハ予ハ約束ヲ取結フノ「ドロアー」アリ、賣買スルノ「ドロア

「」アリ、家産ヲ相續スルノ「ドロアー」アリト云フカ如シ、第四ニ常ニ成法即公權柄ニ於テ制定シタル規則ノ集成シタル者ヲ指ス爲メニ用サレタリ、例ヘハ「ドロアー」、フランセイト云フカ如シ、

人定法ヲ分ツテ「ドロアー」、アンテルナシヨナル」(國際法)「ドロアー」、ピュブリック」(公法)「ドロアー」、プリベイ」(私法)ノ三トス、國際法トハ、國々ノ習慣及ヒ國ト國トノ交際ヲ規定スル所ノ和親貿易ノ數種ノ條約ナリ、公法トハ、國ト其國ヲ組立ツル所ノ人民トノ交際ヲ規定スル法律ニシテ、官府ノ人民ニ對シテノ權利及ヒ義務、又人民ノ官府ニ對シテノ權利及ヒ義務ヲ定ムル者ナリ、私法トハ、人事、財産、家族所有、逋債等ノ權ニ係ル所ノ者ニ付キ、人民ト人民トノ交際ヲ規定スル所謂民法ナリ、

佛國ノ法律ハ舊法、中法、新法ノ三ツニ分カテリ、而シテ舊法ニ成文法ト慣習法トノ別アリ、舊法ハ佛朗西建國ノ始ヨリ千七百八十九年六月十七日、即革命ノ始ニ至ル迄ノ者ヲ云ヒ、中法ハ革命紛擾ノ際制定セシ者ヲ云ヒ、新法一名編成法ハ千八百三年以來制定スル所ノ者ヲ云フ

新法ハ即今施用スル所ノ者ニシテ「コード」、「成典」ト名ケ諸法律ヲ集メテ大成セシ者ナリ、即「コード、ナポレオン」(民法)「コード、ド、プロセジュール、シヴール」(訴訟法)「コード、ド、コンメルス」(商法)「コード、ド、アンストリユクシヨ、クリミチール」(治罪法)「コードベナル」(刑法)「コード、ホレスチエル」(森林法)「コード、ド、ラルメ、ド、テール」(陸軍法)「コード、ド、ラルメ、ド、メール」(海軍法)是ナリ、

「コードナポレオン」ハ、人事、家族ノ權利、財産、及ヒ義務ヲ得ヘキ方法ヲ定ムル者ニシテ、「コード」中ノ最モ緊要ナル者ナリ、蓋此「コード」タルヤ、一千八百〇四年三月五日ヨリ一千八百〇四年三月二十日迄引續キ議決シテ布告シタル三十六個ノ法律ヲ編纂シテ之チ一ニス、一千八百四年三月三十一日之ニ佛國民法ノ名ヲ題シテ之ヲ布告セシ所ノ者ニシテ、一千八百七年ニ至リ彼ノ佛國ノ國典ヲ完全シ、民法ノ最モ重大ナル事件ヲ裁決セシ至盛至大英才ノ名ヲ取リテ、更ニ「コードナポレオン」ト題シタリ、此「コード」ニ掲クル者ハ、原ト數種ノ數目ヲ採蒐シテ、重チ省キ欠チ補ヒ、總計二千二百八十一條トシ、首尾呼應整然トシテ相連續セリ、

「コードナポレオン」ノ一二ノ部分ハ、其布達以來著シキ變革ヲ受ケタリ、例ヘハ准死、離婚、民事ニ付テノ禁錮ヲ廢シタルノ類ナリ

第三「ジュスチース」(審判)ト云フ詞ハ、各自ニ其ノ有スヘキ者ヲ有セシムヘキカ爲メ、不易不動ノ情願ト云フ意ナリ、又法律ノ適施ヲ專任スル權柄ト云フノ意トナルコアリ、又此權柄ニテ其判斷ヲ申渡スカ爲ノ場所即裁判所ヲ指スコアリ

第四「ジュリスプリュダンス」ト云フ詞ハ曲直ヲ辨識スルノ學タル法律ノ識能ト云フ意ナリ、故ニ法律ノ論理ヲ講究スル所ノ者ヲ「ジュリスト」ト名ケ、身ヲ法律學ニ委テ諸法律ニ係ル事件ニ付顧問ヲ受ケ自己ノ意見ヲ述ル職分ノ者ヲ「ジュリスコンスульт」ト名ケ、又「アプエー」(代書人)ノ如ク法律ノ論理ニ抱束セス只管身ヲ實際上ニ委ヌル者ヲ「ボラチシア」(ボラチシアン、ド、ジュリスプリュダンス)ノ義ト名ケ、又或ル事件ニ付一箇ノ裁判所ニテ嘗テ裁判シ來リシ事件ヲモ「ジュリスプリュダンス」ト名ケ、故ニ覆審院ノ「ジュリスプリュダンス」或ハ巴里上等裁判所ノ「ジュリスプリュダンス」ナドト云ヘリ、

佛
國
民
法
註
釋

谷森眞男

櫻井能監

山崎直胤 譯

横山由清

同校

股野 琢

抑民法ハ前加篇ト第一第二第三ノ三編ヲ合シタル者ナリ、第一篇ハ人事、第二篇ハ物件、第三編ハ所有ノ權ヲ得ルニ付テノ種々ノ方法ヲ定ム、

○前加編 凡テ法律ノ下達、効及適施、(千八百〇三年三月五日決定同月十五日下達) 此編掲ケル所ノ規格ハ、諸法律ヲ適行スベキ一般ノ原則トナルベキ者ニシテ、必シモ民法ノミニ屬スベキ者ニアラズ、然ルニ當時ノ立法者之レヲ以テ民法ノ首ニ掲ゲシ所以ハ、其編成シタル諸法律中、民法ハ最初ニ編成シ、且最緊要ノモノナルヲ以テナリ、民法制定ノ時ハ、共和政治曆第八年(千七百九十九年)ノ建國法ニ據リ、五个ノ大ナル政權存在セリ、第一、十年ヲ限リ選任シタル三員ヲ以テ成リ立ツ所ノ「コンシユル」職、第

二、法律案ヲ草シ且之レヲ評論セシ所ノ「コレセイダター」(參議院)第三、參議院ノ辨論者ニ對シ「コレシストラナーフ」(立法議院)ニ至リ法律ノ草案ヲ討論セシ所ノ「トリビユナ」(議法會議)第四、參議院及ヒ議法會議ヨリ派遣ノ辨論者ノ辨論ヲ聽キタル上、法律ヲ決定セシ所ノ立法議院、第五、立法議院ニ於テ決定セシ所ノ法律若シ建國法ニ抵觸スルコトアリト思量スル時ハ、十日内ニ之レヲ布告スルコトヲ拒ミ得シ所ノ「セナー」コンセルヴアートル」(保護元老院)ナリ、故ニ法律決定ノ日ヨリ布告ノ日迄十日ノ間隙アリキ、

第一條 法律ハ皇帝ヨリ爲シタル下達ニ因テ法朗西全國ニ於テ之ヲ行フ可シ

法律ハ其下達ヲ知ルコトヲ得タル時ヨリ國中ノ各所ニ於テ之ヲ行フ可シ

皇帝ヨリ爲シタル下達ハ皇帝ノ在ス州ニ於テハ其下達ノ日ヨリ一日ノ後之ヲ知ルト看做シ其他ノ州ニ於テハ其下達ヲ爲シタル都府ト各州ノ首府トノ間其距離ニ從ヒ一日ニ十「ミリヤメートル」(「ミリヤメートル」ハ一萬「メートル」ヲ云ヒ大凡我カニ里半一丁ニ當ル)大抵古ノ二十「リウ」ノ路程ヲ以テ其日數ヲ累テ一日ノ後ニ之ヲ知ルト看做ス可シ(民、一三五〇、憲四、二五、三九、刑、一二七、)

千八百五十二年一月十四日ノ建國法ニ據レハ、皇帝獨リ法律ノ立案發議ノ權ヲ有シ、法案ハ悉皆參議院ニテ作立シ以テ立法議院ニ移シテ議セシム、立法議院ニ於テハ、之ヲ其儘承認スルカ或ハ廢棄スルカヲ得ルノミニシテ、之ニ「アマドマン」(變更)ヲ加フルノ權ナシ、然レモ全案中ノ幾條件ヲ參議院ニ差戻スコトヲ決議スルヲ得ベシ、

法案ノ既ニ立法議院ニ於テ承認セラレタル者ハ、之レヲ「セナー」(元老院)ニ附ス、元老院ハ建國法ノ眞理及ヒ公同ノ自由權ノ保護者タルノ旨意ヲ以テ成立スル所ナレハ、法案若シ佛朗西國境ノ防禦ニ障礙シ得ルカ或ハ建國法、宗教、道義、人々ノ自由、法律ニ對シテ國民ノ同等ナルコト、或ハ所有權ノ犯スベカラザルコトニ抵觸シ得ルカノコトアレハ、其法律ヲ布告スルコトヲ拒ムコトアリ、

元老院ニ於テ法律ノ布告ヲ拒マスト明言セシトキハ、皇帝之ヲ制可シ而シテ、定式ノ文ヲ以テ之ヲ「プロミュルガイシモン」(下達)ス左ノ如シ

天惠人望ニ因テ佛朗西人ノ皇帝タル「ナポレオン」現今及將來ノ人民ニ告ク、今左ニ掲クル所ノ者ヲ「サンクシモン」(制可)シテ之ヲ下達ス、(此所ニ法律ノ本文ヲ記列

シ下ノ命令文ヲ以テ終ル(國璽ヲ鈐シ「ビルダンドロアー」(法律誌)ニ載セタル此法律、
諸院諸所(控訴院、諸裁判所等ヲ云フ)、及行政官署ニ到達シ、各其簿冊ニ登錄シテ之
ヲ遵守シ且遵守セシムルヲ命令ス、而シテ審判卿ニ其「ビユブリカーション」(公布)
ヲ、專任ス、

右文式ニ述ヘタル如ク法律ノ制可ト之レテ下達スルトハ皇帝同一ノ書ヲ以テ爲スト雖
モ此二者ヲ混同スベカラズ、

「サンクシエン」ト云フ詞ハ、平常法律ヲ守ル所ノ者ヲ賞シ、之ヲ犯ス所ノ者ヲ罰スル規
格ヲ指ス爲メニ用ユレト、今茲ニ用ヰル所ハ其意味殊ニシテ立法議院ニテ決議シタル
法案ヲ制可スルヲナリ、皇帝法案ヲ可ト見ル時ハ之ヲ制可ス、故ニ此制可ハ法案ヲ全備
シ之ヲ完全ナル法律ト爲スノ効アリ、然レトモ又法律ハ下達及公布ニ因ラサレハ必行ス
ヘキノ者トナラサルナリ、

下達ハ皇帝行政權ノ首長タルノ地位ヲ以テ法律制定ノ爲メ要用ナル諸手續ヲ經タルヲ
テ國民ニ明示シ、司法行政ノ官衙ニ之ヲ公知シ、之ヲ遵守シ且之ヲ遵守セシムルヲ命

令スル所ノ者ナリ、

法律下達ノ日附ハ、其法律ヲ記載スル所ノ法律誌ヲ印刷局ヨリ審判省ニ送致シ日ナ
リ、制可ヲ經テ下達セシ法律モ、之ヲ公ケニ知ラシムル(前ニ公布ト云ヒシヲ)ニアラザ
レハ、必行スヘキ者ニアラズ、何トナレハ人々之ヲ知り得タル上ニアラサレハ、人々ノ
爲メ之ヲ行爲ノ規則ト爲シ得ザレバナリ、蓋シ此公ケニ知ラシムルト云フハ、下達ノ日
ヨリ起算豫定スル所ノ時限ヲ經過スレハ、即公ケニ知ラシメシトス、此時限「セーヌ」
州(帝都ノアル所ノ州)内ハ全一日(二十四時間)ナリ、故ニ一月一日ニ下達シタル法律
ハ一月三日ヨリ施行スヘキナリ、其他ノ州ノ爲メニハ、帝都巴里府ト各州ノ首府トノ間、
十「ミリヤメートル」毎ニ一日ヲ加フ、因テ若シ十「ミリヤメートル」ノ外端數アレハ、又
一日ヲ増シ算スヘキヤノ說頗ル多カリシガ、覆審院ノ兩度ノ裁決ヲ以テ、十「ミリヤメ
ートル」(即キロメートル)以下ノ端數ハ、棄捐シテ算入セザルヲトナレリ、
新定法律ノ未タ施行スヘカラザル間ハ、在來ノ法律全ク其力ヲ有スレトモ、若シ既ニ施行
スヘクナリシ上ハ、乍チ各人ノ之ヲ知り得タルモノト見做ス、法律上ノ此思度ハ、原則ニ

於テ之ニ相反シタル証據ヲ立ルト雖モ其詮ナキ者トス、乍併敵人ノ侵入、又ハ洪水ノ如キ格段ナル變災ニ遭遇シタル地方ノ住民、法律ノ存亡ヲ知り得ザリシ場合ニ於テハ、其時間其住民ノ爲メノミ必ス施行スヘキ者ニアラザル者トス、

第二條 法律ハ將來ノ事ヲ定ムルノミニシテ既往ニ施行ス可カラス(民、六九一、一一七九、二二八一、訴一〇四一、刑四、森二一八、)

法律ハ佛國人民ノ爲メ行爲ノ規則トシテ將來ニノミ施用スヘキ者ナリ、若法律ヲ以テ既往ニ及ボスノ効アル者トスル時ハ物ノ條理及ヒ性理ニ相反シ、其布達ノ前其成立ノ前ニ及ボシテ之ヲ必行スヘキノ不都合ヲ生ズベシ(自由安全所有權等ノ如キ無上ノ權利忽チ亡滅スベシ)然レモ若シ立法者舊法ノ力及ヒ意旨ヲ最モ明瞭ニ示サンカ爲メ之ヲ説明スル時ハ、其説明ヲ既往ノ事件ニ適施スルコトアリ、何トナレハ其事件ハ固ヨリ其法ニ據テ支配セラレシヲ特ニ説明ニ因リテ最モ了解シ易クナリシガ故ナリ、

法律ハ既往ニ施行セズトノ規則ハ建國法中ニ記列セザリシ、是ヲ以テ一般人民ノ承認スル如ク、民法ヲ變革シ得ル所ノ立法者ハ、既往ニ及ボスノ法ヲ制定スルノ權ヲ有セリ、

然レモ「ロギック」(論理)ト「レーゾン」(道理)トニ基ケハ立法者ハ成ルベクタケ其權ヲ節用シテ、之ヲ濫用セザルヲ要ス、

法ノ既往ニ及バザルコトノ原則ハ、容易ニ之ヲ得スベキカ如シト雖モ、深ク之ヲ考フレハ大ナル困難ヲ生ズベキナリ、然シ此困難ハ下項ニ述フル所ノ規則ニ從テ之ヲ消除シ得ベシ、蓋シ此規則ハ既ニ得タル所ノ權利ハ常ニ之ヲ保存ス、其既ニ得タル權利トハ、例ヘハ人ノ家産中ニ加ハリタル權利ノ如ク、他人不正直ノ所爲ヲ以テスルニアラザレハ之ヲ奪ヒ得サル者ナリ

第一契約ヲ取結ブ爲メ或ハ遺囑スル爲メノ「カバシテ」(身位)ハ法ノ支配内ニ在リテ、將來ノ爲メ之ヲ増減シ或ハ剝奪シ得、故ニ一ノ法律ヲ以テ女子十八歳以上ニ至ラザレハ婚嫁スルコトヲ許サズト定ムル時ハ、其法律布達ノ時マデハ、十五歳ニテ婚嫁スルコトヲ得ヘキ女子モ、布達ノ後ハ十八歳以上ニ至ラザレハ婚嫁スルノ權ナシ、然レモ新法布告前舊法ニ據テ十八歳未滿ノ者ノ取結ビタル婚姻ハ、新法布達ノ後ト雖モ全ク舊法ノ力ヲ以テ之ヲ保續スヘシ、然ルニ若シ新法ヲ以テ其以前法ニ適シテ取結ビタル婚姻ヲモ取

消シ得ベキ者トシハ、即新法ヲ既往ニ及ボシ既ニ得タル所ノ權利ヲ破ル者トナルヘシ、
又若シ丁年ト稱スルハ二十年ト定メ來リシニ、新法ヲ以テ以後ハ二十五歳以上ニアラ
ザレハ丁年ト稱スルヲ得ズト定ムル時ハ、其新法布達ノ時二十一歳ニテ即チ丁年タリ
シ者モ更ニ幼者トナリ、二十五歳ニ至ルマテハ契約ヲ取結フノ權ナシ、然レハ新法布告
前舊法ニ據リ正シク取結ヒタル契約、生存中ノ贈遺、婚姻ノ契約ニ因テノ贈與等ハ其期
限未タ滿タツトモ、又ハ其成立ハ一箇ノ要件ニ因テ中止セラル、トモ、契約ノ力ハ全ク
保存スルヲ得ベシ、何トナレハ期限ハ直ニ其契約ノ効ヲ妨碍スル者ニアラス、要件備
ハレハ契約ノ効ハ之ヲ取結ヒシ日ニ溯リ及ホセハナリ、遺囑贈遺ハ其贈遺ヲ受スヘキ
者ノ爲メ決シテ既ニ得タルノ權ヲ生セズ、唯其權ノ生スルヲ待ツノ理アルノミ、然シ遺
囑者生存ノ間ニハ何時ニテモ其契約ヲ取消スヲ得ヘシ、故ニ二十五歳未滿ノ者ハ遺
囑ノ贈遺ヲ爲スノ權ナシト定ムル所ノ新法ハ未タ其年齡ニ至ラサル者ノ遺囑ヲ取消ス
ヘシ、然レハ其遺囑者二十五歳未滿ナルモ新法施行以前ニ死セシナラハ、其遺囑ハ贈遺
ヲ受クル者ノ爲メ既ニ得タル權ヲ生シ之ヲ保存スヘキナリ、

第二生存中ノ贈遺又ハ遺囑ヲナスノ法式、又其之ヲ爲シタルノ證據及其説明ハ其事ヲ
爲シタル時ノ法ニ因テ支配セラル、古語ニ曰ク時[○]ハ證據ヲ支配ス、ト以テ此規則ヲ確定
スヘシ

第三權利ヲ確定シ且之ヲ行フガ爲メ裁判ヲ乞フノ方法ハ、其裁判ヲ乞フノ手續ヲ爲ス
時ニ行ハル、法ヲ以テ之ヲ支配ス、蓋シ此規則ヲ適施スレハ人民告訴手續法ノ猶一層
精良ナル資益ヲ増加シ、決シテ既ニ得タル權ヲ害スルコトナシトス、

第四違警罪輕罪重罪ニ刑ヲ加フルハ、其犯罪ノ時ニ行ハレシ所ノ法ニ據テ適施スヘシ、
然レハ若其後定立スル法以前ヨリ其刑輕キ時ハ裁判所ハ其輕キニ從ヒ新法ヲ以テ舊犯
罪者ニ適施スヘシ、蓋シ立法者從前ノ法ハ酷ニ過キタリト思量シテ法ヲ改メシナレハ
ナリ、

第三條 取締ノ法律及ヒ國中安寧ノ事ニ管スル法律ハ佛蘭西領地内ニ居住スル者皆之ヲ循
守ス可シ

不動産ハ外國人ノ所有スル物ト雖モ佛蘭西ノ法ヲ以テ之ヲ支配ス可シ

人ノ身分及ヒ權利ニ管スル法律ハ外國ニ居住スルニ管セス各佛蘭西人ヲ支配ス可シ(民
四七、一七〇、九九九、二〇六三、二一二三、二一二八、訴五四六、治五、六、七、)

取締及ヒ國中安寧ニ管スル法トハ、違警罪及輕重罪ニ向テ刑ヲ定ムル者ニシテ、國ノ靜
謐繁昌及威光ヲ保存シ人ノ安寧自由及權利ヲ監護シ、又佛國內ニ住居或ハ旅行スル所
ノ外國人ヲモ佛國人同様此法ヲ以テ監護ス、故ニ其外國人ニ於テモ亦佛蘭西人同様之
ヲ遵守セサルベカラズ、因テ其犯罪アル時モ皆一樣佛國ノ法ニ於テ定メタル刑ヲ蒙ル
ラシムベシ、

佛國ニ在ル不動産ハ外國人ノ所持スル者タリトモ、佛國ノ法ヲ以テ支配スル乎外國人ノ
所持スル動産モ又佛國ノ法ヲ以テ支配スル乎、此事ニ付テハ法律ノ不備ナルニ因リ、一
般其所持者住所ノ法ヲ以テ適施セザルベカラズ、故ニ動産遺囑贈遺ノ事ハ死者ノ住所
ノ法ニ據テ定ムベシ、

「エタシヅキール」(人ノ身分)「コンジョシヨ」(其權利)契約ヲ取結フコト、婚姻スルコト、遺囑
スルコト、等ニ付テノ身位ハ佛國人タルノ分限ニ附從シ、佛國人ノ住居スル所ハ何處マデ

モ之ニ附着セリ(古語ニ曰ク人事法ハ肉ノ骨ニ於ケル如シト)然レモ此法ハ佛國ニ住居
スル外國人ニ適施スベカラズ、外國人ニハ其本國ノ法ヲ適施スベシ、但シ一婦ニシテ數
夫ニ嫁シ、一夫ニシテ數婦ヲ娶ル(「ポリガミー」)法ノ如キ佛國ノ風俗ニ觸ル、者ハ格
別ナリトス、千八百六十一年一月十六日覆審院ニ於テ右ノ原則ニ從ヒ的當ナル權衡ヲ
トリタル有名ノ裁決アリ曰ク

佛國ノ民法ハ外國ニ住スル佛國人ノ「スタナムメルソチール」(人權)ヲ庇保シ隨テ又
佛國ニ住スル外國人モ其自國ノ人權ヲ存保シ得ルト雖モ之ヲ行フニ當テ佛國人ノ損
害トナリ、夫カ爲毎ニ葛藤ヲ生ズベキ時ハ、相當ノ制限斟酌ヲ加フルヲ適當ナリトス、
原來契約ヲ取結ハントスルニハ其相手方ノ者ノ身位ヲ知ランコトヲ要スト雖モ佛國ニ
於テ契約ヲ取結フ所ノ外國人ノ爲、此規則ヲ嚴格ニ適施スルコトヲ得ス、何トナレハ佛
國人相互ニ契約ヲ取結ハントスルニ、其相手方ノ身位ヲ驗探スルコト容易ナリトイヘ
ル、佛國ニ於テ佛國人外國人ト契約ヲ取結ハントスル時、其外國人ノ身位ヲ驗探スル
ハ容易ナラズ、故ニ此場合ニ於テ佛國人ハ諸外國ノ法律中、幼者丁年及ヒ身位ニ因リ

外國人ノ取結ヒ得ル所ノ契約ノ定限ニ關シタル規格ヲ知ルコト必要トセス、因テ其契約ヲ保存スルカ爲ニハ佛國人ニ於テ輕忽懈怠ノ所業ナク、良心ニテ之ヲ取結ヒタルヲ以テ足レリトス、

諸証書ニ付テノ法式ハ、其証書ヲ仕立テタル場合ノ法ヲ以テ之ヲ支配ス、古語曰ク場所
○○○○○
ハ、レゾト證書ヲ支配スト、

右ニ記列シタル者ヲ概説スレハ、取締リ及ビ安寧ニ關スルノ法及不動産ニ關スル法ハ、概シテ之ヲ「スタチユレール」ト稱ス、而シテ取締安寧ノ法ハ、佛國領地内ニ住居スル者ハ其佛國人ナルト外國人ナルトノ別ナク總テ之ヲ支配シ、不動産ニ關スル法ハ佛國內ニ現在シタル所ノ不動産ヲ悉ク支配ス、蓋シ「スタチユレール」ノカハ佛國境界ノ外ニ及ハザルナリ、「エタシヴキール」(人ノ身上)及ヒ「カバシテ」(身位)ニ關スル法ハ「スタチユレール」ト稱シ本來佛國人ハ其佛國ニ在ルト外國ニ在ルトヲ問ハス總テ之ヲ適施スヘキ者トス、

第四條 法律ノ不備法律ノ不委法律ノ所缺ヲ以テ口實トシ裁判ヲ爲スヲ肯セザル裁判役ハ

漫ニ裁判ヲセザルノ罪アリトシテ訴訟ヲ受ク可シ(訴五〇五、八、刑一八五、治三六四)

裁判役ハ己レニ告白セシ一切ノ訴訟ニ付キ其判斷ヲ申渡スヲ要トス、若シ「アブエー」(代書人)ノ手ヲ經テ己レニ告白スル訴訟ニ答フルコトヲ肯セズ或ハ既ニ裁判ヲ爲シ得ヘキ形狀アリ又ハ裁判ヲ爲シ得ベキ形狀ニ至ラントスル訴訟ヲ裁判スルコトヲ肯セザル時ハ漫ニ裁判セザルノ罪アリト訴ヘラレ、且夫カ爲メ損害ノ賠償、罰金及ヒ職務差止ノ申渡シヲ受クルコトアルベシ、(訴訟法五百六條、刑法百八十五條見合セ)若裁判役ニ於テ法律ニ不備、不委、所缺アリト認メ其裁判刑事ニ屬スル時ハ被告人被疑人へ直ニ放免ノ申渡シヲ爲スベシ、民事ニ屬スル時ハ法律ノ精義ヲ細釋シ、且裁判ノ事例ト著述者ノ訓條トヲ參考シ天然ノ道理及情理ヲ斟酌シテ裁判申渡シヲ爲サルベカラス、

第五條 裁判役ハ己レニ告白セシ訴訟ニ付キ一般ノ規則ヲ定ムルカ如ク其裁判ヲ言渡ス可カラス、(民一三五、刑一二七)

佛國建國法ハ三大權ヲ區別セリ、法ヲ制定スル所ノ立法權、法ヲ施行シシムル所ノ行政權、法ノ適施ヲ爲ス所ノ審判權是ナリ、而シテ立法者ハ一般ノ方法ヲ將來ノ爲ニ規定シ

テ諸權利ヲ成立ス、審判官ハ之ニ反シテ現ニ發生セシ所ノ格別ノ事項ニ付キ之ヲ判定シ、其判定ハ現在事項ノ權利ヲ定ムルト雖モ其「アンスタンス」(訴訟)ニ關係セシ雙方ノ爲ノミノ外之ヲ他ニ及ボスベカラス、古語ノ裁判ノ決案ハ決シテ他人ニ益セズ又害セズト云フ格言ハ、援テ覆審院ノ裁決上ニモ及ボスベシ

第六條 私ニ爲シタル契約ヲ以テ公ケノ安寧及ヒ風儀ニ管スル法律ヲ犯ス可カラズ(民三〇七、六八六、七九一、九〇〇、九四六、九六五、一一三〇、一一三三、一一七二、一二六二、一三八七、一四五二、一四五三、一五二一、一六二八、一六六〇、一六七四、一七八〇、一八三三、二〇六三、二〇七八、二〇八八、二二二〇、訴一〇〇四、商三十八、三四七、三六五、五九八)

私益ニ關スルノ法ハ相互ヒノ契約ヲ以テ之ヲ變更スルヲ得、其條件ハ設ケタル雙方ノ爲法トナレバナリ、世治及ヒ風儀ニ關スルノ法ハ契約ヲ以テ之ヲ變更スルヲ得ズ、是故ニ建國法施政刑法或ハ人ノ身上及身位夫或ハ父ノ權ニ關スルノ法ニ反戻シタル契約ハ法ヲ以テ之ヲ取消スコトヲ得ルナリ、金銀取引ノ一ノ契約中ニ法律亦ハ風儀ニ

反戻シタル條件ヲ掲ケタル時ハ其條件ハ取消トナリ、其契約モ從テ効ナキ者トナルベシ(千百七十二條見合セ)然ルニ生存中ノ贈遺及ヒ遺囑ノ贈遺書中ニ同上ノ條件ヲ掲ケタル時ハ、其條件ノミ之ヲ初ヨリ掲ケザル者トシテ贈遺ノ契約ハ其効アル者トス、(九百條見合セ)

○第一編 人事

佛語ニテ「メルソノ」(人)ト云フ詞ハ元假面ト云フ意ナリシガ、今爰ニ用キル「メルソノ」ノ意ハ「オンヌ」(世人)ノ人間社會ト親族トノ中ニ於テ有ス所ノ分限ニテ、人ノ權利及ヒ義務ノ淵源トナル所ノ分限上ニ付テ認メタル人ヲ指スナリ、又「エター」(官府)「コンミューン」(邑)「エタプリスマン、ビユブリック」(公ケノ建造物)及商法ノ會社モ亦皆人トナルコアリ、何トナレハ裁判上ニ於テ是等ノ者ハ世人ノ如ク權利及義務ヲ持テ得ベキ者ナレバナリ、

○第一卷 民權ヲ有スル事及ヒ奪フ事(千八百三年三月八日決定同月十八日下達)

民權トハ人々相互ノ交際上ニ行ヒ用キル所ノ權力ニシテ、法律ヲ以テ保固シタル者ナリ、即チ親ノ權、夫ノ權、契約ヲ取結ブノ權、賣買スルノ權、相續ノ權、生存中又ハ遺囑ニ因テ財產ヲ贈遺スルノ權ノ類ナリ、

○第一章 民權ヲ有スル事

第七條 民權ヲ行フハ國士(國ノ戶籍中ニ在リテ民權ハ言テ待タズ政權ヲ行フコト得ベキ)

人民ヲ云)タルノ分限ト相管スルコトナシ但シ國士タルノ分限ハ憲法ニ因テノミ之ヲ得、且之ヲ有ス可キモノナリ(民二三、刑一八、二八、三四、四二、四三、四〇五、四〇一、)

民權ト政權トノ別アリテ、民權ハ凡ソ佛國人タルモノハ一般之ヲ得ベシト雖モ、政權ニ至ツテハ佛國人ニシテ丁年ノ男子ナル國士タル者ニアラザレハ之ヲ得ベカラズ、政權トハ官途ニ就キ公正ノ證書ニ證人トナリ、又ハ陪審人トナリ代議士選擇人トナリ代議士トナルノ權ヲ云フ、

第八條 各佛蘭西人ハ民權ヲ有ス可シ(民一七、刑二八、三四、四二、)

各佛國人ハ民權ヲ有スベシト曰フ文ハ男女ハ勿論最幼少ノ兒子最貧ナル者モ、民事ノ社會ニ於テ同等ノ權利ヲ有シ親族ノ權(親ノ權、夫ノ權、親族會議ニ參與スルノ權、後見人タルノ權、管財人タルノ權等ヲ合稱シテ云フ)各人ノ財產身體及榮譽ハ悉皆同一ニ法ノ保護ニ依附シ、何人ニ限ラズ他人ニ不正直ノ妨害ヲ加フル者ヲ罰スルノ意ヲ示スナリ、本條ハ至テ簡短ナリト雖最上ナル理學ノ本旨ヲ含ミ、現今佛國人ノ社會ヲシテ、太古中古ノ最モ善良ノ社會ヨリモ超過卓絶セシメタリ、佛國人ハ悉皆民權ヲ有スト雖モ、其

内其權ノ行用ヲ有セザル者アリ、即幼者ハ年齡微弱ニシテ未ダ世事ニ經歷セザルガクメ、治産ノ禁ヲ受ケタル者ハ其痴呆ト狂癪ナルカ爲メ自カラ其民權ヲ行フヲ得ズ、此權ヲ行フハ、幼者及ヒ治産ノ禁ヲ受ケタル者ヲ監護スルガ爲ニ代ハリテ其責ニ任シ、幼者及ヒ治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ名ヲ以テ諸事ヲ處分シ、其資益ヲ謀ルコトノ任ヲ受ケタル所ノ人ニ在リ、即チ父或ハ母或ハ後見人ナリ、又既ニ婚嫁シタル婦ハ、其取結ヒタル婚嫁契約ノ法則ニ從ヒ、其民權ヲ行フニ付キ多少ノ制限アリ、此制限ハ親族ノ和睦一致ヲ要スルカ爲ナリ、

第九條 佛蘭西ニ於テ生レシ外國人ノ子ハ丁年(滿二十一歳ノ齡ヲ云フ)ニ至リシヨリ一年内ニ佛蘭西人タルノ分限ヲ得ント求ムルコトヲ得可シ但シ其求ムル所ヲ得ント欲スルニハ其者佛蘭西ニ居住スル時ハ佛蘭西ニ其住所ヲ定ム可キノ意タルコトヲ申述フ可ク又外國ニ居住スル時ハ佛蘭西ニ其住所ヲ定ム可キノ證書ヲ出シテ其時ヨリ一年内ニ佛蘭西ニ其住所ヲ定ム可(民一〇、二〇、一〇四、)

佛國ニ於テ生レタル外國人ノ子ハ即チ外國人ナリ、何トナレハ子ハ親ノ地位ヲ續ケハ

ナリ、然ルニ佛國ノ地ニ於テ生レタル故ヲ以テ、立法者下ノ三要件ニ因リテ佛國人タルノ權力ヲ與ヘタリ、其一佛國ノ法ヲ以テ定メタル丁年ニ至リシヨリ一年內ニ其者佛國內ニ住居スル時ハ、其住居ノ場所ノ邑廳ヘ、若シ外國ニ住居スル時ハ佛國ニ來テ住居セント欲スル場所ノ邑廳ヘ佛國人タランコトヲ請求スル事、其二其請求書ニハ佛國ニ其住所ヲ定ムベキ意ナルコトヲ明言スル事、其三請求ヲ爲シタル年內ニ必ラス其住所ヲ佛國內ニ定ムベキ事、

佛國ニ於テ生レタル外國人ノ子ハ、仮令ヒ其父ノ情願ニ因ルトモ幼年ノ間ハ佛國人タルノ分限ヲ求ムルコトヲ得ズ、今一例ヲ擧ケテ其所以ヲ證セン、嘗テ波商人「ステビンスキ」ナル者未タ佛國ニ歸化セザル時、佛國ニ於テ生レタル一子アリ、之ヲ「ニコールボリテクニツク」(技術大學校)ニ入舍セシメントセシニ、此校ノ生徒ハ佛國人ノミニ限ルヲ以テ其子ノ入舍ヲ肯セス、右ニ付一千八百六十年十二月三十一日覆審院ニ於テ之ヲ裁決スルコト左ク如シ

技術大學校ノ試験ニ關シタル一千八百五十年六月五日ノ法律第八條ニ佛國人ニアラ

ザレハ何人タリモ試験ヲ求メ入學ヲ願フコトヲ得ズ、トアルト幼年ナル子ハ、其父ノ地位ヲ繼續スト云フ原則トニ因リ、未タ佛國ニ歸化セザル波蘭人「ステビンスキ」氏ノ佛國ニ於テ生ミタル子ハ其父ト同様外國人ナリ、其子丁年ニ至リ佛國人タラント欲スル望ミアルヤ否ハ、誰人タリトモ之ヲ前知豫定シ難シ、故ニ「ステビンスキ」氏ノ子ハ現ニ佛國人ニ非サルノ故ヲ以テ、技術大學校ノ試験ヲ受クルノ請求ハ之ヲ許スベカラス、即チ上等裁判所ノ裁決ハ本件ノ爲メニ法律ノ正當ナル適施ヲナセシナリ云々

千八百四十九年三月二十二日ノ法律、及千八百五十一年二月七日ノ法律ハ佛國ニ於テ生レタル外國人ノ爲ニハ本條ヨリ稍ヤ深切ナリ、千八百四十九年三月二十二日法律左ノ如シ

佛蘭西ニ於テ生レタル外國人ノ子ハ、其丁年ニ至リシヨリ一年ノ後タリトモ左ニ記列スルニ要件中ノ一ヲ爲スニ於テハ、民法第九條ニ定メタル請求ヲ爲スコトヲ得ベシ、第一若シ其者佛國ノ海陸軍中ニ勤仕スルカ又ハ勤仕シシカノ者、第二若シ「ニキスト

ラテ一テ(外國人タルコ)ヲ言立ルコナク徴兵法ニ遵フタル者、
千八百五十一年二月七日ノ法律左ノ如シ

第一條佛國ニ於テ生レタル外國人ニテ其親ナル外國人モ亦佛國ニ於テ生レタル者ナ
レハ、佛國ノ法ニテ定メタル丁年ニ至リシヨリ一年内ニ其住居スル場所ノ邑官若クハ
其者ノ本國政府ヨリ佛國ニ駐營セシメタル國際掛ノ官吏、又ハ領事官ヘ別段書ヲ呈
シテ外國人タルノ分限ヲ保存スベキ旨ヲ求メザルニ於テハ、自カラ佛國人タルベシ
第二條民法第九條ハ歸化シタル外國人ノ子ニテ歸化ノ時猶幼年ナリシ者ニ適施ス、
又歸化ノ時其子既ニ丁年ナル時、其佛國ニ於テ生レシト外國ニ於テ生レシトナ問ハ
ズ、其父ノ歸化セシ時ヨリ一年ノ内ハ民法第九條ヲ以テ適施スベキナリ、

第十條 外國ニ於テ生レタル佛蘭西人ノ子ハ佛蘭西人ナリ

佛蘭西人タルノ分限ヲ失ヒシ佛蘭西人ノ外國ニ於テ生ミタル子ハ何時ニ限ラス前條ニ記
セシ式ヲ行ヒタル上ニテ佛蘭西人タルノ分限ヲ復スルコトヲ得可シ(民一八、一九、二〇、四
七、四八)

子ノ公生ナルヤ否ヤヲ査定シ、又人ノ死亡スル時ニ當リ、相續或ハ遺物ヲ受ケ得ベキヤ
ヲ査定スル爲ニハ、其子ノ受胎ノ時ニ溯リテ之ヲ決ス(古語ニ曰ク胎内ノ子モ其利益ノ
事ニ付テハ既ニ生レシ者ト同ク見做ス)ベキナレドモ本條ノ如ク「ナシヨナリテ一」(國
事ニ付テハ既ニ生レシ者ト同ク見做ス)ナトハベキニモ、コトニ付テハ、出產ノ時ニ歸セザルヲ得ザルコト見エタリ、

佛國人ノ外國ニ於テ生ミタル子、佛國人ナル父ノ認メタル子、佛國人ナル母ノ生ミテ父
知レザル子、佛國內ニ於テ生レテ父母共知レザル子ハ皆佛國人タルベシ、若シ其子後日ニ
至リ外國人ヨリ我子ナリト認ムルコトアリトモ、之カ爲ニ其子ノ國屬ヲ失ハシムルコトナ
シ、(後日トハ丁年ニ至リシ後ヲ云フナルベシ、何トナレハ其子ニ於テ外國人タルノ父
ノ認ヲ取消スコトハ困難ナルベク、且何時ニテモ外國人ヨリ認メ得ル者トスル時ハ、佛國
人ノ分限ヲ隨意ニ失ハシムルノ權ヲ外國人ニ與フルニ立至ルベシ、)
外國又ハ佛國ニ在ルトナ問ハス、佛國人タルノ分限ヲ失ヒタル者ノ生ミタル子ハ外國
人ナリ、然レモ第九條ニ定メタル式ヲ爲スニ於テハ佛國人トナルコトヲ得ベシ、右ハ佛國
内ニ於テ外國人ノ生ミタル子ニ比スレハ、其待遇稍懇切ナリトス、何トナレハ之カ爲ニ

別ニ期限ヲ定ムルコトナキヲ以テ、丁年ニ至リシヨリ一年内ノミナラス、何時ニテモ佛國人タルノ分限ヲ求ムルコト得ベケレバナリ、

第十一條 外國人ハ其本國ト佛蘭西ト結ビタル條約ニ因リ其國ニ於テ佛蘭西人ニ授ケ又ハ授ケ可キ所ニ等シキ民權ヲ佛蘭西ニ於テ有スベシ(民一五、一六、七二六、九二、二二二八、二二九三、憲五三、訴六九、一六六、四二三、五四六、九〇五、治六、刑二十七、)

本條ハ千八百十九年七月十四日ノ法律ヲ以テ其一部ヲ廢止シ、(七百二十六條見合セ)外國人モ佛國ニ於テ佛國人同様ノ方法ヲ以テ遺物ヲ相續シ、贈遺ヲ受ケ、贈遺ヲナスコトヲ得セシメタリ、然レモ猶著キ効ヲ存ス、即チ裁判上外國人原告ナル時己レ負訴訟トナルニ於テハ被告タル佛國人ニ對シ、其費用及ヒ償額ノ仕拂ヒヲ爲スベキコトヲ固定スルカ爲メ、預メ保證ヲ立ルヲ要ス、之ヲ裁判ノ保證ト云フ、
シユダカチニムソレトヒ

第十二條 佛蘭西人ニ嫁シタル外國ノ女ハ其夫ノ分限ニ從フ可シ、(民一九、一〇八、二二二一、二二三五、)

佛國人ニ嫁シタル外國ノ女ハ婚姻ノ取結ヒヲ爲スノ時、既ニ佛國人トナリ、永久解キ難

キ聯絡ニ因リテ、其夫ノ保護權ニ從フベキ者トス、蓋シ道理ト性理トヲ以テ其夫及其子ノ本國ヨリ他ニ本國アルヲ決シテ望マザレハナリ、又婦ハ寡婦トナルトモ佛國人タルコトヲ保續スベキコトハ、即チ千八百六十三年七月二十二日覆審院ノ裁決ヲ以テ例スベシ、曰ク佛國人ト婚姻シタルニ因リテ佛國人トナリタル外國ノ女ハ其夫ノ死亡ニ因リ佛國人タルノ分限ヲ失ハシムルト云フ法律ノ定規ナキニ依リ、佛國人ニ嫁シタル外國ノ女ハ、外國人ニ嫁シタル佛國ノ女ニ准セザルヲ得ザルコトシ、佛國ヲ去リ其舊本國ニ住所ヲ定ムルカ、若クハ他ノ事故ニ因テ舊本國ノ國屬ニ復スルノ情願ナルコトヲ證明スルニ非レバ、其舊本國ノ國屬ニ復シ佛國人タルコトヲ止ムルヲ得ス云々、

第十三條 政府ノ允許ヲ受ケ佛蘭西ニ其住所ヲ定メタル外國人ハ佛蘭西ニ居住スル時間諸般ノ民權ヲ有ス可シ(民七、)

本條ハ外國人ノ佛國ニ若干時間寄留シタル後、佛國人トナル爲ニ少シク緩漫ナガラモ容易ナル道ヲ開クナリ、一千八百六十二年十二月三十一日覆審院ノ裁決ニ曰ク森林法第百二條ニ定メタル伐木ノ權ハ、親族アル外國人ニシテ未ダ佛國ニ住居スルコトノ允許

ヲ受ケザル者ト雖モ、其者一邑内ニ眞ニ定リタル住所アル時ハ、其權ヲ有スルコトヲ得ベシ、
 人其出產ニ因テ佛國人ト爲リ、又特別ノ場合ニ於テハ出產ノ後タリモ法律ノ庇蔭ニ因テ佛國人トナリ得ベキコトハ、前條ニ就テ知り得ベシト雖モ尙千八百四十九年十一月三日ノ法律ヲ以テ規定シタル歸化ニ因テ、又各外國人佛國人トナルヲ得、然ルニ此法ハ千八百六十七年六月二十九日ノ法ヲ以テ現今其一部ヲ廢シタリ、千八百四十九年十一月三日ノ法律左ノ如シ、

第一條 歸化ハ先政府ニ於テ其外國人ノ品行ヲ吟味シタル後參議院ノ同意ノ上共和政治ノ大統領(帝國ノ時ハ皇帝)其歸化ノ願ヲ裁決允許スルナリ、但其外國人ハ左ノ二要件ヲ完備スルコトヲ要ス、

一 滿二十一歳ニ至ルノ後ニシテ、民法第十三條ニ從ヒ佛國ニ住所ヲ定ムルコトノ允許ヲ得タルコト、

二 其允許ヲ得タル時ヨリ十年間佛國ニ住居シタルコト、

歸化シタル外國人ハ、法律ノ庇蔭ニアラザレハ、民撰議院ノ議員ニ選ハル、權ヲ受ケルヲ得ズ、(國士ニシテ特別ノ法律ニ因ルニアラザレバ、立法府ノ議士トナルノ權ナキ者ハ、獨リ外國人ノ歸化シタル者ノミナリト云フ、)

第二條 然レモ佛國ノ爲大切ナル功勞アルカ、或ハ有益ナル一箇ノ工業、若クハ發明或ハ卓越ノ技藝ヲ誘導シ或ハ著大ナル商社製造所等ヲ構造セシ所ノ外國人ノ爲ニハ、定例十年ノ期限ヲ一年迄減縮スルコトヲ得ベシ、

第三條 未タ歸化ノ允許アラザル内ハ、佛國ニ住所ヲ定ムルコトニ付外國人ニ附與シタル允許ハ何時ニテモ參議院ノ意見ヲ採リタル政府ノ決議ヲ以テ之ヲ取消シ、又ハ變更スルコトヲ得ベシ、

第四條 内務卿ハ警察ノ處置ニ因リテ、各外國人ノ佛國內ニ旅行シ、或ハ住居スル者ニ對シ、直ニ佛國ノ領地ヲ立去ルベキ旨ヲ命ジ、且ツ之ヲ國境迄送致スルコトヲ得ベシ、内務卿ハ佛國ニ住所ヲ定ムルコトノ允許ヲ得タル外國人ニ付テモ同上ノ權ヲ有ス、然レモ若シニヶ月内第三條ニ掲ゲタル式ヲ以テ允許ヲ取上ケザリシ時ハ、警察ノ所

置ト雖モ其効ヲ失フベシ、又國境ニ在ル各州ニ於テハ、州長國內ニ住居セザル外國人ニ付、内務卿同様ノ權ヲ施用スルヲ得ベシ、但シ其場合ニ於テハ遲滞ハク其事由ヲ内務卿ヘ具申スベシ、

千八百六十七年六月二十九日ノ法律ハ歸化ヲ庇蔭スルヲ更ニ多シ即左ノ如シ、
千八百四十九年十一月三日ノ法律ノ第一條第二條ハ左ノ條々ヲ以テ之ニ換フ、

第一條 滿二十一歳ニ至リシ後、民法第十三條ニ照準シ、佛國ニ住所ヲ定ムルヲ允許ヲ得テ三ケ年間住居シタル所ノ外國人ハ、佛國ノ國土ノ民權ヲ悉皆全有スルノ允許ヲ得ベシ、其三年ノ期限ハ允許ノ願ヲ審判省ニ受付シタル日ヨリ起算ヘシ、又佛國政府ヨリ命ジタル職務ヲ行フカ爲メノ外國滞在ハ、佛國內ニ住居スルト同様ニ見做スベシ、歸化ハ外國人ノ品行ノ吟味ヲ遂ケタル後、審判卿ノ報告ニ因リ參議院ノ意見ヲ取リテ勅書ヲ以テ之ヲ裁決ス、

第二條 若シ佛國ノ爲メ大切ナル功勞アルカ或ハ有益ナル一箇ノ工業、若クハ發明ヲ爲シ、又ハ卓越ノ技藝ヲ誘導シ、或ハ著大ナル製造所商社又ハ盛大ナル農業開墾ヲ

爲セシ所ノ外國人ノ爲メニハ前條ニ記スル所ノ三年ノ期限ヲ、一年迄減縮スルヲ得ベシ、

第十四條 凡ソ外國人ハ佛蘭西ニ居住セサル者ト雖モ佛蘭西ニ於テ佛蘭西人ト結ヒタル契約ヲ行ハシムル爲メ佛蘭西ノ裁判所ニ呼出サレ得可ク又外國ニ於テ佛蘭西人ト結ヒタル契約ヲ行ハシム可キ爲メ亦佛蘭西ノ裁判所ニ呼出サレ得可シ(民一五、訴六九、七〇、)

不動産ニ付テノ訴訟ハ其不動産所在ノ地ノ裁判所、又動産或ハ人事ニ付テノ訴ハ訟被告入住所ノ裁判所ニ告訴スルヲ要ス、然ルニ本條ニ因レハ、外國人ハ佛國若クハ外國ニ於テモ佛國人ト取結ヒタル契約ヲ行ハシムルガ爲メ、佛國ノ裁判所ニ呼出サレ得可キ者トス、即原告人ハ被告入ノ裁判所ニ告訴スト云フ規則ニ相觸ル、場合ノ著シキ者ナリ、是ニ由テ佛國人ハ己レニ義務ヲ行フ可キノ外國人ニ政府ノ手ヲ經テ呼出狀ヲ達セシメ、己レノ住所ノ裁判所ニ訴フルヲ得可シ、然レモ其外國人佛國ニ於テ若干ノ財產ヲ有シ、其財產ヲ目的ニ裁判申渡ヲ施行ス可キ時ノ外ハ、右ノ權力ヲ用ルモ無益ナルベシ、外國ノ會社ハ佛國政府ノ許可ヲ經サル者タリトモ、外國ニ於テ佛國人ト取結ヒタ

ル契約ヲ行ハシムル爲メニハ外國人同様佛國ノ裁判所ニ訴ヘラル可キヲ得、茲ニ一ノ
 適例アリ、即チ千八百六十四年十一月十四日覆審院ノ裁決ニ曰ク、民法第十四條ニ據リ
 佛國ノ裁判所ハ、外國人佛國人ニ對シ取結ヒタル契約ヨリ起ル訴訟ヲ受理スルノ權ア
 リ、此成規ハ一人一箇ニ於ル如ク會社ニモ亦之ヲ適施ス、今被告タル魯國ノ鐵道會社ハ
 佛國ニ於テ法ニ適シタルノ存立ヲ有スル爲メ要用ナル允許ヲ證明セズト雖モ、結社ノ
 實アルヲ以テ其會社ハ契約ヲ取結ヒタル佛國人ニ對シ其契約ノ保任ヲ免レス、依テ其
 契約ヨリ生スル義務ニ付テハ必ス佛國裁判所ノ裁判權ニ從ハザル可カラスト、

第十五條 凡ソ佛蘭西人ハ外國ニ於テ外國人ト契約ヲ結ヒタル時ト雖モ其契約ノ事ニ付キ
 佛蘭西ノ裁判所ニ呼出サレ得可シ(民三、一六、訴六九、一六六、一六七、治五、六、七、)

本條ハ前條ノ規格ニ相對スル者ナリ、佛國人佛國或ハ外國ニ於テ一箇ノ外國人ト取結
 ヒタル所ノ義務ヲ行ハシムル爲メ自己ノ住所ノ裁判所ニ訴ヘ得ラレヌトスル時ハ、此
 外國人ニ對シ取結ヒタル契約ノ執行ヲ遅ル、如キ不正直ナル權力ヲ得ルニ至ルベシ、
 若シ義務ヲ得可キ者及ヒ義務ヲ行フ可キ者ノ兩人トモ外國人ナル時ハ佛國ノ裁判所ハ

左ノ二箇ノ場合ニアラザレバ之ヲ受理スルノ權ナシトス、其一其契約佛國內ニ於テ取
 結ヒタル時、其二、外國ニ於テ商業ノ爲メナシタル契約ニシテ其仕拂ハ佛國ニ於テ爲サ
 ルヲ得サル時ナリ、千八百五十八年三月十日覆審院ノ裁決ニ曰ク、既ニ婚姻成就シタ
 ル夫婦ノ居チ分ツコ付テノ訴訟ハ假令ヒ佛國ニ於テ外國人相互ヒニナシタル者ナリト
 モ佛國ノ裁判所ニ告訴スルコトヲ得スト、(夫其婦ヲ非常苛虐ニ取扱ヒ或ハ罵詈訛或ハ妾
 チ置ク等佛國ノ風俗ヲ害シ警察ノ妨ケトナル者アルハ之ヲ制スト雖モ夫レカ爲メ強
 チ其婚姻ヲ解クノ權ナシト云フノ意ナラン)(訴訟法第百六十六條見合セ)

第十六條 商業ニ管シタル事ノ外何事ヲ論セス外國人佛蘭西ノ裁判所ニ於テ原告トナルキ
 ハ其訴訟ノ費用ヲ出シ且相手方ニ償額ヲ拂フ可キ保證ヲ立ツ可シ、但シ其外國人佛蘭西
 ニ於テ此等ノ金高ヲ拂フコトヲ證スルニ足ル可キ不動産ヲ所有スル時ハ格別ナリトス、(民
 一五、二〇四〇、二〇四一、訴一六六、一六七、四二三、五一七、ヨリ五二二、千八百三十二年
 四月十七日法律十四、十八條)

主タル原告或ハ之ニ管涉スル所ノ外國人ハ、民事或ハ刑事ニ付テ訴訟ノ費用及ヒ相手

方ニ賠償ヲ拂フ爲メニ保證人ヲ立ツ可キナリ、此保證ヲ裁判[○]ノ保證ト稱シ、十分出金ノ證ヲ示シ、且ツ其力アル人ヲ以テ契約ニ附加セシムルコトニシテ、外國人ノ起シタル不相當ノ訴訟ニ付キ受ク可キ損失ノ償ヲ佛國人ニ得セシムルコトヲ確實ニスルノ目的トス、然レモ其保證ハ佛國人訴訟ノ本案ニ辨論ヲ爲スノ前即チ訴訟ノ初席ニ於テ、先ツ保證ヲ立テシム可キ旨ヲ求メサルニ於テハ其後ニ至リ之ヲ求ムルモ詮ナシトス、被告タル外國人ハ後日其訴事ニ付テ控訴ヲ爲シ原告トナル時ハ保證ヲ立ルニ及ハス、蓋シ辨護ノ自然ノ權利ハ妨碍サレ得可キ者ニアラザレハナリ、主タル原告或ハ之ニ管渉スル所ノ外國人ハ、左ノ三箇ノ場合ニ於テハ裁判[○]ノ保證ヲ立ルニ及ハス、其一、商業ニ關スル訴訟、蓋シ通商ノコトタルヤ急速ニシテ訴訟ノ費用モ多カラス且ツ各國相互ヒニ通商及ヒ信據^{クレヂット}ヲ保護スルヲ以テ肝要トスレハナリ、其二、外國人佛國內ニ不動産ヲ所持スルカ、又ハ裁判所ニテ定メタル金高ヲ預ク置クカ、又ハ政府ノ允許ヲ得テ佛國ニ住居スルカ、其三、當今佛國ト瑞西トノ間ニ存スル者ノ如ク國際法ヲ以テ保證ヲ免除スル時、然レモ國際法ヲ以テ保證ヲ免除スルコトハ唯通常各人ノ爲メ

裨益スルノミニシテ外國ニ於テ成立シ佛國政府ノ允許ヲ受ザル會社ニ及ボス可カラズ、千八百六十年八月一日覆審院ニテ裁決シタル一例アリ、曰ク民法第十五條ニ據リ佛國人ヨリ外國人ニ對シ取結ヒタル契約ヲ行ハシムル爲メ佛國人ヲ佛國ノ裁判所ヘ訴フルコトヲ得可ク且ツ此規定ハ有形人及無形人ニ適施ス可シト雖モ無形人其事ニ付キ佛蘭西法律ノ資益ヲ受クルニハセメテ其無形人ノ存在スルヲ要ス、元來無名會社(株主ノ名ヲ明示セス會社ノ名義ヲ有スル者)ハ法律上ニ存在シ法律ノ附與スル所ノ權利ナラテハ有スルコト能ハズ、抑其法律タル一國ノ政權ヲ以テ制定スルモノナレハ、其政權ノ行ハル可キ領地内ニ於テノミ其力ヲ有ス、故ニ外國ノ無名會社ハ其成立セシ國ニ於テハ何程正確ナル者タリモ佛國ニ於テハ佛國ノ法律ノ効ニ因リ其規定ニ從フニアラザレハ其會社ハ成立セサル者ト看做ス可シ、

○第二章 民權ヲ奪フ事

民權ヲ奪フコトハ佛國人タルノ分限ヲ失フコト若クハ准死ノ屬シタル刑ヲ受クルヨリ生ズル者タリシガ、千八百五十四年五月三十一日ノ法律ヲ以テ准死ヲ廢シタリ、爾來民權ヲ

奪フコトハ佛國人タルノ分限ヲ失フコトニ依テノミ生ズ、故ニ本章ノ第二款ハ既ニ廢セラレタリ、

○第一款 佛蘭西人タルノ分限ヲ失フニ因リ民權ヲ奪フ事

第十七條 佛蘭西人タルノ分限ハ左ニ記列スル諸件ニ因リテ之ヲ失フ可シ

第一 外國ニ歸化スル事

第二 皇帝ノ允許ナク外國政府ヨリ官職ヲ受クル事

第三 歸國スルノ意ナク外國ニ居住ヲ定ムル事

但シ商業ノ爲メ外國ニ居住スル者ハ歸國スル意ナクシテ外國ニ居住セシ者ト看做ス可カラズ(民八、一九、二一、千八百九年四月六日千八百十一年八月二十六日勅書、千八百十二年一月二十一日同年五月二十二日參議院意見)

人ハ同時ニ二箇ノ本國ヲ有スルコトヲ得ス、佛國人ハ其本國ヲ去リ他國ニ住居ヲ定ムルコト自由ナリト雖モ既ニ他國ニ歸化セシ上ハ直チニ佛國人タルノ分限ヲ失フ、又官職ナル者ハ施政或ハ審判ニ關カル者ト雖モ概チ誓約ヲ立ルヲ要ス、故ニ若シ佛國人外國ニ

歸化セシコトナシト雖モ概チ外國ノ官職ヲ受クル時ハ其本國ニ對シ爲サ、ル可カラザル義務ト兩立シ難キ義務ヲ受ク可キカ故ニ亦民權ヲ失ハシムルナリ、外國ニ於テ一箇ノ建造物ヲ興セシ者殊ニ其建造物商業ノ爲メナル時ハ其爲メ歸國ノ意ナキ者ト決シテ看做サス、若シ一箇ノ訴訟ニ付キ第十六條ニ掲クル所ノ裁判ノ保證ヲ立シメシカ爲メ何某ハ歸國ノ意ナシ、故ニ佛國人ノ分限ヲ失ヒシ者ナリト主張スル者ハ其事實ヲ證明スルヲ要シ、其實否ハ裁判官ノ鑑定ニ任ス、蓋シ其事實トハ外國ニ住居スル所ノ佛國人佛國ニ遺留シタル不動産ヲ悉皆賣拂ヒ外國ニ於テ不動産ヲ買入レ、又ハ婚姻シ、且ツ佛國ニ對シテノ交際ヲ殆ント全ク止メシト等チ云フ、

夫ハ其婦及ヒ幼年ニシテ未タ後見ヲ免カレサル子チ外國ニ連レ行クノ權アリ、然レモ其者自己佛國人タルノ分限ヲ失フトモ其婦及ヒ子ハ佛國人タルノ分限ヲ失フコトナシ、蓋シ夫ト雖モ其婦其子ニ具有スル所ノ至重ナル民權ヲ恣ニ剝奪スルコト能ハサルヲ以テナリ、千八百六十五年一月六日「ドレー」(地名)ノ控訴院ニ於テ人ノ婦タル者ノ爲メニ裁決シタル一例アリ曰ク、民法第十九條ニ據リ外國人ニ嫁シタル佛蘭西ノ女ハ佛蘭

西人タルノ分限ヲ失ヒ其夫ノ分限ニ從フ、何トナレハ其女自ラ好テ其國屬ヲ棄損セシ
 ナリテナリ、然ルニ其夫外國ニ歸化セシ者ハ之ト異ニシテ、其夫一己ノ所爲ヲ以テ婦
 ノ佛國人タルノ分限ヲ併セテ之ヲ剝奪スルコトヲ得サルナリ、

第十八條 佛蘭西人タルノ分限ヲ失ヒシ佛蘭西人政府ノ允許ヲ得テ佛蘭西ニ歸リ且佛蘭西
 ニ居住セント欲スルコト佛蘭西ノ法ニ背キタル官位封爵ヲ拋棄スルコトヲ申述フルニ於
 テハ何時ニ限ラス佛蘭西人タルノ分限ヲ復スルコトヲ得可シ(民一七、二〇、)

佛蘭西ノ人民ハ其舊同國人真心復歸スルアレハ喜悅シテ之ヲ待ツ、然レモ一旦民權ヲ失
 ヒシ所ノ佛蘭西人其民權ヲ復有スルモ尙ホ其外國ニ於テ生レシ幼年ノ子女ニ佛蘭西人タル
 ノ分限ヲ與フルノ効ハ決シテ有ルコトナシ、千八百五十九年六月廿三日巴里府控訴院ニ
 於テ塞納州ノ初告裁判所ノ裁判申渡ヲ確定セシ所ノ判決ニ曰ク、何某ハ佛蘭西人タル
 ノ分限ヲ復シタリ、然レモ斯ノ如ク國屬ヲ復シタルノ恩惠ハ其者一身ニ止マリテ其子
 ニ波及資益ニス、蓋シ國屬ハ其子出產ノ時其親タル者ノ情願ノ如何ニ拘ハラス得ル所
 ノ分限ナレハ、法律ヲ以テ豫定シタル場合、或ハ式ヲ全ク行フタル場合ニ於テ其子女ノ

所爲或ハ承諾ニ因ルニアラサレハ之ヲ變ス可カラス、此原則ハ民法第十條ニ於テ既ニ
 固定セラル、即チ其文ニ據リ外國人トナリタル佛蘭西人ノ生ミタル子ハ佛蘭西人タルノ分
 限ヲ求ムルコトヲ得ルト雖モ、唯々其者丁年ニ至リシ後即チ自ラ權利ヲ行ヒ得ル時ノミ
 ニ限ルト云々、

第十九條 外國人ニ嫁シタル佛蘭西ノ女ハ其夫ノ分限ニ從フ可シ

若シ其女寡婦トナリシ時既ニ佛蘭西ニ居住シ又ハ佛蘭西ニ住居ヲ定ム可キ申述ヲ爲シテ
 政府ノ允許ヲ受ケ佛蘭西ニ歸リタルニ於テハ佛蘭西人タルノ分限ヲ復ス可シ(民一二、二
 〇、二〇八、)

丁年或ハ幼年ノ佛蘭西ノ女外國人ニ嫁スル時ハ、其夫ノ分限ニ從ヒ外國ノ女トナル、而テ
 其女ハ其夫ノ國屬ト爲ルヲ得ル乎、此事タルヤ豫知シ難シ、何トナレハ其女ノ夫ノ國屬
 ナ得ルハ夫タル者ノ國法ニ關シ佛蘭西ノ法ニ關セザレハナリ、若シ佛蘭西ノ女英國人ニ嫁
 スル時ハ其女ハ直チニ英國人トナルコトナシ、之ニ因テ其女ハ曾テ國屬ヲ有セス、(近世
 迄ハ本文ノ如クナレモ今日ニ至テハ英國ニ於テモ英國人ニ嫁シタル外國ノ女ハ英國人

トナルナリ)其夫ノ成リ行キ、行狀、若クハ或ル外國ニテ今日猶ホ許シタル離婚ニ因リ其婚姻ノ解ケシ時ハ、其女佛國ニ住居スルト或ハ外國ニ住居スルトニ從ヒ直チニ佛國人トナリ或ハ其分限ヲ復有スルヲ得、

第二十條 第十條第十八條第十九條ニ記シタル場合ニ於テ佛蘭西人タルノ分限ヲ復サントスル者ハ其數條ニ必要ナリト定メタル法式ヲ行フタル上ニ非レハ佛蘭西人タル分限ノ利益ヲ得可カラス、且此佛蘭西人ハ其法式ヲ行フタル時ノ後ニ得タル所ノ權利ニ非レハ之ヲ行フヲ得可カラス、(民九、)

佛蘭西人タルノ分限ヲ得ルコト、或ハ復有スルコトハ、曾テ既往ニ及ボズノ効ナシ、

第二十一條 政府ノ允許ヲ得ズシテ外國政府ノ兵籍ニ入り又ハ外國ノ兵社ニ加リシ佛蘭西人ハ佛蘭西人タルノ分限ヲ失フ可シ、

此佛蘭西人ハ政府ノ允許ヲ得ルニ非レハ佛蘭西ニ歸ル可カラス且外國人ノ佛蘭西人トナルニ付キ必要ト定メタル規則ヲ行フニ非サレハ佛蘭西人タルノ分限ヲ復スルヲ得ス、但シ此條ニ記スル所ト國ニ叛キ兵器ヲ弄シ又ハ弄セントセシ佛蘭西人ヲ刑法ニ於テ罰ス

可キ規則ト相觸ル、コナカル可シ(民一七、刑七五)

外國ノ軍務ニ従事スル所ノ佛蘭西人ハ法律至當ノ嚴格ヲ以テ處分ス、千八百六十二年五月一日ノ宰相ノ廻達ヲ以テ羅馬教皇ノ軍ニ加ハリシ者ニ本條ノ適施ヲナセシヨアリ、其廻達ニ曰ク教皇ノ軍ニ従事シタルヲ確然タル上ハ佛蘭西人タルノ分限ヲ失ヒ是ニ由テ選舉ノ權ヲ失ヒシコトハ疑ヲ容ル可カラスト云々、元來教皇即チ加特力宗教ノ大父ノ軍ハ外國ノ軍ト稱ス可カラストノ論說盛ナリシト雖モ斷然右ノ處分ニ及ビテリ、

○第二款 審判上ノ處刑ニ因リ民權ヲ奪フ事

最初ノ民法ノ規格ニ據レハ、死罪、無期ノ懲役及ヒ流刑ニ處セラレハ准死之ニ屬セリ、蓋シ此三箇ノ刑ノ一箇ノ申渡アレハ直チニ被告人ノ婚姻解除シ親族ノ關係其他諸般ノ權利法律上悉皆消滅シ人民社會上恰モ死人ヲ以テ處置ス、故ニ其配偶者ハ更ニ他人ト婚姻ヲ結フヲ得、且ツ家産相續モ法律上ノ相續人ノ爲メニ之ヲ開始ス、然ルニ人民社會ニ於法律上ノ關係ハ一切之ヲ絶斷シ得ルト雖モ、彼ノ天然ナル宗教上ノ關係ハ絶斷シ得ルヲ能ハス、故ニ被告人ノ配偶者若シ再婚スルアレハ視テ以テ顯然姦罪中ニ生活

スル者ナリトス、此ノ如ク重大ナル事件民法教法全ク相背反シテ並行セサルハ實ニ悲
歎ニ堪ヘス、是ヲ以テ千八百五十年六月八日ノ法律ヲ以テ流刑ハ准死ノ属セサル者ト
シ、尋テ千八百五十四年五月三十一日ノ法律ヲ以テ終ニ全ク准死ヲ廢セリ、從テ民法第
二十二條ヨリ第三十三條ニ至ルヤテモ廢シタリ、

〔第二十二條 裁判所ニ於テ後條(第二十五條ヲ云フ)ニ記スル民權ニ參ス可カラサル
ニ至ル可キ刑ノ言渡シヲ受ケシ時ハ准死〕

〔第二十三條 死刑ノ言渡シヲ受ケシ時ハ准死之レニ属ス可シ〕

〔第二十四條 其他無期ノ施體(刑法ニ詳ナリ)ノ刑ノ言渡シヲ受ケシ時ハ法律上ニテ
別段定メタル場合ニ非レハ准死之レニ属ス可カラス〕(刑一八)

〔第二十五條 准死ノ言渡シヲ受ケシ者ハ己レニ属スル物ヲ所有スル權ヲ失ヒ且遺囑ヲ
ク死シタル者ニ等シク其遺物相續人其財產ヲ相續ス可シ○其者ハ人ノ遺物相續ヲ爲ス
トナ得ス又准死ノ言渡後ニ己レノ所得ト爲シタル財產ヲ遺物相續ヲ爲サシム可キ名義
ヲ以テ人ニ移シ與フルトナ得ス○其者ハ自己ノ所有スル財產ノ全部又ハ一部ヲ生存中

ノ贈遺及ヒ遺囑ノ贈遺トシテ人ニ與フルトナ得ス又養料ノ爲メニ非レハ生存中ノ贈遺
及ヒ遺囑贈遺ノ名義ヲ以テ人ヨリ財產ヲ受クルトナ得ス○其者ハ幼者ノ後見人ノ任ヲ
受ケ又ハ後見ノ職務ニ管シタル所爲ニ參加スルトナ得ス○其者ハ端式ノ證書又ハ公正
ノ證書ニ付キ其證人トナリ又ハ裁判所ニ證ヲ告ルトナ得ス○其者ハ訴訟ノ上告ス可キ
裁判所ニ於テ其者ノ爲メ別段任シタル管財人ノ紹介ニ因リ且其姓名ヲ用ユルニ非レハ
原告又ハ被告トナリテ裁判所ニ出ルトナ得ス○其者ハ民法上ノ效アル婚姻ヲ取結フ可
カラス○其者ノ以前結ヒタル婚姻ハ總テ民法上ノ效ニ付テハ之ヲ解キタルト看做ス可
シ○其者ノ配偶者及ヒ遺物相續人ハ其者ノ死去シタル時得可キ所ノ權利ヲ行ヒ且訴訟
ヲ爲スヲ得可シ〕

〔第二十六條 原告被告ノ雙方出席ノ上刑ヲ言渡シタル時ハ其言渡シヲ受ケタル者ヲ
其刑ニ行ヒシ日又ハ其罪案ノ摘撮書ヲ街衢ニ榜示シタル日ヨリ後ニ非レハ准死ト爲ス
可カラス〕

〔第二十七條 被告人抗傳(治罪治第四百六十五條以下見合)シテ刑ノ言渡シヲ受タル時

ハ其罪案ノ摘擧書ヲ街衢ニ榜示シタル日ヨリ五年ノ後ニ非レハ准死ト爲ス可カラス但シ其五年ノ時間ハ其刑ノ言渡ヲ受ケタル者裁判所ニ出席スルヲ得可シ

〔第二十八條 抗傳シテ刑ノ言渡ヲ受タル者ハ其罪案ノ摘擧書ヲ街衢ニ榜示シタル日ヨリ五年ノ時間又ハ自カラ裁判所ニ出ル迄ノ時間又ハ其五年内捕獲ヲ受クル迄ノ時間民權ヲ行フ可キノ權ヲ奪ハル可シ他人其者ノ財産ヲ支配シ及ヒ其者ノ權利ヲ行フ方法ハ失踪者(此篇第四卷ニ詳ナリ)ト同一タル可シ〕(民一〇、ヨリ一三四、治四五六、四六六、四六九、四七五、六三五、六四一、)

〔第二十九條 抗傳シテ刑ノ言渡ヲ受ケシ者ノ罪案摘擧書ヲ街衢ニ榜示セシ日ヨリ五年内ニ其者自己ノ意ヲ以テ裁判所ニ出タル時又ハ五年内ニ捕護ヲ受ケテ禁錮セラレタル時ハ以前爲シタル刑ノ言渡全ク取消トナリテ其者己レニ屬スル財産ヲ所有スルノ權ヲ復シ新クニ復タ裁判ヲ受ク可シ若シ其裁判ニ因リ猶以前ニ等シキ准死ニ至ル可キ刑ノ言渡ヲ受ケ又ハ其他准死ニ至ル可キ刑ノ言渡ヲ受ケシ時ハ其新ナル裁判言渡ヲ執行ヒシ日ヨリ准死ト爲ス可シ〕

〔第三十條 若シ抗傳シテ刑ノ言渡ヲ受ケタル者五年ノ後ニ至リ裁判所ニ出テ又ハ捕獲ヲ受タル上ニテ新ナル裁判ニ因リ其罪ノ赦宥ヲ得又ハ准死ニ至ラサル刑ノ言渡ヲ受ケシ時ハ其裁判所ニ出タル日ヨリ以來全ク其民權ヲ復ス可シ然レモ其五年ノ期限終リシ時ヨリ裁判所ニ出タル日ニ至ル迄ノ時間ニ准死ヨリ生シタル諸件ハ前ニ言渡シタル裁判ニ循ヒ之ヲ保ツ可シ〕

〔第三十一條 若シ抗傳シテ刑ノ言渡ヲ受ケシ者五年ノ宥免ノ期限内ニ裁判所ニ出ルコトナク又ハ捕獲ヲ受クルコトナク死去シタル時ハ全ク其權ヲ有シタル儘ニテ死去シタル者ト看做シ其抗傳シテ言渡サレシ刑ハ全ク取消トナル可シ但シ此規則ハ其死者ヨリ損失ノ償ヲ求ム可キ者(即チ治罪法ニ所謂民事ノ原告人)其遺物相續人ニ對シ訴訟法ニ定メタル法式ニ循ヒ訴訟ヲ爲ス可キコト相觸ル、コトナカル可シ〕(治一、二、四七八、)

〔第三十二條 何レノ場合ニ於テモ抗傳シテ刑ノ言渡ヲ受ケタル者其刑ノ期滿免除(治罪法第六百三十五條見合)ヲ得タルト雖モ唯其刑ヲ免ル、ノミニシテ其民權ヲ復ス可カラス〕(治六一九、六三五、六四一、六四二、)

〔第三十三條 刑ノ言渡ヲ受ケテ准死ニ至リシ者後ニ物件ヲ所得ト爲シ其死去ノ時尙ホ之ヲ所有シタル時ハ遺物相續人ノ虧缺シタル財産ヲ官ニ沒收ス可キ權ヲ以テ其物件ヲ官ニ沒收ス可シ、

然レニ皇帝ハ其死者ノ寡婦又ハ其兒又ハ其血屬ノ親ノ爲メ仁恤ノ處置ヲ爲スヲ得可シ〕

右第二十二條ヨリ第三十三條ニ至ル迄ヲ廢シ之ニ換フルニ左ノ數條ヲ以テス、

第一條 准死ヲ廢ス

第二條 無期ノ施體ノ刑ノ申渡ヲ受ケシ者ハ、刑法第二十八條第二十九條第三十一條ニ定メタル民權剝奪及ヒ民權ヲ行フノ禁ヲ受ク、

第三條 無期施體ノ刑ニ處セラレシ者ハ其財産ノ一部或ハ全部ヲ生存中ノ贈遺及ヒ遺囑ノ贈遺トシテ人ニ與フルヲ得ス、養料ノ爲メニアラサレハ生存中ノ贈遺及ヒ遺囑ノ贈遺ノ名義ヲ以テ人ヨリ財産ヲ受クルヲ得ス、又刑ノ申渡前ニ取極メタル遺囑贈遺ハ悉皆取消トス、但シ本條ハ一方ノ者抗傳シテ刑ヲ言渡シタル被刑

人ノ爲メニハ形代^{カギ}ヲ以テ刑ニ行ヒシ日ヨリ五年ノ後ナラデハ適施スベカラズ、

第四條 政府ハ無期ノ施體ノ刑ニ處セラレタル被刑人ニ前條ニ掲ケタル身位ノ不且ノ一部或ハ全部ヲ復有セシムルヲ得、又刑ヲ行フ場所ニ於テ民權ヲ行フノ禁ヲ受ケシニ因リ奪ハレシ所ノ民權ノ全部或ハ一部ヲ行フヲ許可スルヲ得、然レニ刑ヲ行フ場所ニ於テ罪人ノ爲シタル契約ハ、其刑ノ申渡ヲ受ケシ日ニ占有セシ所ノ財産或ハ其後期限ノ到リシ恩惠ニテ得タル財産ニ及ボスヲ得ス、

第五條 准死ノ效ハ即今准死ニ處セラレタル被刑人ノ爲メ此法律ヲ以テ消散シ、其被刑人ノ身分ハ前數條ノ規格ヲ以テ支配ス、但シ他人ノ既ニ得タル所ノ權利ニ抵觸スルヲナシ、

第六條 此法律ハ其下達ノ前ニ犯シタル重罪ノ爲メ流刑ノ申渡ヲ受ケタル者ニ適施ス可カラズ、

○第二款 身上證書(アクトドレタシヅール)(千八百三年三月十一日決定同月二十一日下達、)

佛語ニテ「アクト」ト云フ詞多クハ一箇ノ所爲ヲ指ス爲メニ用キレモ茲ニハ一ノ書ヲ指スニ用キル、即チ一箇ノ事蹟ヲ證スル爲メニ專供スル文字ノ器ナリ、「エターシヴキール」ト云フ詞ハ一箇ノ人ノ「コンシジョン」(形狀)即チ民事ノ社會中ニアリテノ分限ヲ指示スニ用キ「アクトドレターシヴキール」トハ即チ專任ノ官吏ニ於テ調製シタル書類ニテ人ノ身上ノ有様トナル所ノ重モ立タル事變ヲ證スル者ナリ、蓋シ其事變トハ、第一、出産、之ニ因テ私生ノ子ヲ認ムルコト、公生ノ子ノコト、養子ノコトヲ證ス、第二、婚姻、第三、死亡ナリ、此三事ノ精備且ツ公正ナル確證ハ治安上頗ル緊要ノ事タリ、例ヘハ此レニ據テ人ノ婚姻シ或ハ契約ヲ取結フ可キ年齢ナルヤ否ヲ定メ、又一男一女同居シテ生活ヲ爲ス者ノ子ノ公生ナルヤ私生ナルヤ、如何ナル時遺產相續ヲ開クヤ、如何ナル人遺產相續シ得ルヤヲ定ムルニ供ス、身上證書ヲ規則ノ如ク調製スル時ハ、各人民事上生活ノ形蹟ヲ知り、且其形蹟ヲ證スルニ容易ナル方便トナリ、彼ノ證人ヲ以テ確證ヲ得ルノ困難ニシテ且ツ不十分ナルノ患アルコトナシ、然ルニ其身上證書タルヤ一舉ニシテ今日ノ如キ整齊ニ至リシニアラス、千五百三十九年「フランソア」第一世「ヴロレール」

テン」(地名)ノ命令書ヲ以テ「キユレ」(僧官)及ヒ「ビケール」(同上)ニ「バプテーム」(洗禮即チ初生ノ兒子ニ行フ所ノ宗教上ノ儀式)及ヒ死亡者ノ記冊ヲ調製ス可キコトヲ命シ、千五百七十九年「ヘンリー」第三世「ブローア」(地名)ノ命令書ヲ以テ「キユレ」及ヒ「ビケール」ニ「バプテーム」婚姻及ヒ埋葬ノ記冊ヲ調製ス可キコトヲ命シ、千六百七十九年「ナント」(地名)ノ命令書ヲ以テ耶穌新教ノ僧徒ニ其身上ノ記冊ヲ調製ス可キコトヲ命シタリ、然ルニ千六百八十五年ニ此命令書ヲ廢シ、新教ノ宗徒ニ命シテ更ニ舊教ノ僧徒ヨリ「バプテーム」ノ式ヲ受ケシメ、之ニ違背スル者ハ身上ノ證ヲ失ヒ嫡出ノ子タルノ分限ヲ有セシメサリキ、千七百三十六年「ルイー」第十六世「キユレ」及ヒ「ビケール」ニ命シテ身上證書ノ正本ニ通テ調製セシメ、裁判所ノ第一等ノ士官ヲシテ之ニ記號ヲ附シ姓名ヲ手署セシメ一通ヲ裁判所ノ書記局ニ納メシメタリ、千七百八十九年「ルイー」第十六世裁判官ニ新教宗徒ノ身上證書ノ記冊ノ調製ヲ委任シ、千七百九十二年「アッサンブレイ」コンストチヌアント」(國法會議)ヨリ官府ト宗教トノ分立ヲ布告シ、邑治官吏ニ身上證書ヲ調製ス可キ旨ヲ任シ、千七百八十六年四月ノ法ヲ以テ身上證書ノ登記ヲ邑

長及ヒ副邑長ニ任シタリ、是即チ今日行ハル、所ノ者ナリ、

○第一章 総規則

第三十四條 身上証書ニハ官吏其証ノ申述ヲ受タル年月日時ト其書ニ記ス可キ人ノ姓名年齢職業住所トヲ記ス可シ(民四二、五七、七六、七九、八八、以下)

身上証書ニハ官吏其申述ヲ受ケタル年月日時トモニ詳記ス、是ニ由テ若シ偽造アル時ハ何某ナル者ハ何年何月何日何時某所ノ身上証書ニ登録アルヲ以テ、其者其時他ノ某邑ニハ在ラサリシヲ証スルニ至便ナリトス、

第三十五條 身上証書ノ官吏ハ其証書中ニ出席ヲ爲シタル者ノ申述ヘタル所ノ外何事ヲ論セス註解又ハ説明ノ爲メ記ス可カラス(民四二、五五ヨリ五七、七八、八五、三三五、三四〇、三四一、一三四七、)

身上証書ノ官吏ハ邑長或ハ其補佐ナリ、若シ邑長或ハ其補佐ノ在ラサル時ハ、邑會議員ノ内其選舉ノ時投票ノ數ニ因リ製シタル表ノ順次ニ從ヒ其代理ヲ爲ス可シ、而シテ其身上証書ノ官吏ハ証書中ニ申述ヘサル可カラサルヲナラデハ記スルヲ許サス、蓋シ

◆立法者人ノ姦通密通或ハ別段認メノナキ私生ノ子ノ父ヲ公示スル等ノ如キ風俗ヲ損シ名譽ヲ害ス可キノ記事ヲ防制セントスルノ旨意ナリ、

第三十六條 本人(事ニ管シタル者)自カラ出席スルニ及ハサル場合ニ於テハ別段ノ公正ノ証書ヲ以テ任シタル名代人ヲ出スヲ得可シ(民四四、七五、二九四、一三一七、一九八四、一九八七、)

事ニ管シタル者トハ證書ニ記載セラレ、者カ、又ハ出産ノ申述ヘテ爲スヲ任セラレタル者ノ類ナリ、夫婦トナル可キ者婚姻ノ契約ヲ爲スニハ本人自カラ出席スルヲ要ス、其他ハ名代人ヲ出スヲ得、然レモ其名代ハ二箇ノ性質ヲ備フルヲ要ス、第一、名代タル事ノ特別ナルヲ、即チ名代証書ニ特ニ爲サシム可キ申述ヘテ記スルヲ、第二、名代証書ノ公正ナルヲ、即チ名代證書ハ其權アル官吏ニテ記シタルヲ、此等ノ証書ハ總テ「ノテール」(証書人)ノ記スル所ノ者トス、

第三十七條 身上証書ノ証人ハ本人ノ血屬タルト否トヲ問ハス二十一歳以上ノ男ニ限ル可シ但シ其証人ハ事ニ管シタル者ノ擇ニ任カス可シ(民二五、九七五、九八〇、刑二八、三四、)

四二、四三)

身上證書ヲ記成スルニハ詐偽ヲ豫防センガ爲メニ証人ノ出席ヲ要ス、其証人ハ申述人ノ相違ナキヲ証シ、且ツ身上證書ノ官吏ノ證據ヲ立ントスル事ヲ確實ニス、而シテ其証人ハ少クトモ二人以上タルヲ要ス、但シ婚姻ノ證書ニハ四人以上(第七十五條見合)佛國領地外ニ於テ軍人死去ノ證書ニハ三人以上(第九十六條見合セ)ノ証人ヲ要ス、身上證書ノ証人ハ唯々丁年ノ男子タルヲ要ス、因テ本條ニ掲ケルガ如ク事ニ管シテル者ノ親族ヲ証人トナスヲ得、何トナレハ契約及ヒ遺囑ノ事ニ付テハ親族ノ證明ハ偏頗ノ恐レアリト雖モ身上證書ニ付テハ其證書ヲ真正ニ爲ス一箇ノ保証トナレハナリ、又身上證書ノ証人ハ法律ニ於テ佛蘭西人ノ分限アル者ニ限ラザルニ因リ外國人ヲモ証人ト爲スヲ得、

第三十八條 身上證書ノ官吏ハ其證書ヲ出席シタル本人又ハ其名代人ト証人トニ讀ミ聞カス可シ、

又其證書ニハ之ヲ讀ミ聞カスル式ヲ行ヒシヲ記ス可シ(民三六、三七、三九、五〇、刑一)

四六)

身上證書ノ官吏ハ出席人即チ申述人及ヒ証人ニ其證書ヲ讀ミ聞カセ其申述ヘタル所ヲ正實ニ記録セシヲ明知セシメ證書中ニ讀ミ聞カセテ爲シタルヲ記載スベシ、若シ官吏讀ミ聞カセテ爲サスシテ證書ニ讀ミ聞カセシ旨ヲ記載スルヲアレハ公正ノ書類贋造ノ罪ヲ以テ終身懲役ノ刑ニ處セラル可シ、

第三十九條 此證書ニハ身上證書ノ官吏ト出席ヲ爲シタル者及ヒ証人トニテ其姓名ヲ手署ス可シ若シ其出席ヲ爲シタル者及ヒ証人其姓名ヲ手署スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ記ス可シ(民三八、五〇、)

身上證書ニハ毎子ニ身上證書ノ官吏其姓名ヲ手署スルヲ要ス、又出席人及ヒ証人自ラ其姓名ヲ自署スルヲ得サルカ或ハ姓名ヲ自署スルヲ知ラサル時ハ其旨ヲモ證書ニ記ス可シ、

第四十條 身上證書ハ各邑ニ於テ設ケタル一箇又ハ數箇ノ簿冊ニ記ス可シ但シ其簿冊ハ各二冊ツ、備ヘ置ク可シ(民四二、五〇、五二、六三、一七一、一九八、刑一九二、)

人口少キ邑ニ於テハ一箇ノ簿冊ヲニダ通り備ヘ置キ出產婚姻死去ヲ合記シ、人口多キ邑ニ於テハ三箇ノ簿冊ヲ各ニダ通り備ヘ置キ出產婚姻死去ヲ分記シ總テ簿冊ハニダ通り共同一ノ手署ヲ爲シ同一ニ其公正ノカモ存ス、又毎邑別ニ一箇ノ簿冊一ト通りヲ備ヘ置キ專ラ婚姻公告ノ爲メニ供ス、

第四十一條 其簿冊ハ初告裁判所(即チ郡裁判所)ノ上席人又ハ其上席人ニ代ル可キ裁判役其初葉ト冊尾トニ記號ヲ附シ且各葉ニ其姓名ノ手署ニ代用スル^{カキハシ}艸名ヲ記ス可シ(民六三)

簿冊ニ記號ヲ付スルトハ簿冊ノ各葉ニ字綴リヲ以テ番號ヲ付スルコニテ後日其簿冊ノ紙葉ヲ増減スルコヲ得ザラシメンガ爲メナリ、各葉ニ姓名ノ手署ニ代用スル^{カキハシ}艸名ヲ爲スハ紙葉ヲ變換スルコヲ得サラシメンカ爲メナリ(「ログロン」ニ據レハ初葉ト末葉トニ記號ヲ付ストハ第一葉ト最尾葉トニ紙數ヲ示スコニテ例ヘハ紙數四十枚ノ簿冊ナレハ初葉ニ第一葉ト記シ尾葉ニ第四十葉ト記ス可キナリト)

第四十二條 身上證書ハ其簿冊ニ空行ナク相連接シテ之ヲ記シ且塗抹及ヒ端書ノ符號モ本

文ト同シク之ヲ認メテ其姓名ヲ手署ス可シ又其書中ニ畧語ヲ用フ可カラス且其年月日時ハ數字ヲ用ヒ記ス可カラス(民三九、五〇、)

身上證書ニハ其調製ノ後ニ至リ如何ナル事ヲモ記入スルコヲ得セシメザルカ爲メニ證書中少シモ空白ナク記ス、又塗抹及ヒ端書モ詐偽ヲ以テ如何ナル變更ヲモ爲シ得サラシメンカ爲メニ本文同様之ヲ證認シ必ズ姓名ヲ手署シ且ツ年月日時ハ其變換ヲ爲スヲ得サラシメンガ爲メニ數字ヲ用キスシテ字綴ノ詞ヲ以テ記スルヲ要ス、

第四十三條 身上證書ノ官吏ハ歳終ニ至ル毎ニ其證書ヲ修整シテ一月内ニ其一冊ヲ邑ノ書房中ニ藏メ又一冊ヲ初告裁判所ノ書記局ニ藏ム可シ(民五〇、五三、)

身上證書ノ官吏ハ年ノ最終ノ證書ヲ登記シタル後直チニ「何年何月何日子等本簿ヲ修整ス」ト云フ文ヲ記シ其尾リニ姓名ヲ手署シテ簿冊ヲ脩整ス、而シテ翌年ノ第一月中簿冊ノ一通ヲ邑ノ書房中ニ藏メ他ノ一通ハ初告裁判所ノ書記局ニ送達シテ收藏セシム、蓋シ右ノ如ク爲ス時ハ二通共同時亡失スルコトハ、決シテ有ルマシキトノ注意ナリ、各年ノ終リニ身上證書ノ官吏ABCノ次序ヲ以テ姓ヲ記シ證書ノ一覽表ヲ製ス、初告

裁判所ノ書記局ニ於テハ十年毎ニ各邑内ノ出產婚姻死去私生ノ子ノ認メ及ヒ養子ノ表ヲ製シ、更ニ三通ノ副本ヲ作り一通ハ書記局ニ存藏シ、一通ハ本州ノ州長ニ送致シ、一通ハ本邑ノ邑長ニ送致ス、(一千八百七年七月二十日ノ勅書)

初告裁判所ノ書記局中身上證書ヲ存藏スル場所ニハ「ビナグラヒーデマルヘテウール」(惡人傳)一名「カジエーシユヂシエール」(裁判記録)ト名クル者アリ、蓋シ惡人傳ナル者ハ一千八百五十年十一月六日審判宰相ノ廻達ニ據リテ設ケシ者ニテ、第一一郡内ニ於テ生レシ各人ニ向テノ輕重罪犯及ヒ軍律ノ申渡ヲ受ケシ者、第二一郡内ニ於テ生レシ各人ニ向テ加ヘタル紀律ノ方法及ヒ家資分散ノ公告、第三被刑人及ヒ家資分散人ノ復權ヲ記録ス、抑此記録ノ要旨ハ裁判所へ送致シ來ル所ノ惡人ノ其從前ノ事歴ヲ知ラシカ爲メト處刑ニ因リテ權利ノ幾分ヲ缺虧スルガ爲メ其者選舉官職及ヒ軍人ノ分限ヲ得ルヲ能ハサラシメンカ爲メトナリ、マダ、此記録ハ人民ノ爲メ大ニ便利スル所アリ、即チ其記録ニ載スル所ノ者ハ他人ヨリ之ヲ公知スルヲ得レハナリ、例ヘハ婚姻取結ヒノ舉、又ハ或ル人ノ分限及ヒ其人ノ無瑕ナルヲ契約ノ爲メ緊要ノ條件トナル所ノ會

社取結ヒノ舉ニ付キ其人ノ從前ノ事歴ヲ知ル爲メ至當至重ノ目途アランニ其者其目途ヲ示シテ本人出產ノ地ノ裁判所ノ檢事ニ願ヒ出ルヲ得、然ル時ハ檢事裁判所ノ書記官ニ命シテ願人ニ本人ノ事歴ノ寫書ヲ附與スルヲ許可ス、

其寫書ノ手数料ハ調査及ヒ謄寫料七十五「サンチーム」印紙料五十「サンチーム」登記稅一「サンチーム」十「サンチーム」總計二「フラン」三十五「サンチーム」ナリ、

第四十四條 名代人ヲ任スル證書及ヒ其他身上證書ニ添ヘ置ク可キ書類ハ之ヲ出シタル人ト身上證書ノ官吏トニテ其姓名ノ手署ニ代用スル艸名ヲ書シタル後身上證書ノ簿冊ノ一冊ト共ニ之ヲ初告裁判所ノ書記局ニ藏ム可シ(民三六、五三、六八、七〇、七三、)

身上證書ニ添ヘタル書類ニハ其確實ナルヲ証スルカ爲メ一々姓名ニ代用スル艸名ヲ記ス可シ、

第四十五條 何人ヲ論セス身上證書ヲ記シタル簿冊ヲ管守スル者ヨリ其簿冊ノ抄出書ヲ受取ルヲ得可シ但シ此抄出書ノ其簿冊ト異ナリタルヲナシ且初告裁判所ノ上席人又ハ上席人ニ代ル可キ裁判役ノ確的ナリト爲シタルモノハ贋造ノ訴アル迄之ヲ真正ナリト爲ス

可シ(民九九ヨリ一〇一、三一九、一三一七、一三一九、一三三四、一三三五、訴二四五、治四四八、四四九、刑一四五ヨリ一四九、三四五、三六三、)

證書人ノ記シタル證書類ハ財産上夫婦ノ社會ヲ規定スル婚姻ノ契約書ヲ除クノ外其證書ニ管係シタル一八又ハ其代理人ニアラサレハ其證書ノ寫書ヲ得ルノ權ナシ、身上證書ハ則チ然ラズ、世治又ハ私益ノ爲メ何某ハ丁年ナルヤ否ヤ婚姻セシヤ否ヤ死去セシヤ否ヤヲ知ルコトヲ得ルハ資益アリトスル時ハ何人ニテモ出產婚姻死去ノ證書ノ抄出書ヲ求ムルコトヲ得、但シ其資益ノ事由ヲ示スニ及ハサルコトス、

身上證書ノ簿冊ノ抄出書ハ一箇ノ身上證書ノ全文ヲ其儘寫シ取り其簿冊ノ管守人ニ於テ其原本ト相違ナキコトヲ證認シ姓名ヲ手署シテ交付スル者ナリ、管守人トハ證書ヲ製シタル邑ノ邑長又ハ初告裁判所ノ書記役ヲ云フ、而シテ此抄出書ハ其郡外ニ於テハ「レガリザーシヨン」(法ニ適シ確的ナリト爲スコ)ヲ受クルニアラザレバ眞正ノ者トセス、法ニ適シ確的ナリト爲スコハ抄出書ノ尾端ニ手署シタル管守人ノ姓名ハ正實ナルコトヲ其權ノアル法官ニテ確証スルコトニシテ本條ニ據レハ初告裁判所ノ上席人又ハ之ニ代ル

可キ裁判役ニアラサレハ此式ヲ執行ヒ得サル者トス、然ルニ裁判所遠隔ノ邑ノ住民ハ此確的ヲ得ンカ爲メ無用ノ往復ヲ煩ハシ費用ヲ糜シ且ツ遲緩ノ憂アルヲ免カンサリシニ因リ千八百六十一年五月二日ノ法律ヲ以テ之ヲ正救セリ、其法律左ノ如シ

第一條 初告裁判所々在ノ地外即チ裁判所管轄内ノ首府ノ外ニ在ル所ノ治安裁判役ハ裁判所ノ上席人同様ニ其管内ニ住スル証書人ノ手署及ヒ管内ノ邑ノ身上證書ノ官吏ノ手署ニ付キ「レガリザーシヨン」ヲ與フルコトヲ得、

第二條 證書人及ヒ身上證書ノ官吏ハ「レガリザーシヨン」ヲ與フルコトヲ得ル所ノ治安裁判所ノ書記局へ自己ノ姓名ノ手署及ヒ其艸名ノ影鑑ヲ差出置ク可シ、

第三條 治安裁判所ノ裁判役ハ各「レガリザーシヨン」ノ爲メ二十五「サンチーム」ノ手数料ヲ受取ルコトヲ得、然レモ若シ其證書或ハ抄出書ニ印紙ヲ用ヰルニ及ハサル時ハ手数料ヲ受取ル可カラズ、

右抄出書原文ニ相違ナク且ツ該法官ニテ法ニ適シ確的ナリト爲シタルハ正實ナル者ナリト思度ス、而シテ此身上證書ノ官吏見聞シタリト確示スル所ノ者ニ付テハ公正ノ証

書贖造ノ訴ヲ爲スニアラサレハ其書ニ對シ故障ヲ述フ可カラス、然レモ出席人ノ申述
ヘ中ノ事ニ付テハ公正ノ證書贖造ノ訴ノ如キ費用多ク且至難ナル方法ニ據ラス唯々尋
常ノ方法ヲ以テ故障ヲ述フルヲ得、

一箇ノ身上證書ノ「レガリザーション」ヲ得ルニ付テノ費用ハ初告裁判所或ハ治安裁判
所ノ書記役ニハ手数料トシテ二十五「サンチム」ヲ收ム可シ、又一千八百七年七月十二
日ノ勅書ヲ以テ邑ノ利益ノ爲メ取立ル所ノ者下ノ如シ、出產死去或ハ婚姻ノ公告ノ證書
ノ寫書ノ爲メ各々三十「サンチム」、人口五萬以上ノ市街ニ於テハ五十「サンチム」、
婚姻又養子ノ證書ノ寫書ノ爲メ各々六十「サンチム」、人口五萬以上ノ市街ニ於テハ
一「フラン」、巴里府ニ於テハ一「フラン」五十「サンチム」トス、而シテ此外稅ヲ徵收ス
ルコトヲ禁ス、背ク者アルニ於テハ收斂ノ刑ニ處ス、故ニ右各證書ノ寫書ノ脩整又ハ之ヲ
簿冊ニ登記スルコトノ爲メ徵稅スルコトナシ、然レモ官府ノ利益ノ爲メ別ニ印紙ノ代價ヲ
徵收ス、其代價ハ各證書ノ爲メ一「フラン」五十「サンチム」ナリ

第四十六條 若其簿冊ノ未タアラサル時又ハ亡失セシ時ハ本人ヨリ證書又ハ証人ヲ以テ其

旨ヲ證スルコトヲ得可シ但シ此場合ニ於テハ死シタル父母ノ記シタル簿冊及ヒ書面又ハ
証人ヲ以テ婚姻出產死去ヲ証スルコトヲ得可シ(民一九四三二三、三二四、三四一、一三三
一、一三四八、訴二五二、二五三)

元來人々ノ分限ハ身上證書ニ據ラサレハ明證スルコトヲ得ズ、然ルニ此規則ハ極メテ
稀ナル二箇ノ場合ニ於テ取除ケアリ、其一身上證書ノ簿冊ノ未タ備ハラサル時、其二
身上證書ノ簿冊ノ亡失セシ時、又裁判事例及ヒ訓條ニ因レハ不規則ニ保存セシ簿冊
モ亦取除ケナリトス、右等ノ場合ニ際シタリト申立ツル所ノ者ハ先ツ其證據ヲ示サ
ンコトヲ要ス、隨テ死去若クハ生存ノ父母ノ記シタル書類或ハ証人ヲ以テ證據ノ根據
トナスヲ得、

第四十七條 佛蘭西人又ハ外國人ノ外國ニ於テ記シタル身上證書ヲ其國ニ於テ用フル所ノ
法式ニ循ヒ記シタル時ハ之ヲ真正ノモノト爲ス可シ(民三、四八、一七〇、九九九)
身上證書ノ爲メ遵行ス可キ法式ハ場所ハ證書ヲ支配スト曰フ格言ヲ適施シ其證書ヲ製
スル國ノ法式ニ遵フ可シ、然レモ其法式ニ遵ヒシ者ハ佛國ニ於テ真正ノ者ト爲ス可シ

ト雖モ其證書ハ必ス法ニ適シタルノ結果ヲ生ス可キ者ト爲ス可カラス、例ヘハ外國ニ於テ執行ヒタル一箇ノ佛國人ノ婚姻ハ縱令ヒ其外國ニ於テ施用スル法式ニ遵ヒタルモノナリトモ若シ其者佛國ノ住所ニ於テ爲シタル公告ニ先ダナタルカ或ハ尊族ノ親ノ許諾ヲ要スル場合ニ於テ其許諾ナカリシ時ハ、其婚姻ハ成リ立タサル者タルノ疵疫アルヲ免カレズ、(第四百十八條第七十條第百八十二條見合セ)

第四十八條 外國ニ在ル佛蘭西人ノ身上證書ハ佛蘭西ノ國際懸官吏又ハ領事官佛蘭西ノ法ニ循ヒ其申述ヲ受ケテ之ヲ記シタル時法ニ適シタルモノト爲ス可シ(民四七、一六五、一七〇、)

國際懸ノ官吏及ヒ領事官ノ權限ハ身上證書ニ於テハ佛蘭西ノミニ關係スル所ノ場合ニ止マル、若シ夫婦トナラントスル者ノ一人外國人ナル時ハ其婚姻ハ該國ニ於テ施用スル法式ニ遵ハサレハ外國ニ於テ其婚姻ヲ行フコトヲ得可カラス、

第四十九條 身上ノ證ヲ以前簿冊ニ記シタル他ノ身上ノ証ノ端ニ記入ス可キ時ハ事ニ管シタル者ノ願ヲ以テ身上證書ノ吏官ハ其現今用フル所ノ簿冊又ハ既ニ邑ノ書房中ニ藏メ

シ簿冊ニ之ヲ記入シ又初告裁判所ノ書記官ハ既ニ其書記局ニ藏メシ簿冊ニ之ヲ記入ス可シ、但シ初告裁判所ノ書記局ニ藏メシ簿冊ニ其記入ヲ爲サシムル爲メ身上證書ノ官吏ヨリ其裁判所ノ檢事ニ三日内ニ其報告ヲ爲シ檢事ハ二箇ノ簿冊ニ互ニ同一ノ方法ヲ以テ記入ス可キコトヲ監察ス可シ(民五〇、六一、一〇一、訴八五七、)

若シ一箇ノ私生ノ子其出產ノ證書ヲ記シテ後認メラル、時其認メハ二箇簿冊ニ其認メノ月日ヲ記入シ、其出產ノ證ノ端書ニ其旨ヲ記録ス可シ、此二箇ノ簿冊猶ホ身上證書ノ官吏ノ手許ニ在ル時間ハ自ラ其旨ヲ記録シ、若シ、既ニ手許ニ在ラサル時ハ邑ノ書房ニ藏メタル簿冊ニ自ラ之ヲ記録シ、且ツ速ニ初告裁判所ノ書記官ヘ其旨ヲ報告ス可シ、而シテ初告裁判所ノ書記官ハ其報知ヲ得レハ其書記局ニ藏メタル簿冊ニ同様ノ記録ヲ爲ス可シ、

第五十條 若シ前數條ニス記ル所ノ官吏等其規則ニ背ク事アル時ハ初告裁判所ヘノ訴訟ヲ受ケ百「フランク」(一「フランク」ハ大凡我二十錢ニ當ル)ニ過サル罰金ノ言渡ヲ受ク可シ(治罪費用則一三二、)

身上證書ノ記載ニ不規則ナルコトアリトモ之ガ爲メ其證書ヲ無キ者ト爲サズ、何トナレハ法式ノ不注意ヲ以テ人ノ分限ヲ消滅シ得サレハナリ、然レモ其身上證書ノ官吏ハ其不注意ナリシヲ以テ裁判官ノ監定ニ因リ百フラン以内ノ罰金ニ科セラルベシ、

第五十一條 若シ身上證書ノ簿冊中ニ漫ニ毀損變更シタル箇條アル時ハ之ヲ管守スル官吏民事上ニテ其責ニ任ス可シ但シ他ニ變更シタル者アリテ其官吏ヨリ其者ニ對シ償ヲ求ム可キ道理アル時ハ其償ヲ求ムルコトヲ得可シ(民五二、一三八二、一三八三、)

身上證書ノ官吏及ヒ初告裁判所ノ書記役ハ務メテ其管守スル所ノ簿冊ヲ保全スルコトヲ要ス若シ他人漫ニ簿冊ヲ變更スルコトアリモ官吏ノ過失ト看做シ其變更ヨリ生スル損失ニ付テハ其損失ヲ受ケシ人ニ對シ民事上ノ責任ヲ受ク(賠償ノ責ニ任スルナリ)然レモ其身上證書ノ官吏又ハ初告裁判所ノ書記役ハ漫ニ變更セシ當人ニ對シ損害ノ償追徴ノ訴ヲ爲スコト得、

第五十二條 身上證書ヲ變更シ又ハ之ヲ贗造シ又ハ其證書ヲ零紙ニ記シ又ハ其證書ヲ記ス可キニ非ザル簿冊ニ記シタル事アル時ハ此等ノ事ヲ爲シタル者ヨリ本人ニ對シ損失ノ償

ヲ出ス可シ、但シ此規則ト刑法ニ書スル所ノ罰則ト相觸ル、コトナカル可シ(民一一、四九、二二四、二二五、治四四八、四四九、形一四五ヨリ一四八、一九二)

身上證書ノ毀損又ハ其變更ハ贗造ト殊ニシテ必スシモ惡意アリテ爲セシ者トセズ、然レモ畢竟管守人ノ懈怠ニ歸ス可キナレハ民事上ノ責任ヲ免カレス、公正ノ證書ノ贗造官吏ノ所爲ナル時ハ無期ノ懲役ニ處セラレ他人ノ所爲ナル時ハ有期ノ懲役ニ處セラレ(刑法第四百四十五條第四百七條見合)又身上證書ヲ零紙ニ記スル時ハ禁錮及ヒ罰金ヲ以テ罰ス可キ一箇ノ輕罪犯トス、(刑法第九十二條見合セ)

第五十三條 初告裁判所ノ檢事ハ簿冊ヲ其裁判所ノ書記局ニ藏ムル時其簿冊ヲ檢視シテ其檢視シタル事ヲ簡易ニ調書ニ記シ若シ身上證書ノ官吏ニ註誤又ハ輕罪アル時ハ其旨ヲ申立テ其官吏ニ罰金ヲ言渡ス可キ事ヲ求ム可シ(民五〇、九九、治二二、三二、三三四七、一八二、治罪費用則一、二一、)

檢事ハ裁判所ノ書記局ニ藏ヤル所ノ一通ノ簿冊ヲ檢視スルノミナラス邑ノ書房ニ留メ置ク所ノ者ヲモ檢視シ若シ註誤或ハ輕罪ヲ發見スル時ハ前以テ政府ヨリノ許可ヲ要セ

ス犯人ヲ裁判所へ訴出ス、檢事ハ直チニ世治ニ關スル所ノ事件ニアラサレハ證書ノ更改ヲ求ムルヲ得ズ(第九十九條見合セ)

第五十四條 何レノ場合ニ於テモ初告裁判所ニ於テ身上證書ニ管スル諸事ヲ審判シタル時ハ之ニ管シタル者其言渡ヲ控訴スルヲ得可シ(民一〇〇、一三五、一、訴四七四、四七五、)

初告裁判所ニ於テ身上證書ニ關係シタル爭論ノ告訴ヲ受ケ裁判シタル時、其裁判ノ申渡ハ如何ナル場合ニテモ上等裁判所ニ控訴スルヲ得、何トナレハ身上證書ノ事ニ付テハ常ニ監定ス可カラサル重大ノ資益ニ關係スルヲ以テナリ、

○第二章 出產ノ證書

出產ハ親族中及ヒ人民會社中ニ於テ新ニ人タルノ權利ヲ授クル者ナレハ公正ノ證書ヲ以テ其時期ヲ定ムルヲ緊要トス、

第五十五條 出產ノ申述ハ出產ノ時ヨリ三日内ニ之ヲ其地ノ身上證書ノ官吏ニ爲シ且其官更ニ其生レタル子ヲ示ス可シ(民五六、五九、九二、刑三四六、)

出產ノ申述ハ子ノ公生タルヲ、及ヒ遺産相續及ヒ遺物ヲ受クルノ身位ニ關シ、甚タ重

大ナル結果ヲ有スル者ナリ、故ニ其申述ノ精密、且ツ正實ナルヲ證スルニ足ラシメンカ爲メ、出產後三日内ニ必ス其申述ヲ爲スヲ要ス、若シ身上證書ノ官吏出席人ノ陳述スル所ニ據リ、或ハ他ノ方法ニ據リテ、其兒子既ニ三日ヲ過キタリト推知スルトキハ、別段裁判ノ申渡ヲ以テ其出產ノ記入ヲ爲スヘキヲ許可スル迄ハ、之ヲ出產ノ證書ノ簿冊ニ記入スルヲ拒ムヲ得(共和政治第十一年二月十二日參議院ノ意見)又次條ニ言ヘル所ノ出產ノ申述ヲ爲ス可キ人等、若シ三日内ニ申述ヲ爲スヲ怠タル時ハ六日ヨリ少カラス六月ヨリ多カラサル禁錮ノ刑、及ヒ十六「フラン」ヨリ少カラス三百「フラン」ヨリ多カラサル罰金ニ處セラル可シ(刑法第三百四十六條見合セ)

邑長ハ其子ノ生、死、齡、及ヒ男タルヲ及ヒ女タルヲ証ス可シ、而シテ本條ニ依レハ出產シタル子ハ必ス邑長ニ示ス可キナリ、然レモ若シ其子疾病若シクハ、嚴寒等ノ如キ止ムヲ得サル事故アリテ外出シ難キ場合ニ於テハ、邑長簿冊ヲ携へ産所ニ至リ出產ノ證書ヲ記ス可シ、

未タ出產證書ニ記セサル子ノ死シタル者ヲ示ス時ハ、邑長ハ死去ノ證書ノ簿冊ニ出產

ノ證書ト死去ノ證書ト兼スル一箇ノ證書ヲ記録シ、其書中ニ其子ハ死シテアリシ旨
ヲ明記シ、且ツ其子ノ父母ノ姓名住所ト其子分娩ノ年月日時トヲモ併記ス可シ(千八百
〇六年七月四日ノ勅書)

第五十六條 出産ハ父ヨリ其申述ヲ爲ス可シ若シ父ノアラサル時ハ内科外科ノ醫師、産婆、
下等醫師(醫院學士ノ級ニ登ラサル者)又ハ其他出産ノ時立會ヲ爲シタル者ヨリ之ヲ申述
フ可シ若シ母其住所外ニ於テ出産シタル時ハ其出産ヲ爲シタル所ノ者ヨリ申述フ可シ、
出産ノ證書ハ證人二員ノ面前ニ於テ直チニ之ヲ記ス可シ(民三七、三八、刑三四六、)

子ノ出産ヲ三日内ニ申述フ可キ義務アル者ハ第一父、第二若シ父居合セサルカ差支アル
カ、或ハ知レサルカノ場合ニ於テハ、醫師、産婆、看病人、其他出産ニ會シタル總テノ人、
第三若シ母其住所外ニ於テ出産シ父ノ居合セサル時ハ其出産ヲ爲シタル家ノ主者ニ擔
當セシム、右ニ記列シタル者若シ違背スルニ於テハ禁錮及ヒ罰金ノ刑ニ處ス、(刑法第
三百四十六條見合セ)醫師、産婆、看病人、其他出産ニ會セシ、人及ヒ出産シタル家ノ主
者ヨリ出産ノ申述ヲ爲ス可キコトハ、父ノ居合セサルカ或ハ差支アルカ或ハ知レサルカノ

場合ニ限ルト雖モ、其義務ハ以上ノ一切ノ人ニ免カル可カラザル者トス、千八百五十
九年十一月十二日覆審院ノ裁決アリ(零之)右ニ記列シタル人々ノ外ハ總テ出産ノ申述
ヲ爲スノ分限ナキ者トス、

第五十七條 出産ノ證書ニハ出産ノ日、時、場所、其子ノ男女、其子ニ命ス可キ名及ヒ其父母ト
證人トノ姓名、職業、住所ヲ記ス可シ(民三四、三五、三七、三三四、三四一、)

出産ノ證書ニハ子ノ出生ノ日及ヒ時ヲ記シ、以テ其丁年ノ時期ヲ算スルニ俱ス、但シ丁
年ノ時期ハ日ヲ以テ算スルノミナラス時ヲ以テ算ス、古語ニ曰ク〇〇〇〇秒時ニリ〇〇〇〇秒時ヲ算スト
出産ノ證書ニハ公生ノ子ハ其父母ノ姓名ヲ記スルヲ要ス、若シ姦通亂倫ニ因テ生レダ
ル子ナレハ、其父ノ姓名ヲ申述フルコトニ注意セサル可カラズ、尋常私生ノ子ト雖モ、其父
別段己レノ子タルコトヲ認メサル時ハ、其父ノ姓名ヲ申述フ可カラズ、故ニ私生ノ子ハ常
ニ身上證書ノ簿冊ニ其母ノ姓名ヲ記入シ、其子其母ノ姓ヲ冒ス、然ルニ其母出産ノ申述
ヲ爲ス者ニ母タルノ申述ヲ爲ス可キコト別段ナル公正ノ委任狀ヲ與フルニ非サレハ、假
令ヒ出産ノ證書ニ母ノ姓ヲ記シタリトモ、其子其證書ニ記シタル女ヲ、己レノ母ナリト

明言スルヲ許サス(第三百三十四條見合セ)又若シ出産ノ申述ヲ爲ス者其子ノ母ノ姓名ヲ申述フルヲ肯セサル時ハ、邑長ハ其出産ノ證書ヲ製スルヲ停止シ得可キヤノ問目アリ、此問目ハ訓條或ハ裁判事例ニ於テモ異議紛々タリ、然ルニ到底出産ノ申述ヲ爲ス者其子ノ母ノ姓名ヲ申述フルヲ肯セズトモ、邑長其出産ノ證書ヲ記スルヲ以テ邑長ノ其事ヲ慎重シテ取扱ヒタルヲ看做セリ、一千八百四十三年九月十六日及ヒ一千八百四十四年六月一日及ヒ一千八百四十五年八月一日ノ覆審院ノ裁決ヲ以テ産科ノ醫師ハ自ラ出産ヲ申述フル所ノ子ノ母ノ姓各ヲ身上證書ノ官吏ニ報知スルヲ要セサルヲトナセリ、其一千八百四十五年八月一日ノ裁決ニ曰ク、分娩ニ會スル所ノ諸人ハ、民法第五十五條第五十六條ニ掲ケタル申述ニ關シタル一切ノ報知ヲ身上證書ノ官吏ニ爲スガ爲メ、其事ヲ具悉シ得可カラサル場合ナシト言ヒ難キヲ以テ、其報知ヲ爲サ、ルガ爲メ刑ヲ受クルヲナシ、故ニ其諸人ハ出産現場ノ事實ト己レノ知り得タル所ノ形狀トヲ申述フル時ハ、刑法第三百四十六條ニ定メタル刑ヲ免カル、又刑法第三百七十八條ニ從ヒ内科外科ノ醫官及ヒ海陸軍醫、賣藥者、産婆ハ其職業ニ因リテ親族ヨリ密事ノ附托

ヲ受クルヲ許ス、故ニ其密事ヲ告發スルヲアレハ刑ヲ受ク可シ、本案上告ノ件ヲ審査スルニ産婆「ブレゾー」ハ自宅ニ於テ分娩セシメタル子ノ母ヨリ、産婆ノ分限ニ因リテ其子ノ血族ニ關シタル密事ノ附托ヲ受ケシヲ明確ナルヲ以テ、右ノ産婆ハ刑法第三百四十六條ニ從ヒ、身上證書ノ官吏ニ爲シタル出産ノ申述中自己ノ分限ニ因リ附托ヲ受ケタル密事ヲ漏サ、ルノ目的ニテ、母ノ姓名ヲ告白セサルカ爲メ、刑法第三百四十六條ニ定メタル刑ヲ免シタル裁判ノ申渡ハ、毫モ此第三百四十六條ノ規格ヲ犯ズヲナク、本條至當ノ説明ヲ爲シタルナリト、

第五十八條 棄兒ヲ見出シタル者ハ、其兒并ニ其兒ト同シク見出シタル衣服及ヒ其他ノ品物等ヲ、身上證書ノ官吏ニ引渡シ、且其子ヲ見出シタル時ノ景況ト其場所ノ景狀トヲ申述フ可シ

此等ノ事ヲ詳カニ調書ニ記シ、且其調書ニハ其兒ノ見積年齢、其兒ノ男女其兒ニ命ス可キ姓名、其兒ヲ預カリタル身上證書ノ官署等ヲ記シ其調書ヲ簿冊ニ登記ス可シ(民四〇、四一、刑三四七、三四九ヨリ三五三、)

調書ニ記載シタル箇條ハ、悉皆身上證書ノ簿冊ニ記入シ他日父母ヨリ其子ヲ認メ、又其子ヨリ其父ヲ搜索スルノ用ニ供スルコトヲ得、棄兒ヲ見出シタル者、若シ其兒ヲ邑長又ハ警察官ニ引渡サル、キハ、六日ヨリ少カラス六ヶ月ヨリ多カラサル禁錮ノ刑、及ヒ十六「フラン」ヨリ少カラス三百「フラン」ヨリ多カラサル罰金ノ申渡ヲ受ク、(刑法第三百四十七條見合セ)

第五十九條 航海中ニ出產シタル時ハ、父在ルニ於テハ其父ト其船ノ士官中ヨリ撰ミタル證人二員、若シ士官アラザル時ハ乗組人中ヨリ選ミタル證人二員トノ面前ニ於テ、二十四時間ニ出產ノ證書ヲ記ス可シ、但シ此證書ハ政府ニ属スル船ニ於テハ、海軍ノ庶務ヲ掌トル士官之ヲ記シ、又「アルマチユール」(政府ノ許ヲ受ケ船ヲ搬送スル人)又ハ商賈ニ属スル船ニ於テハ其船長又ハ指揮者之ヲ記ス可シ、其證書ハ乗組人ノ姓名簿ノ冊尾ニ之ヲ記ス可シ、(民三四、三五、六〇、六一、八六、八七、九八九、)

乗組人ノ姓名簿トハ、船長水夫及ヒ旅客等船ニ乗組タル一切ノ人ノ姓名、及ヒ身分ヲ記シタル簿冊ナリ、

第六十條 此事ヲ爲スノ後、^{フナヤミフナトマ}歇船泊船等ノ爲メ始テ卸碇シタル港、又ハ船具ヲ取收ムルニ非サル原由ニ因リ始テ卸碇シタル港ニ於テ海軍ノ庶務ヲ掌トル士官、又ハ船長、指揮者ハ、乗組人ノ姓各簿ニ記シタル所ノ出產ノ證書ノ公正ノ副本ニ通テ、佛蘭西ノ港ニ於テハ海軍兵士召募ノ官署ニ納メ、外國ノ港ニ於テハ佛蘭西領事官ニ出ス可シ、

此副本ノ一通ハ、之ヲ海軍兵士召募ノ官署、又ハ領事館ノ書記局ニ藏メ置キ、他ノ一通ハ、之ヲ海軍事務宰相ニ送呈ス可シ、其宰相ハ其副本ノ寫書ヲ記シテ自ラ之ヲ証セシ後ニ、之ヲ出シシ子ノ父ノ住所ノ身上證書ノ官吏ニ送達シ、若シ其父ノ知レサル時ハ其母ノ住所ノ身上證書ノ官吏ニ送達ス可シ、但シ其官吏ハ其寫書ヲ直チニ身上證書ノ簿冊ニ登記ス可シ(民六一、八七、)

出產ノ證書ヲ記シタル所ノ海軍ノ士官ハ其證書ノ原文ト相違ナキヲ証明スルガ爲メ、公正ノ寫書ニ通テ船ノ着スル所ノ第一ノ港へ差出シ、其原文ハ自ラ之ヲ管守シ、以テ出產證書ノ亡失ヲ豫防シ、且ツ其子ノ身上ヲ保証ス、

第六十一條 又船具ヲ取收ム可キ港ニ着セシ時ハ、其乗組人ノ姓名簿ヲ海軍兵士召募ノ官

署ニ納メ、其官署ノ官吏ハ其出產ノ證書ノ副本一通ヲ記シ、已レノ姓名ヲ手署シテ之ヲ其子ノ父ノ住所ノ身上證書ノ官吏ニ送達シ、若シ其父ノ知レサル時ハ其母ノ住所ノ身上證書ノ官吏ニ送達ス可シ、但シ其官吏ハ其副本ヲ直チニ身上證書ノ簿冊ニ登記ス可シ、(民六〇、八七、)

前條ノ規定ニ從ヒ二通ノ寫書ハ、第一港ニ着セシ時差出セシト雖モ上陸揚荷ヲ爲ス可キ港ニ着シタル上ハ、更ニ本條ノ手續ヲナサ、ル可カラズ、

第六十二條 子ヲ認ル^{ミトム}ノ證書ハ、之ヲ其日ニ身上證書ノ簿冊ニ記シ、又其子ノ出產ノ證書アル時ハ其證書ノ端ニ其旨ヲ記ス可シ、(民四九、三三一、三三四、三三五、)

本條ハ特ニ私生ノ子ノ認ニ關ス、然レモ或ル別段ノ場合ニ於テハ、私生ノ子ヲ公生ノ子ト認ムルコトモ亦包含スルハ疑ヲ俟タズ、此場合ニ於テハ私生ノ子ノ認ヲ爲スト同一ノ式ヲ行フ可キナリ、若一箇ノ私生ノ子ノ認ヲ出產ノ證書記載ノ後ニ爲ス時ハ、其日ニ其認メシ趣キヲ身上證書ノ簿冊ニ記入シ、其趣キ其子ノ出產證書ノ端ニ記ス可シ、又若シ其子ノ身上證書ノ抄出書ヲ渡スコトアル時ハ、必ス認メノ證書ヲモ之ニ附ス可シ、右ノ外

第三百三十四條ニ記シタル如ク、証書人ノ記シタル證書ヲ以テモ、亦私生ノ子ヲ認ムルコトヲ爲シ得可キヲ知ル可シ、

第三章 婚姻ノ證書

婚姻ハ男女ヲシテ、再ビ分割スヘカラサル一致ノ内ニ混合シ、彼此親族ノ縁誼ヲ交通シ、夫婦タル者ノ爲メ最モ大切ナル權利及義務ノ原由トナル者ナリ、故ニ婚姻證書モ亦出產證書ノ如ク之レヲ公ケニシ、各人ノ眞正トナスヘキ書ニ因テ之ヲ保證スルコトヲ要ス、

第六十三條 身上證書ノ官吏ハ婚姻ヲ行ハシムル前ニ其邑廳ノ門前ニ二次公告書ヲ出シ示ス可シ、但シ其公告ハ初メノ公告ヨリ後ノ公告ニ至ルマテ其時間八日ノ隔タリヲ以テシ其一ハ必ス日曜日ニ之ヲ爲ス可シ、又此公告書及ヒ其公告ヲ爲シタルニ付キ記シタル證書ニハ夫婦トナラントスル者ノ姓名職業住所及ヒ丁年又ハ幼年タル事ト其父母ノ姓名職業住所トヲ記ス可ク、且其證書ニハ其公告ヲ爲シタル日時及ヒ場所ニ至ル迄ヲ記シテ別段設置キタル簿冊ニ登記ス可シ、但シ其簿冊ハ第四十一條ニ記スル所ニ等シク記號ヲ附シ、姓名ヲ書シテ歲終ニ至ル毎ニ其郡ノ裁判所ノ書記局ニ藏ム可シ、(民六四、六五、六九、一六六、)

リ一七〇、一九二、一九三、三八八四八八)

婚姻ノ公告ハ前後八日間ニ於テス、即チ引續キタル兩度ノ日曜日ニ之レヲ爲スナリ、其
之チ公告スル所ノ目的三アリ、第一其婚姻ニ付故障ヲ述ヘントスル者ニ之チ報知スル
コト、第二夫婦トナラントスル者協同シテ生活セントスル所ノ至重ニシテ且永久ナル交
際チ一般道義上ノ爲メニ啓告スルコト、第三夫婦トナラントスル者將ニ義務ヲ契約シテ不
能力者トナリ夫トナラントスル者ノ不動産ハ其婦ノ爲メ法律上ノ書入質トナルコト右
等ニ管係アル諸人ニ報知スルコトナリ、右ノ公告ハ夫婦トナラントスル者ノ各自ノ住所
ノ邑内ニ於テ之チ爲シ、又夫婦タラン者其婚姻ニ付他人ノ指揮ヲ受クヘキ時ハ、其人ノ
住所ニ於テモ之チ爲ス、(第百六十八條見合セ)昔時婚姻ノ公告ハ、日曜日寺院ニ於テ供
養終リ參詣人退散ノ時、邑廳ノ門前ニ於テ大聲ヲ以テ之チ爲セシガ、其後公告ノ簿冊ト
稱スル所ノ單一ナル簿冊ニ公告ノ旨趣ヲ登記シ其摘撮書ヲ邑廳ノ門ニ貼附スルヲ以テ、
足レリトスルコトナリタリ、

第六十四條 初メニ公告ヲ爲シタル日ヨリ再ヒ公告ヲ爲スニ至ル迄ノ八日間其公告ノ證書

ノ摘撮書ヲ邑廳ノ門ニ貼附シ置ク可シ○婚姻ハ後ニ公告ヲ爲シタル日ヨリ三日ヲ過サル
前ニ行フ可カラス(民一九二、一九三、)

譬ヘハ一月一日ノ日曜日ニ、第一ノ公告ヲ爲ス時ハ、必ス同八日ノ日曜日ニ第二ノ公告
ヲ爲シ、同十一日ノ水曜日ニ至リ、初メテ婚姻ノ執行ヒチ爲スコト得ルナリ、

第六十五條 若シ後ノ公告ノ日ヨリ三日ノ期限終リシ後一年内ニ婚姻ヲ行ハサル時ハ前二
條ニ記シタル法式ヲ以テ更ニ公告ヲ爲シタル上ニ非レハ婚姻ヲ行フ可カラス(民六三、六
四、)

前條ノ法式ヲ爲シ、婚姻ヲ行フコト得ヘキ日ヨリ起算シテ、一ケ年ヲ過キ猶婚姻ヲ行ハ
サルハ、其公告ニ付テノ臆記モ裏ヘ、婚姻ノ目論見モ廢棄セシヤノ疑念ナキニアラス、
是ヲ以テ更ニ公告スルヲ要用トス、

第六十六條 婚姻ノ故障ヲ述フル證書ノ正本及ヒ副本ハ其故障ヲ述フル者又ハ別段公正ノ
書ヲ以テ任テ受ケタル名代人其姓名ヲ手署シ其正本及ヒ副本ヲ若シ名代人ヲ任シタル時
ハ名代人ヲ任スル書ノ副本ト共ニ婚姻ヲ結バントスル者又ハ其住所ト身上證書ノ官吏ト

ニ送達シ其官吏其正本ニ檢印ヲ爲ス可シ(民六七ヨリ六九、一七二ヨリ一七九、詠六一、六八)

婚姻ノ故障ヲ述フルコトハ、最重大ナル結果ヲ生出スルカ故ニ、法律上其故障ヲ述ヘシコトヲ確證スルニハ、他ノ證書ヨリ稍嚴格ナル法式ヲ以テス、故障ヲ述ル證書ノ正本及ヒ副本ハ之ヲ作ル所ノ使吏、其姓名ヲ手署スルノミナラス、故障ヲ述ル本人モ亦姓名ヲ手署セサルヘカラス、若其者姓名ヲ手署スルコト能ハサル時ハ、其由ヲ證書ニ記スヘシ、若名代人ヲ以テ故障ノ申述ヲ爲ス時ハ、其委任狀ハ特別ニシテ且證書人ノ製セシ者ナルヲ要ス、使吏ハ其證書中ニ唯委任狀ノアリシコトヲ記シテ足レリトスルコトヲ得ズ、必ス正本ト相違スルコトナク且委任狀ノ全文ヲ登記スルヲ要ス、使吏ノ製スル所ノ呼出狀ノ正本ハ、其呼出ヲ委託シタル者ノ手ニ留置キ、正本ト相違アラサル副本ヲ被告人ニ送達スルハ一般ノ式タリ、ト雖モ、婚姻ノ故障ヲ申述フル證書ニ付テハ三通ノ副本ヲ要ス、蓋シ其一ハ故障ヲ申述ヘタル、所ノ夫婦トナラントスル一方ノ者ニ送達シ、一ハ其他ノ一方ノ者即チ己レノ婚姻ニ故障ヲ述フル所以及ヒ婚姻ノ遷延スル事由ヲ知ルコトヲ大切

ナリトスル所ノ者ニ送達シ、一ハ公告ヲ爲シタル邑ノ内一箇ノ邑ノ邑長ニ送達ス、邑長ハ其正本ニ檢印ヲ爲ストハ正本ニ「ザユ」(檢)字ヲ書シ自ラ姓名ヲ手署スルコトナリ、故障ヲ申述フルコトノ原由及ヒ故障ヲ申述フルコトヲ得ル所ノ人ハ、第七十二條以下ニ詳載セリ、

第六十七條 身上證書ノ官吏ハ遷延ナク公告書ノ簿冊ニ婚姻ノ故障ヲ述ヘタルコトヲ簡略ニ登記ス可シ又其官吏ハ婚姻ノ故障ヲ述ヘタルコトヲ裁判所ニテ止メシメタル言渡ノ副本又ハ其故障ヲ述ヘタル者自カラ之ヲ止メタル證書ノ副本ヲ受取り此副本ヲ婚姻ノ故障ヲ述ヘタルコトヲ記セシ端ニ登記ス可シ

公告書ニ故障ヲ申述ヘタルコトヲ記入スルハ、其邑長ノ後^{アトヤク}及ヒ補佐人^{アソボアレ}モ、之ヲ知り得ルヲ要スレハナリ、邑長ハ又故障ヲ申述ヘタルコトヲ記セシ端ニ、其故障ニ關係スル所ノ裁判ノ申渡シ或ハ故障ヲ申述ヘタル者自ラ之レヲ廢止シタル證書ヲ登記スルヲ要ス、蓋シ裁判申渡シトハ、民事裁判所ヨリ下附セシ者ナ云ヒ、故障ヲ申述ヘタル者自ラ之レヲ廢止シタル證書トハ、故障ヲ申述タル者其故障ヲ取消スコトヲ承諾シ、初メヨリ故障ナキ

者ト看做ス證書ヲ云フ、然レモ若其故障ノ世治上ニ關シタル事由アル時ハ、其故障ヲ申述ヘタル者ヨリ之レヲ廢止スルコトノ承諾ハ効ナキ者トス、

第六十八條 婚姻ノ故障ヲ述フル者アル時ハ身上證書ノ官吏其故障ヲ述ヘタル者ノ自カラ之ヲ止メタル證書ヲ受取ラサル前ニ婚姻ヲ行ハシム可カラス若シ其官吏此規則ニ背シ時ハ三百「フランク」ノ罰金ト總テ婚姻ノ故障ヲ述ヘシ者ノ爲メ生シタル損失ノ償トナ出ス可キノ言渡ヲ受ク可シ(民七六、)

身上證書ノ官吏、假令其故障無益ナルコト明白ナリト思量ストモ、之ヲ廢止シタル證書ヲ受取ラサル前ニ、決シテ婚姻ノ執行ヲ爲サシムヘカラス、犯ス者ハ罰金ノ申渡シヲ受クベシ、蓋シ身上證書ノ官吏ハ、其故障ノ當否ヲ裁判スヘカラサレハナリ、

第六十九條 婚姻ノ故障ヲ述フル者ナキ時ハ其由ヲ婚姻ノ證書ニ記ス可シ若シ又數邑ニテ婚姻ノ公告ヲ爲シタル時ハ各邑ノ身上證書ノ官吏ヨリ婚姻ノ故障ヲ述フル者アラサル旨ヲ證スル爲メ渡シタル所ノ證書ヲ婚姻ヲ行ントスル者ヨリ婚姻ヲ行フ可キ邑ノ官吏ニ出ス可シ(民七六、一六六ヨリ一六八、)

夫婦トナラントスル者、又ハ其指揮ヲ爲スヘキ者等各別邑ニ住所アル時ハ、婚姻ノ公告ヲ其各箇ノ邑ニ於テ爲スヘキナリ、(第六十七條第六十八條見合セ)

第七十條 身上證書ノ官吏ハ婚姻ヲ爲サントスル者ヲシテ各其出產ノ證書ヲ出サシム可シ若シ婚姻ヲ爲サントスル者其出產ノ證書ヲ得ルコト能ハサル時ハ其出產ノ地又ハ其住所ノ治安裁判役ヨリ渡シタル「ノトリエター」(證書ノナキ時證人ヲ用ヒ官吏ノ面前ニ於テ申述ヘタルコト)ノ證書ヲ出シテ其出產ノ證書ニ代用スルコトヲ得可シ(民七一、七二、一五五、)夫婦トナラントスル者ノ出產證書ハ其者婚姻ヲ取結フタメ十分ノ年齢ナルカチ知り且其本人等ニ相違ナキコトヲ明確ニスル爲メノ用ニ供ス

第七十一條 「ノトリエター」ノ證書ニハ男又ハ女タルト血屬又ハ血屬ナラサルトチ問ハス証人七人ノ申述フル所ト婚姻ヲ行ハントスル者ノ姓名職業住所及ヒ知ルヲ得可キ時ハ其父母ノ姓名職業住所且婚姻ヲ行ハントスル者ノ出產ノ地及ヒ知ルヲ得可キニ於テハ其出產ノ時ト出產ノ證書ヲ出スコト能ハサル理由トニ至ル迄之ヲ記ス可シ○證人ハ治安裁判役ト共ニ「ノトリエター」ノ證書ニ姓名ヲ手署ス可シ若シ其証人ニ姓名ヲ手署スルコト能ハズ

或ハ姓名ヲ手署スルコトヲ知ラサル者アル時ハ其旨ヲ附記ス可シ(民七〇、七二、一五五)
 「ノトリエター」ノ証書トハ、或ル事件ヲ各人ノ知ル所ナルコトヲ明確ニスル諸人ノ申述
 ヘテ記ス所ノ書ナリ、

第七十二條 「ノトリエター」ノ証書ハ婚姻ヲ行フ可キ地ノ初告裁判所ニ之ヲ出ス可シ〇其
 裁判所ニ於テハ檢事ノ申立ヲ聽キタル後其証人ノ申述フル所ト出產ノ証書ヲ出スコ能ハ
 サルノ原由ト至當ナリトスル時ハ其「ノトリエター」ノ証書ヲ確的ノ書ト爲シ又至當ナ
 ラストスル時ハ之ヲ確的ノ書ト爲スコト肯セサル可シ(民七四、)

「ノトリエター」ノ証書ノ式ヲ以テ記シタル出產證書ハ、假令裁判所ニテ確的ナリト查
 認シタリト雖モ、婚姻ノ爲メノ外他ノ効ヲ生スルコトナシ、故ニ其證書ヲ以テ公生ノ卑屬
 タルコトヲ証シ、又遺產相續ノ權ノ存在ヲ証スル、等ノ資益ヲ生スルコトナキ者トス、

一千八百〇八年三月三十日參議院ノ意見ヲ以テ、夫婦トナラントスル者ノ出產証書中、
 其者ノ姓名ト、其父ノ姓名ト、字綴リノ同シカラサルカ、又ハ其者ノ血屬ノ姓氏中脱字ア
 ルカ、ノ欠典ニ因リ、夫婦トナラントスル者ノ紛レナキコトニ妨ケンキ場合ヲ豫メ示シタ

リ、其意見書ニ曰ク、身上証書ノ簿冊ハ、裁判權ヲ以テ特ニ爲シタル裁判申渡シニ因ラサ
 レハ、之ヲ更改スヘカラサルコト緊要ナリト雖モ、身上証書ノ簿冊ニ更改ヲ施スコト必要
 トセサル場合ニ於テハ、國民ヲシテ其更改ノ爲メ費用ヲ負ハシメサルコト亦適要ナリト
 思慮シ、今其意見ヲ陳スルコト左ノ如シ、夫婦トナラントスル者ノ一人ノ姓名、其者ノ出產
 證書中其父ノ姓名ト字綴リノ同シカラサル場合、及ヒ其血屬ノ者ノ姓ヲ遺脱シタル場
 合ニ於テ婚姻ニ立合ヒ夫婦トナラントスル者ノ紛レナキコト明確ニスルニハ、父母又ハ
 祖父母ノ證明ヲ以テ婚姻ノ執行ヲナスニ十分ナリトス、父母又ハ祖父母ノ在ラサル時
 ハ法律上ノ法式ヲ以テ其婚姻ヲ許諾シタル書中ニ、夫婦トナラントスル者ノ紛レナキコ
 トヲ保證スルヲ以テ足レリトス、父母又ハ祖父母ノ死去シタル時ハ、幼者ノ爲メニハ親屬
 會議或ハ後見人、丁年者ノ爲メニハ婚姻證書ニ付テノ四人ノ證人、夫婦トナラントスル者
 ノ紛レナキコトヲ保證スルニ於テハ正當ナリトス、父母又ハ祖父母ノ死去證書中姓名ノ
 一箇ノ文字又ハ姓ノ一箇(父方ノ姓ト母方ノ姓ナドヲ綴リテ一箇ノ姓トナスコトアリ故
 ニ爾云フ)ヲ遺脱スル時ハ、幼者ノ爲メニハ婚姻ノ許諾ヲ要スル所ノ人、丁年者ノ爲メニ

ハ本人及ヒ證人ノ誓言ヲ以テ十分ナリトシ、何レノ場合ニ於テモ身上證書ノ簿冊ニ著手スルコトヲ必要トセズ、蓋シ身上證書ノ簿冊ハ裁判ノ申渡シニ因ラサレハ更改スルコトヲ得サルヲ以テナリ、又前ニ述フル所ノ法式ハ婚姻公告ノ爲メニスルニアラス、婚姻ノ執行ノ證書ノ時ナラデハ用キル可カラズ蓋シ婚姻ノ公告ハ雙方ヨリ身上證書ノ官吏ニ差出シタル書面ニ從テ爲スヲ要スレハナリ民法第百條ニ從ヒ何レノ場合ニ於テモ親族又証人ノ爲シタル申述ヘハ之レヲ求ムルコトナク且之レニ關預セサル雙方ヲ害スルコト能ハサル者トス

第七十三條 父母又ハ祖父母ノ許諾ヲ爲ス公正ノ證書又父母及ヒ祖父母ノ在ザル時ハ親族ノ其許諾ヲ爲ス公正ノ證書ニハ婚姻ヲ爲サントスル者ノ姓名職業住所及ヒ其證書ニ管スル者ノ姓名職業住所ト其倫序トヲ記ス可シ(民一四八、一六〇、一八二、一八三、一三一七、刑一九三、)

共和政治第十三年十一月四日參議院ノ意見ニ曰ク、夫婦トナラントスル者ノ祖父母、其夫婦トナラントスル者ノ父母ノ死去ヲ保証スル時ハ、其死去證書ヲ差出スコトヲ要セス、

此場合ニ於テハ婚姻証書中ニ、其保証ノ趣ヲ記スヘシ、若シ許諾ヲ請ベキ所ノ父母祖父母共ニ死去セシカ、或ハ其死去證書又ハ其最終ノ住所不分明(第百五十五條ニ從フ)ニシテ、失踪ノ證據ヲ示スコト能ハサル時ハ、丁年者ノ婚姻ハ、其者ヨリ其尊屬ノ親ノ死去ノ場所及ヒ最終ノ住所ノ知レサルコトヲ、誓ヲ以テ申述フルニ於テハ、之ヲ執行フコトヲ得、且婚姻證書ノ四人ノ証人ヨリ、其尊屬ノ親ノ死去ノ場所及ヒ最終ノ住所ハ知ラザレト、夫婦トナラントスル者ノ、身元ハ熟知セリトノ誓言ヲ以テ、之ヲ明確ニスルヲ要ス、而シテ身上證書ノ官吏ハ婚姻証書中ニ、此等ノ申述ヘノ趣ヲ詳記スヘシ、

婚姻ヲ許諾スル所ノ者、婚姻ノ執行ヒニ立會フコトヲ欲セサル時ハ、證書人ノ面前ニテ製シタル公正ノ證書ヲ以テ、己レノ許諾ヲ與フヘシ、蓋シ此承諾ナル者ハ、婚姻ノ爲メ最重要ナル者故、自分一己ニテ記シタル證書ハ、詐偽錯誤及ヒ眞否ノ如何ナルヲ、保証スルニ十分ナリトシ難キ恐レアルヲ以テナリ、尊屬ノ親ナキ幼者ノ爲親族會議ノ與フル所ノ許諾ハ、會議ノ決定書ヲ以テ之ヲ證ス、即チ治安裁判所ノ書記役、此決定書ノ副本ヲ夫婦トナラントスル者ニ渡スナリ、

婚姻許諾ノ公正ナル証書ニハ、夫婦トナラントスル他ノ一方ノ者ノ、姓名職業住所ヲモ、亦記載セサルヘカラサルヤノ旨論議紛々タリ、此間目ハ一箇ノ區別ヲ以テ之ヲ決著セサルヘカラス、許諾ヲ與フル所ノ子婚姻ニツキ幼者(男子ハ二十五歳未満女子ハ二十一歳未満)ナル時ハ、夫婦トナラントスル他ノ一方ノ者ノ姓名ヲ記載セサルヘカラス、何トナレハ此許諾ハ、婚姻ヲ法ニ適シタル者トナスニ、必要ナル原質ニシテ、其子ノ情慾ニ侵サレシテ豫防スルモノナレハ、其許諾ハ善良ナル監護者ヨリ出タル者ニシテ、且原因ヲ熟知シテ爲シタルコトノ証據アルヲ要スレハナリ、然レモ婚姻ニ付テノ丁年者ニ於テハ、夫婦トナラントスル他ノ一方ノ者ノ姓名ヲ記載スルヲ必要トセス、蓋シ此時其承諾ヲ與フル所ノ者ハ其子自ラ其夫又ハ婦ト爲サントスル所ノ者ヲ撰フコトニ付、十分之ヲ信用スルノ旨ヲ法律上ニ於テ証書中ニ陳述スルコトヲ得、マダ假令其承諾ナクモ既ニ契約シタル婚姻ハ決シテ取消スベカラサレハナリ、

第七十四條 婚姻ハ之ヲ爲サントスル者ノ中其一方ノ住所ノ邑内ニテ行フ可シ○婚姻ノ事ニ付テハ一箇ノ邑内ニ六月間以上絶ヘス住居シタルヲ以テ其住所ナリト定ム可シ(民一〇

二、一六五、一六七、一九一、

夫婦トナラントスル者ハ、毎ニ其一方ノ者ノ住所ノ邑内ニ於テ、其婚姻ヲ行フノ權アリ、此規則ハ夫婦トナラントスル一方ノ者、若シ現ニ住スル邑内ニ僅カ數日前ヨリ住スル時、若シハ現ニ住所ヲ定メタル邑内ニ良久シク、隔絶シテ住居セサリシ場合ニ適用スヘキナリ、又立法者ノ仁惠ヲ以テ夫婦トナラントスル一方ノ者、六ヶ月間絶ヘス住居スル邑内ニ於テ、其婚姻ヲ行フコトヲ得セシム、蓋シ婦トナラントスル者ノ住所ニ於テ婚姻ヲ行フコト習慣ナリトイヘモ、是ヲ以テ雙方ノ爲メ法律トハ爲サ、ルナリ、

第七十五條 (千八百五十年七月十日如左改ム) 公告ヲ爲シタル時ヨリ三日ノ期限ノ終リシ後婚姻ヲ爲サントスル者ノ互ニ定メタル日ニ至リ身上證書ノ官吏ハ其邑廳ニ於テ婚姻ヲ爲サントスル者ノ血屬ト否トヲ問ハス證人四員ノ面前ニテ婚姻ヲ爲サントスル者ノ身分及ヒ婚姻ノ禮式等ニ管スル前數條ニ記シタル証書類ト此篇第五卷(婚姻ノ事)第六章(夫婦ノ權義)トチ婚姻ヲ爲サントスル雙方ノ者ニ讀ミ聞ス可シ○又身上證書ノ官吏ハ婚姻ヲ爲サントスル者ニ既ニ婚姻ノ契約書ヲ記シタルヤ否ヤヲ問ヒ糾シ又婚姻ノ許諾ヲ爲シ

タル者出席シタル時ハ其者ニモ亦同一ノ事ヲ問ヒ糾シ若シ此等ノ者其契約書ヲ記シタリト答フル時ハ其官吏其契約書ノ日附及ヒ其契約書ヲ記シタル証書人ノ姓名住所ヲ問ヒ糾ス可シ○又身上証書ノ官吏ハ婚姻ヲ爲サントスル雙方互ニ夫婦トナル可キヲ欲スル旨ノ申述ヲ相次テ兩人ヨリ聞取り然ル後法律ニ循ヒ婚姻ヲ行フタル旨ヲ言渡シテ直チニ其事ヲ婚姻ノ証書ニ記ス可シ(民三七、六三、一六五、一九一、二二二ヨリ二二六、刑一九三、一九九)

婚姻ノ執行ハ、邑廳ニ於テ爲スチ當然トスト雖モ、時トシテハ他ニ於テ爲スコトアリ、即チ夫婦トナラントスル一方ノ者若シ重病ナルトキハ最後(アンエキストレシー)ノ婚姻ト稱シ、其者ノ室内ニ於テ之レヲ行フ、

邑長ハ雙方ノ者ノ紛レナキコト、必要ナル法式ヲ完全セシコトヲ、明確ニセンカ爲メ、婚姻ニ付キ差出シタル書類、即チ夫婦トナル者ノ出產ノ證書、其父母ノ許諾書或ハ死去ノ證書、及ヒ婚姻ニ故障ヲ申述フルコトナキノ證書ヲ讀聞セ、又其婚姻ノ永久ニシテ且分割スヘカラサル結縁ノ至重ナルコトヲ了得セシメンカ爲メ、夫婦相互ノ權利及ヒ義務ノ事

ヲ掲ケタル民法ノ數條ヲ讀聞ス、

邑長ヨリ右ノ問糾シテナシ、雙方ノ者夫又ハ婦トナラント欲スル旨ヲ答ヘタル上ニテ、邑長其婚姻ヲ行フタル旨ヲ言渡セハ輒チ其婚姻ハ十全ニシテ廢止スヘカラサル者トナルナリ、此場合ニ至リ假令夫婦ノ一方其承諾ヲ取戻サント欲シ、婚姻証書ニ手署スルコト肯セストモ其効ナキ者トス、何トナレハ婚姻証書ハ婚姻ノ法ニ適シタルコト否トノ爲メ必要トセス、唯婚姻成立ノ如何ヲ容易ニ徵スル爲メノ證據トナスモノナレハナリ

千八百五十年ノ法律ハ、重大ナル弊害ヲ豫防センカ爲メニ設ケタリ、蓋シ嫁資分括ノ法ヲ以テ嫁シタル婦ハ、其嫁資ヲ自己決シテ處分シ得サル者ナルカ故ニ、其夫ノ許諾又ハ裁判所ノ許諾アリテ自ラ承諾シタル讓リ渡シ又ハ義務タリニ其消滅ヲ言渡サシメ、時トシテ自己ノ契約ヲ斷弄スルニ至レリ、此ノ如キ詐僞行ハレテヨリ、自然一個ノ契約ヲ取結ハントスル所ノ婦ニ對シ、其財産ニ付キ婚姻ノ契約書ヲ示サントチ要求スルカ如キ慣習ヲ生シタリ、而シテ此注意ハ元來嫁資分括ノ法ヲ以テ、婚姻シタル婦ノ詐僞ヲ預防

スルガ爲メノミノ目的ナリシガ、遂ニ財産共通ノ婦ヘモ波及シ、其信用ヲ全ク損害スルニ至レリ、抑財産共通ノ婦ハ、一般ニ其財産ニツキ婚姻ノ契約書ヲ証書人ニ就テ記セシムルコトナキヲ以テ、其副本ヲ差出スル能ハス、之ニ因テ自然他人ニ十分ノ信據ヲ得ル能ハサリキ、今此一千八百五十年ノ法律ハ此妨障ヲ開除シタル者ナレハ其資益僅少ナラズ、若シ實ハ夫婦嫁資分括ノ法ヲ用キナカラ邑長ニ對シテハ、証書人ノ記シタル契約書アラサル旨ヲ申述フル時、其虚言ハ決シテ他人ヲ害スルコトナキ者トス、然ル時証書人ノ記シタル契約書ハ公正ノ證書ヲ取消シ又ハ變更スヘキ秘密ノ證書(千三百二十一條見合)ノ効チ有シテ、雙方ノ間ニ其効チ生スト雖モ、之ヲ以テ決シテ他人ニ移スヘカラズ、之ニ因テ嫁資分括ノ婦ノ承諾シタル讓リ渡シ及ヒ契約ハ他人ノ爲メニハ、恰モ法律上財産共通ノ法ヲ以テ婚姻シタル者ト同一ノ効チチ有スベシ、(第千三百九十一條見合セ)若シ身上證書ノ官吏本條ニ記列シタル間糾シテ爲スコトヲ忘失シタルガ爲メニ、嫁資分括ノ婦其分括ノコトノ申述ヘチ爲サ、リシ時ハ、証書人ノ記シタル其婚姻契約ハ各人ノ爲メ其効チ有ス、向トナレハ法律ハ唯其詐偽ヲ懲罰セント欲スルノミナレハナリ

第七十六條 (千八百五十年七月十日如左改ム)婚姻ノ證書ニハ左ノ諸件ヲ記ス可シ

- 第一 夫婦ノ姓名職業年齢出産ノ地住所(民三四、)
- 第二 夫婦ノ丁年ナル事又ハ幼年ナル事(民三四、三八八、四八八、)
- 第三 父母ノ姓名職業住所
- 第四 父母祖父母ノ許諾及ヒ親族ノ許諾必要ナル時ハ其許諾(民一四八ヨリ一五〇、一五八ヨリ一六〇、一八二、一八三、)
- 第五 尊敬ノ證書ヲ出シタル時ハ其證書(民一五一ヨリ一五八、)
- 第六 各地ノ住所ニ於テ爲シタル公告(民六三ヨリ六五、一六六ヨリ一六九、)
- 第七 婚姻ノ故障ヲ述ヘタルコトアル時ハ其事由及ヒ婚姻ノ故障ヲ止メタル事又ハ婚姻ノ故障ヲ述ヘタルコト無キ事(民六六ヨリ六九、一七二ヨリ一七九、)
- 第八 婚姻ヲ爲サントスル者ノ互ニ夫婦トナル可キコトヲ欲スル旨ノ申述及ヒ官吏ヨリ婚姻ヲ行フタル旨ヲ言渡シタル事(民一四六、)
- 第九 證人ノ姓名年齢職業住所並ニ其證人ハ婚姻ヲ爲ス者ノ血屬又ハ姻屬ニテ且本

宗又ハ外族タルヲ及ヒ何ノ倫序ナルヤノ申述(民三四、三七、七三五、刑一九九、二〇〇)

第十 前條ニ記シタル問糾シニ付キ既ニ婚姻ノ契約書ヲ記シタルヤ又ハ未タ記セサルヤチ申述タル事及ヒ其契約書アル時ハ其契約書ノ日附並ニ其契約書ヲ記セシ證書人ノ姓名住所

此等ノ諸件ヲ記セサル身上證書ノ官吏ハ第五十條ニ記シタル罰金ノ言渡ヲ受ク可シ前文ニ記スル申述ニ遺脱又ハ錯誤アル時ハ檢事ヨリ婚姻ノ證書ヲ改ム可キヲ申立ツ可シ但シ此規則ト第九十九條ニ循ヒ婚姻ニ管シタル者其證書ノ更改ヲ求ム可キ權ト相觸ル、コナカル可シ

婚姻執行ノ公正ナル證書中ニ斯ク記列スヘキコトハ、婚姻者ノ相違ナキコト、且婚姻ノ爲必
要トスル法式ヲ完全セシコト、證スルカ爲メナリ、若シ身上證書ノ官吏婚姻者ノ父母又
ハ祖父母ノ許諾、祖父母ノアラサル時ニ、親族會議ノ許諾ヲ記スルコトヲ遺脱スルコトハ、
禁錮及ヒ罰金ノ申渡シヲ受ケ、(第五百五十六條第百九十二條見合セ)又婚姻者ノ財産法

ニ關シタル、夫婦ノ申述ヘチ記スルコトヲ遺脱スルコトハ、罰金ノ申渡シヲ受ク(第五十條見合セ)此記載ハ、夫婦タル者ノ爲シタル契約ヲ施行スルコトニ付テノ保證ヲ他人ニ知ラシムルガ爲メ、容易ニシテ且正實ナル方便ナリ、婚姻ノ契約書ヲ記シタル證書人ハ、一ノ證券中ニ契約ノ種類ト月日トヲ記シ、之レチ本人ニ渡スヲ要ス、而シテ本人ハ之チ身上證書ノ官吏ニ渡サシム、(第千三百九十九條見合セ)之ニ因テ財産ノコトニツキ雙方ノ申述中ニ相違ナカラシメントス、

邑長ハ証券紙ニ記シタル證書ヲ以テ、法律上婚姻ノ執行ヲ爲シ遂ケタルコトヲ証ス、夫婦ハ此證書ヲ僧徒ニ差出ス、僧徒ハ此婚姻ノ證書ヲ檢視スルコトヲシテ配偶ノコトニベチシクシヨシ(方式)ヲ行フコトヲ得ス、犯ス者ハ罰金ノ言渡シヲ受ク、(刑法第百九十九條第百條見合セ)

○第四章 死去ノ證書

死去ノ證書ハ、一箇ノ人ノ死亡及其人ノ相違ナキコトヲ証ス、死去ハ婚姻ヲ滅シ親權ヲ解キ、遺産相續ヲ創ムル等、許多ノ關係アルニヨリ、公正ノ證書ヲ以テ、之チ確証スルヲ要

ス、

第七十七條 埋葬ハ身上証書ノ官吏ヨリ渡シタル所ノ無税ノ免狀ヲ受ケタル上ニ非レハ之ヲ爲ス可カラズ但シ其官吏ハ死去ヲ檢ス可キ爲メ死者ノ所ニ至ル可ク且死去ノ後二十四時ヲ經ルニ非サレハ其免狀ヲ渡ス可カラズ尤モ取締ノ規則ニ於テ別段定メタル場合ハ此例ニ非ス(民八一、八二、治四三、四四、刑三五八、三五九、)

身上証書ノ官吏ハ、必ス其人眞實ニ死去セシカ、又其死去ハ果シテ一ノ犯罪ノ結果ニアラサルカチ、自己又ハ自己ノ委任スル所ノ醫師ニ依テ、檢査シ而ル後、尋常ノ紙ヲ以テ埋葬許可ノ証ヲ與フ、但シ埋葬ヲ急忽ニスル弊害ヲ豫防スル爲メ、時疫又ハ他ノ傳染病アル場合ヲ除クノ外、死去ノ後二十四時間ヲ經サレハ、埋葬ヲ爲スコトヲ許サス、若シ右ニ違フ者ハ六日以上六ヶ月以下ノ禁錮及ヒ十六「フラン」以上五十「フラン」以下ノ罰金ヲ以テ之ヲ罰ス、(刑法第三百五十八條見合セ)

第七十八條 死去ノ証書ハ証人二員ノ申述フル所ニ從ヒ身上証書ノ官吏之ヲ記ス可シ○其ニ員ノ証人ハ最近ノ血屬又ハ近隣ノ者タルヲ得ルニ於テハ之ヲ用ヒ若シ又住所外ニテ死

去シタル時ハ其一人ハ死去シタル家ノ者又一人ハ死者ノ血屬或ハ其他ノ人ヲ用フ可シ(民三七、七九、九六、)

二員ノ申述人ハ、死去ノ証書ノ証人ヲ兼ヌ、故ニ男子ニシテ丁年者タルヲ要シ、一般ニ死去後、二十四時間ノ内ニ其申述ヘテ爲スヘキトス、

第七十九條 死去ノ証書ニハ死者ノ姓名年齢職業住所並ニ死者現ニ婚姻セシ者又ハ既ニ寡トナリシ者タル時ハ其配偶者ノ姓名ト申述ヲ爲ス者ノ姓名年齢職業住所及ヒ其申述ヲ爲ス者死者ノ血屬ナル時ハ其倫序ト記ス可ク且此証書ニハ死者ノ父母ノ姓名職業住所ト其死者ノ出產ノ地トヲ知り得可キニ於テハ亦之ヲ記ス可シ(民三四、三五、)

本條ニ掲ケタル諸件ハ、死去セシ者ノ相違ナキコトヲ証明スル爲メナリ、而シテ其死去ノ日及時ヲ掲ケス、抑死去ノ日時ハ子ノ公生ナルコト及遺產相續ノコトニ付キ太ハタ切要ナリト雖モ、法律ニ明記スルヲ要トセス、蓋シ此等ハ身上証書ノ官吏、証人ノ申述ヘニ因リテ記スルコト一般ナレハ、多ク眞實ノ者ナリト思度セシムルトイヘモ、之ヲ以テ必シモ、諸人ノ爲メ眞正トナサシムル程ノ、位置ニアラシムルヲ欲セサレハナリ、事實日時ヲ記入ス

ヘキヲ明ニ掲クル時ハ、證人ノ申述ヘニ因リテ記サ、ルヲ得ス、然ル時ハ證人或ハ其日時ヲ詐ハリ、遺産相續ノ權ヲ特有シ或ハ之ニ因リ人ノ權ヲ奪フ等ノ權ヲ特有セシムルニ至ルヘケレハ、身上證書ノ官吏ヲシテ、證人ノ申述ヘニ因ラズシテ、之レヲ記入スルヲ得セシメンガ爲メ、立法者故ラニ掲載セサリシフト見ユ、

身上證書ノ簿冊ニ未タ記入セサル、初生ノ子ノ死去ノ證書ニ記載スヘキヲハ、第五十六條ニ就テ見ルヘシ、

第八十條 兵病院及ヒ尋常病院又ハ其他ノ公舎等ニ於テ死去シタル者アル時ハ其家屋ノ主者支配人所有者ヨリ二十四時間ニ其旨ヲ身上證書ノ官吏ニ報告シ其官吏ハ死去ヲ檢ス可キ爲メ其家屋ニ至リ己レノ聽キタル申述ノ詞ト己レノ檢査シタル所ノ條件トニ從ヒ前條ニ記シタル如ク死去ノ證書ヲ記ス可シ(民六四、六五、七七、九六、九七、刑三五八) 病院及ヒ公舎ニ於テハ其申述及ヒ檢査ノ諸件ヲ登記ス可キ簿冊ヲ別段設ケ置ク可シ 其身上證書ノ官吏ハ死者ノ最終ノ住所ノ身上證書ノ官吏ニ其死者ノ證書ヲ送達シ其官吏ハ此證書ヲ身上證書ノ簿冊ニ登記ス可シ

身上證書ノ官吏、病院又ハ其他ノ公舎ニ於テ、死去シタル人ノ死去ノ證書ヲ製スル時モ、其證書ヲ確實ニスル爲メ、亦二員ノ證人ヲ必用トス、

第八十一條 非命死ノ徵アル時又ハ非命死タルヲ思察ス可キ模様アル時ハ取締ノ官吏内科外科ノ醫師ノ助ケヲ受ケ死骸ノ形狀及ヒ之ニ管シタル模様ト死者ノ姓名年齢職業出産ノ地住所等ヲカメテ檢査シタル諸事トヲ調書ニ記シタル後ニ非レハ埋葬ヲ爲ス可カラス(民八二、八五、治四四、刑三五八、三五九)

死體ノ形狀、即チ死去ノ種類及疵傷ノ性質ニ關シタル模様ヲ、調書ニ記スルヲ其死人ニ對シテ、犯シタル罪ノ證憑及懲罰ノ爲メ要用ナリトス、

第八十二條 其取締ノ官吏ハ其人ノ死シタル地ノ身上證書ノ官吏ニ直チニ其調書ニ記シタル諸件ヲ報告シ身上證書ノ官吏此調書ニ從テ死去ノ證書ヲ記ス可シ 其身上證書ノ官吏死者ノ住所ヲ知リタル時ハ其住所ノ身上證書ノ官吏ニ死去ノ證書ノ副本一通ヲ送達ス可シ但シ其身上證書ノ官吏ハ副本ヲ身上證書ノ簿冊ニ登記ス可シ(民八一、1011)

警察官吏ヨリ、死去ノ場所ノ身上証書ノ官吏ニ、送致スル所ノ報告ハ、唯死人ノ相違ナキ
トニ關シタルノミノ報告ナリ、之ニ因テ其身上証書ノ官吏ハ、直ニ其簿冊ニ死去ノ証
書ヲ記シ、而シテ其証書ノ寫シテ死去シタル者ノ住所ノ身上証書ノ官吏ニ、送達シテ其
簿冊ニ記入セシム、

第八十三條 罪人ヲ死刑ニ處セシ時ハ其時ヨリ二十四時間ニ刑法裁判所ノ書記官ヨリ死刑
ヲ行ヒシ地ノ身上証書ノ官吏ニ第七十九條ニ記セシ所ノ諸件ヲ取調ヘタル書面ヲ送達シ
其地ノ身上証書ノ官吏ハ其書面ニ從テ死去ノ証書ヲ記ス可シ(民八五、治三七八、)

本條ノ場合ニ於テモ、亦死去ノ証書ヲ刑ノ言渡シテ受ケタル者ノ住所ノ邑ノ身上証書
ノ簿冊ニ記入スルヲ要ス、蓋シ立法者前條ノ文ヲ重テ本條ニ掲クルモ、無益ナリト思
考シテ省略シタルナルヘシ

第八十四條 獄舎徒刑場等ノ内ニ死去セシ者アル時ハ其使吏又ハ獄監ヨリ直ニ身上証書
ノ官吏ニ死去ノ事ヲ報告ス可シ但シ身上証書ノ官吏ハ第八十條ニ記セシ如ク其死去ノ所
ニ至テ死去ノ証書ヲ記ス可シ

前條ニ於テ述ヘタル注意ハ、本條ニモ亦適施スヘキナリ、故ニ入獄人ノ死去ノ証書ヲ
製シタル身上証書ノ官吏ハ、死人ノ住所ノ邑長ニ死去証書ト相違ナキ副本ヲ送達シ、
其身上証書ノ簿冊ニ記入セシム、

第八十五條 非命死ヲ爲シ又ハ獄舎徒刑場等ノ内ニ於テ死去シ又ハ死刑ニ處セラレシ者ア
ル時ハ此等ノ事ヲ簿冊ニ記セス唯第七十九條ニ記シタル法式ヲ以テ死去ノ証書ヲ記ス可
シ(民八一、八三、八四、)

死去ノ証書ハ、唯死去ヲ證スルニ供スルノミ、故ニ總テ死去ノ種類ニ關スルコトヲ記載ス
ヘカラス、殊ニ家族ヲシテ一層ノ哀痛ヲ増サシムヘキ景狀アル時ハ、猶更之ヲ記入スヘ
カラス、然ルニ兵員ノ戰場ニ於テ死去シタルコトノミハ、身上証書ノ簿冊ニ其旨ヲ登記シ
得ルコトハ、予輩モ亦多クノ著述家ノ論ニ同意ス、

第八十六條 航海中ニ死去シタル者アル時ハ其船ノ士官中ニテ証人二員ヲ撰ミ若シ士官ア
ラサル時ハ乗組人中ニテ証人二員ヲ撰ヒ其証人ノ面前ニテ二十四時間ニ死去ノ証書ヲ記
ス可シ但シ此証書ハ政府ニ屬スル船ニ於テハ海軍ノ庶務ヲ掌ル士官之ヲ記シ商賈又ハ

「アルマチュール」ニ属スル船ニ於テハ其船長又ハ指揮者之ヲ記ス可シ○其證書ハ乗組人ノ姓名簿ノ冊尾ニ之ヲ記ス可シ(民三四、三五、五九、七九、八七、)

本條ハ死去ノ証書ノ爲メニ、出產證書ニ關シタル第五十九條ノ規定ヲ再ヒ示シタル者ナリ、

第八十七條 此事ヲ爲セシ後歇船泊船等ノ爲メ始メテ卸碇セシ港又ハ船具ヲ取收ム可キニ非サル理由ニ因リ始メテ卸碇シタル港ニ於テ其海軍ノ庶務ヲ掌ル士官又ハ船長指揮者ハ第六十條ニ記スル所ニ循ヒ其證書ノ副本ニ通テ納ム可シ

船具ヲ取收ム可キ港ニ着セシ時ハ其乗組人ノ姓名簿ヲ海軍兵士召募ノ官署ニ納メ其官署ノ官吏ハ死去ノ證書ノ副本一通ヲ記シ姓名ヲ手署シテ死者ノ住所ノ身上証書ノ官吏ニ送達ス可シ但シ其官吏ハ其副本ヲ直チニ身上證書ノ簿冊ニ登記ス可シ

本條ハ第六十條ニ於ルガ如シ、然ルニ婚姻ノ事ノミ掲載セサルハ、其成立ノ爲メ必要トスル所ノ公告及諸儀式ヲ行ヒ得サルガ故ニ、海上ニ於テハ決シテ婚姻ヲ行フヲ得ヘカシサルヲ以テナリ、

坑業ヲ爲スノ際壓死又ハ其他ノ不幸ナル事故ノ爲メニ死去シ、其死骸ヲ得サル時身上證書ノ官吏ハ、事實ヲ證スル調書ヲ製シテ、之ヲ檢事ニ送致シ裁判所ノ許可ヲ得テ、此調書ヲ身上證書ノ簿冊ニ附シテ以テ死去ノ證書ニ代用ス、(一千八百十三年一月三日ノ勅書)

○第五章 佛蘭西國外ニ在ル軍人ノ身上證書

當時第一等「コンスニル」職「ナポレオンポナバルト」ノ發言ニ因リ、法典ノ編纂者、國旗ノ在ル所即チ佛蘭西ナリ、ト言フ新ナル原則ヲ認許シタリ、之ニ因テ佛蘭西ニ在ル軍人ノ身上證書ハ、佛蘭西ノ法律ニ從ヒ、或ル士官之ヲ記成スルコト定メタリ、

第八十八條 軍人又ハ軍属ニ付キ佛蘭西國外ニ於テ記ス可キ身上證書ハ前數條ニ記シタル法式ヲ以テ之ヲ記ス可シ但シ後ノ數條ニ記スル所ハ格別ノ規則ナリトス(民三四、四七、五六、七六、七八、九八三、)

外征ノ兵士即チ佛蘭西ニアル兵士ノ身上證書ハ、外國ノ法式ヲ以テ記ストモ法ニ適シタル者トナスヲ得ス、故ニ本條ハ場所ハ証書ヲ支配ス、(ロキニースレザートアクナム)

ト云フ一般ノ原則ニ關涉セサル者トス、然レモ若外征ノ軍中ニ在ル一箇ノ兵士、外國ニ於テ外國ノ女ヲ娶ル時ハ、其婚姻ノ證書ハ、之レヲ爲シタル所ノ國ノ法式ニ遵カハサルヘカラス

第八十九條 一箇又ハ數箇ノ歩兵大隊又ハ騎兵大隊ノ「カルチエーメイトル」(一大隊中ノ庶務ヲ掌ル官吏)及ヒ其他兵隊ノ指揮官ハ身上證書ノ官吏ノ職務ヲ行フ可シ但シ兵隊ヲ指揮セサル士官及ヒ軍屬ノ身上證書ニ付テハ一軍又ハ其一部ニ屬スル閱兵ノ監察官身上證書ノ官吏ノ職務ヲ行フ可シ(民九七、)

「カルチエーメイトル」ハ「マジョール」(聯隊ノ庶務會計ヲ掌ル官吏)之レニ代リ、閱兵ノ監察官ハ「アンタンダン」又ハ「スーアンタンダン」(陸軍ノ一管區又ハ一軍ノ庶務會計ヲ掌ル官吏)之レニ代ル、

第九十條 各兵隊ニ於テハ其隊中ノ者ノ身上證書ヲ記ス可キ簿冊一冊ヲ設ケ置キ又一軍及ヒ其一部ノ「エタマジョール」(參謀士官ノ伍)ニ於テハ兵隊ヲ指揮セサル士官及ヒ軍中ニテ使用スル者ノ身上證書ヲ記ス可キ簿冊一冊ヲ設ケ置ク可シ但シ此簿冊ハ兵隊及ヒ「エタ

マジョール」ノ他ノ簿冊ト同一ノ法ヲ以テ之ヲ藏メ置キ軍隊ノ歸國シタル時之ヲ兵局ノ書房ニ納ム可シ(民四〇、九一、)

第九十一條 其簿冊ハ各兵隊ニ於テハ其指揮ヲ爲ス士官記號ヲ附シ及ヒ姓名ノ手署ニ代用スル艸名ヲ畫シ又「エタマジョール」ニ於テハ其伍長其記號ヲ附シ及ヒ艸名ヲ畫ス可シ(民四一、九〇、)

本條ノ規定ハ、第四十一條ノ規定ト同様ノ保固ヲ包含ス、此事ニ付成典ニ明文ナシト雖モ、軍人ノ身上證書ノ簿冊ハ印紙ヲ用ヒサルヲ許ス、蓋シ軍中ニ於テハ之ヲ要スルモ實ニ行ヒ難キヲ以テナリ、

第九十二條 軍中ニテノ出産ノ申述ハ出産ノ日ヨリ十日内ニ之ヲ爲ス可シ(民五五、)出産ノ申述ノ期限ハ、元來三日ナルヲ(第五十五條見合セ)之ヲ緩ニセシ所以ハ、身上證書ノ調成ヲ任セラレタル士官ノ繁劇ナル通信往復ノ困難ナル等都テ、軍中ノ混雜ナルヲ以テノ故ナリ、

第九十三條 身上證書ノ簿冊ヲ管守スル任ヲ受ケタル士官ハ其簿冊ニ出産ノ證ヲ記セシ時

ヨリ十日内ニ其摘撮書ヲ生レタル子ノ父ノ最終ノ住所ノ身上證書ノ官吏ニ送達ス可ク若シ其父ノ知レサル時ハ其母ノ最終ノ住所ノ身上證書ノ官吏ニ送達ス可シ(民八九、一〇二)

身上證書ノ官吏ハ、其受取リシ所ノ摘撮書ヲ直ニ其簿冊ニ登記ス、(第九十八條見合セ)

第九十四條 軍人及ヒ軍属ノ婚姻ハ其最終ノ住所ニ於テ公告ス可ク且其公告ハ婚姻ヲ行フ時ヨリ二十五日前ニ兵隊中ノ者ニ付テハ其隊ノ毎日ノ命令書中ニ登記シ兵隊ヲ指揮セサル士官及ヒ軍属ニ付テハ一軍又ハ其一部ノ毎日ノ命令書中ニ登記ス可シ(民六三ヨリ六五、一六六ヨリ一六九、一九二)

本條公告ト婚姻執行トノ間ダニ別段長キ期限ヲ要シタルハ、兵士ノ或ハ二婦ヲ娶ル(ビガミー)ノ罪ヲ犯サンコトヲ豫防スルガ爲メ、又軍人在役ニシテ軍勢ノ一部タル時ハ陸軍宰相ヨリ、書面ヲ以テノ許可ヲ得タル後ニアラサレハ、婚姻ヲ爲スコトヲ許サレハナリ、(一千八百三十四年ノ法律及ヒ一千八百六十八年五月十九日ノ法律)

第九十五條 身上證書ノ簿冊ヲ管守スル士官ハ婚姻ノ證書ヲ簿冊ニ記シタル後直チニ其副

本一通ヲ夫婦ノ最終ノ住所ノ身上證書ノ官吏ニ送達ス可シ(民七六、八九、九三、一〇二)

簿冊管保ノ任ヲ受ケタル士官、出産及ヒ死去ノ證書ノ副本ヲ身上證書ノ官吏ニ送致スル爲メ十日ノ猶豫アリ(第九十三條第九十六條見合セ)ト雖モ、婚姻ノ證書ハ直ニ送致セザルヘカラス、蓋シ他ノ證書ヨリ之ヲ重シ軍中不意ノ危難ヲ避クルカ爲メナリ、

第九十六條 死去ノ證書ハ各兵隊ニ付テハ「カルチエーメイトル」證人三員ノ證ヲ以テ之ヲ記ス可ク又兵隊ヲ指揮セザル士官及ヒ軍属ニ付テハ一軍ノ閑兵ノ監察官證人三員ノ證ヲ以テ之ヲ記ス可シ但シ其證書ノ摘撮書ハ十日内ニ死者ノ最終ノ住所ノ身上證書ノ官吏ニ送達ス可シ(民三四、四六、七八、八九、九三、一〇二)

通常法ニ於テ、死者ノ證書ヲ記スルニ證人二員ヲ要ス、此ニ三員ヲ要スルハ、軍中ニ於テハ人ノ相違ナキコトヲ證スルニ錯誤アラソコトノ恐レ常時ニ比スレハ稍々多キヲ以テナリ、

第九十七條 搬運ス可キ兵病院又ハ搬運ス可カラサル兵病院ニ於テ死去シタル者アル時ハ其病院ノ支配人死去ノ證書ヲ記シ之ヲ死者ノ兵隊ノ「カルチアーメイトル」又ハ一軍或

ハ其一部ノ閱兵ノ監察官ニ送り此等ノ士官ヨリ其證書ノ副本一通ヲ死者ノ最終ノ住所ノ
身上證書ノ官吏ニ送達ス可シ(民八〇、八九、九三、一〇二、)

病院ノ首長ハ、證人三員ノ申述ヘテ死去ノ證書ヲ記ス、(共和政治第八年十一月四
日ノ教令)

第九十八條 前ノ數條ニ記シタル死者ノ住所ノ身上證書ノ官吏ハ兵隊ヨリ其身上證書ノ副
本ヲ受取りタル時、直チニ之ヲ身上證書ノ簿冊ニ登記ス可シ、(民四八、五〇、九三、九五
リ九七、)

人ノ死去シタル事ハ、必ス其住所即チ其遺産相續ヲ創ムヘキ場所ニ於テ、之ヲ報告セサ
ルヘカラス、

○第六章 身上證書ヲ改ル事

身上證書ノ改正ハ、苗氏ノ字綴リ惡シキカ、或ハ實名ノ遺脱又ハ前後シタルカノ爲メニ
多クハアル者ナリ、婚姻ニ付テ右ノ如キ錯誤アル證書ヲ示サント欲スル時、其改正ヲ得
ルカ爲メニハ必スシモ裁判所ニ請求スルヲ要セサルコトハ第七十二條ニ於テ詳悉セリ、

第九十九條 身上證書ヲ改ム可キコトヲ訴フル者アル時ハ管轄ノ裁判所ニ於テ檢事ノ申立ヲ
聽キ其更改ニ付テノ言渡ヲ爲ス可シ但シ其言渡ハ之ヲ控訴スルコトヲ得可シ○其身上證書
ニ管セシ者ヲ呼出ス可キ道理アル時ハ之ヲ呼出ス可シ(民四五、訴八三、八五五ヨリ八五
八、)

抑身上證書ハ、之ヲ記シレハ直チニ全社會ニ屬シテ公有物トナリ、邑長其他證書ニ管
シタル者ニ於テ如何ナル更正ヲモ施スコトヲ得ス、此證書ニ關係アリテ之レニ更正ヲ加
ヘント欲スル所ノ者ハ、代書人ヲ經由シテ初告裁判所ニ出願スルヲ要ス、即チ千八百六
十一年四月二十五日「メッツ」控訴院ノ裁決ニ因リ、身上證書ヲ記成シタル邑所在郡ノ
裁判所、即チ其書記局ニ身上證書ノ簿冊ヲ藏存スル所ノ裁判所ニ出願スルナリ、其裁決
ニ曰ク、証人吟味(「アンケート」) 或ハ其他ノ方法ニ因リ、身上證書ノ簿冊中登記ノ事
項ノ眞正ナルト否トヲ明カニスル爲メ報告ヲ最善ク採集シ得ヘキ地位ニアル者ハ、特
ニ身上證書ヲ記成シタル邑所在ノ郡ノ裁判所ナリ、而シテ身上證書ノ簿冊ノ保存ハ世治
ノ一事タレハ、若シ其證書ニ管シタル者其住所ヲ轉移シ、其現在所ノ何レノ所ニモ其出

願ヲ爲シ、自ラ其裁判官ヲ撰フ自由ナラシムル時ハ、其者ニ法外不當ナル權力ヲ與フルニ至ル云々、又千八百六十一年五月六日巴黎控訴院ニ於テモ、右ニ同シキ旨意ノ判決アリ、曰ク、第一佛國ニ住セシ者或ハ現在スル者ノ身上証書ノ証據ハ多ク身上証書ノ簿冊上ニ記シタル一箇ノ証書ヲ以テ確証スル事件ノ行ヒアリシ場所ニ在リ、証據ヲ採集スルコトニ付有益ナル人モ其場所ニ在リ、簿冊モ亦其場所ニ在リ、又更正ノ出願アル時ハ裁判官自ラ其簿冊ヲ檢スルコト緊要ナルニ、其簿冊ハ容易ニ之レヲ他所ニ搬運ス可カラサル者ナレハナリ、第二總テ身上証書ニ關係スル所ノ者ハ世治ニ關スルヲ以テ、其更正ノ出願ヲ判決スル裁判所ハ、証書ニ管シタル者ノ隨意ニ關係シ得ス、之ニ因テ更正ノ出願ヲ爲ス可キ所ノ裁判所ハ、其書記局ニ更正スヘキ証書ヲ記載シタル簿冊ヲ藏存スル所ノ者トスト、

身上証書更正ノ出願ヲ、裁判所ニ於テ判決シタル裁判申渡ハ、之レヲ控訴スルコトヲ得、何トナレハ斯ノ如キ願ニ付テハ、預定スヘカラサルノ價直アルヲ以テナリ、身上証書ノ更正ハ必ス身上証書ニ管シタル者ナラデハ之レヲ請願スルヲ得ス、檢事ト

雖モ職務上ヨリ之レヲ爲スノ權ナク、唯意見ヲ申述フルノ權アルノミ、然ルニ又此原則ニ關セサル者アリ、即チ貴族ノ爵號ニ關スル更正ニ付テハ、檢事其職務上ヨリシテ或ル身上証書ノ更正ヲ求ムルノ權アリトス、千八百六十二年一月二十二日覆審院ノ判決ニ曰ク、証書中ニ記入シタルコトニ付、檢事ヨリ其更正ヲ求ムルコトヲ得サル時ハ、法律ノ施行全ク其權力ヲ失フ可シ、故ニ多ク私ノ資益ヲ害スルコトナシトモ、大ニ世治ニ相觸ル、ヲ以テ、其告訴鞫問ハ社會ノ名ヲ以テ或ハ原告又ハ被告ノ主タル者トナル所ノ檢事ニ屬セサルベカラズト、

千八百六十七年三月二十五日覆審院ノ判決ヲ以テ貴族ノ爵號ニ關スルコトニ付テ、檢事ハ身上証書ノ更正ヲ直ニ告訴鞫問スルノ權アルノミナラズ、証書人ノ記シタル証書ニ付テモ亦告訴鞫問スルノ權アルコト判決シタリ、曰ク世治上ニ於テ誰人タリモ公ケノ証書中ニ自己ニ屬セサル姓氏又ハ爵號ヲ冒ス可カラサルコト緊要ナリ、其姓氏爵號ハ身上証書ハ勿論或ハ証書人ノ記シタル証書中ノ如キニ於テモ本人ナルト証人ナルトノ別ナク、總テ之レヲ冒カスヘカラサル者タルコトハ、共和政治第二年十二月六日同十一年七

月十一日及ヒ千八百五十八年五月二十五日ノ法律ノ文中ニ包括シタリト、若シ又遺脱シタル一箇ノ貴族ノ爵號ヲ身上証書ニ加入スル爲メ之レヲ更正セント欲スル時ハ、千八百六十三年六月一日覆審院ニ於テ裁決セシ如ク、先ツ國盟會議(審判宰相之レガ長タリ)ニ出願スルヲ要ス、其裁決ニ曰ク貴族ノ爵號ニ付テハ其所有ノ權定規ノ證書ニ因リテ確證セシル、ヲ要ス、故ニ若此要件ヲ欠ク時ハ尋常裁判所ハ千八百五十九年一月八日ノ勅書ノ規格ニ從ヒ其認許或ハ固定スルヲ付キ其判斷アヲサル内ハ、其請求ヲ受理スルヲ猶豫セサルヘカラズ、蓋シ要スルニ其請求ノ目的ハ裁判所ニ於テ其爵號ヲ認メ、又ハ之レヲ固定セシメントスルノ外ナラサルヲ以テナリ、

第百條 何レノ時ト雖ヒ、身上證書ニ管シタル者ノ中之ヲ改ルヲ願ハス又ハ之ヲ改ムルニ付キ呼出ヲ受ケサル者アル時ハ、其證書ヲ改ムル言渡ヲ其者ニ對シテ執行フヲ得ス(民五四、一三五、一、訴四七四、)

本條ハ裁判申渡ハ訴訟ニ預カリシ者ノ間ニノミナラデハ効チ生セス(レヌアンテルアリオスジエデカタ、アリーステクロープロデスト、チクローノセート)、ト云フ格言ヲ適施シ

タル者ナリ、然ルニ身上證書ノ更正アルニ付キ他ノ者金銀上ノ資益又ハ親族ノ資益ノ爲メニ關係ナキヲ保チ難キヲ以テ、前條既ニ身上證書ニ管シタル者ハ證書ノ更正ヲ願フ所ノ席ヘ呼出サレヘキ旨ヲ掲タリ、蓋シ身上證書ニ管シタル者若證書ノ更正自己ノ損害トナルヘキ時、其事ヲ仕遂ケタル後之レヲ取消サシムルニ比スレハ、其更正ヲ仕遂ケサル様豫防スル方、稍容易ナルヲ以テナリ、其呼出ヲ受サルニ因リ、更正ノ裁判申渡シニ付キ不服ヲ申立ツルヲ資益アリトスル者ハ、訴訟ニ預カラサル他ノ者ヨリ故障ヲ

申述フル(「チエルスタボジーシモン」)ノ方法ニ因テ訴フルヲ得、
裁判申渡ハ訴訟ニ預カリシ者ノ間ニノミナラデハ効チ生セスト云フ原則ハ、左ノ如キ事件ノ種類ニ於テハ奇異ナル結果ヲ提起ス、即チ「ビエール」ト云フ人「プリムス」及ヒ「セコンシユス」ナル二人ノ子ヲ遺シテ死去ス、然ルニ又茲ニ身上證書ニ父母共ニ知レサル子トシテ記入シタル「テルチユス」ナル者アリ、其出産ノ證書ヲ更正セント出願シ「セコンシユス」ニ其事由ヲ語ケテ其認許ヲ得、而シテ「ビエール」ノ公生ノ子即チ「セコンシユス」ノ公生ノ兄弟ナリトスル更正ノ裁判申渡シヲ得タリ、是ニ於テ「ビエール」ノ

遺産二萬四千「フラン」アリトシテ、之レヲ分派スルコト下ノ如シ、「プリムス」ハ公生ノ弟「セコンジュス」唯一人アリトス、故ニ父ノ遺物ノ半額即チ千二百「フラン」ヲ得、「セコンジュス」ハ「プリムス」及ヒ「テルナムス」ナル公生ノ兄弟二人アリトシ、遺物ノ三分ノ一即チ八千「フラン」ヲ得、而シテ其遺産ノ餘分四千「フラン」ハ「テルナムス」之レヲ得ベシトス、

第百一條 身上證書ヲ改ム可キ言渡書ハ身上證書ノ官吏之ヲ受取リタル後直チニ身上證書ノ簿冊ニ登記シ且之ヲ登記シタルコトヲ其改メタル身上證書ノ端ニ附記ス可シ(民四九、五〇、六二、訴八五七、)

私生ノ子ヲ我子ナリト認ムルコト、私生ノ子ヲ公生ノ子トナスコト、及ヒ養子ノコト等ニ付キ身上證書中、一箇ノ證ノ更正ノ裁判申渡シハ、必ス身上證書ノ簿冊中、其更正シタル證書ノ端ニ記入ス、身上證書ノ官吏其更正シタル證書ノ副本ヲ與フル時ハ、其更正シタル文ヲモ共ニ其副本中ニ記ス可シ、若シ此ノ規格ヲ犯ストキハ損失ノ償ヲ出スヘキ申渡シヲ受クベシ、

○第三卷 住所(一千八百〇三年三月十四日決定同月二十五日下達)

佛語ノ「ドミシル」(住所) ト云フ詞ハ、原ト羅句語ニテ「ドミユス」(家) ト云フ意味ノ詞ヨリ生シシモノニシテ、學者ノ其義解ヲ爲スコト左ノ如シ、第一住所ハ一箇ノ人其民權ヲ行フカ爲メ法律上ノ居所、第二住所ハ一箇ノ人ト其首タル建造物ノアル場所、即チ其事務ノ中心ニシテ其家産ノ所在トノ間ニ生スル關係ナリ、此義解ニ因レハ、住所ハ一箇ノ國民ト其政權ヲ行フ場所トノ間ニ存スル關係ナル「ドミシル」ボリチーク「(政事上ノ住所) ニ反對シテ「ドミシルシウキール」(民事上ノ住所) ト稱スヘク、又一箇ノ約定ヲ行フ爲メ特別擇ム所ノ「ドミシル」デレクシユン」(撰定ノ住所)ト特ニシテ「ドミシル、レール」(尋常ノ住所) ト稱スヘシ、民事住所ト政事住所トハ各分在シ得ベシト雖モ、多ク同シ地ニ在リ、尋常即チ一般ノ住所ト(尋常ノ住所ニ「ドミシル、ドリシース」(生來ノ住所) ト「ドミシル、アキー」(現在ノ住所) トノ別アリ、生來ノ住所トハ公生ノ子ノ爲メニ其父母ノ住所ヲ云ヒ、現在ノ住所トハ移轉シテ得タル住所ヲ云フ) 撰定即チ特別ノ住所トハ必ス分在ス、蓋シ人ハ必ス尋常住所一箇

チ有スベク且一箇ノミニ限ルヘシ、撰定住所ハ之チ有セサルコアリ、又數箇チ有スルコアリ、住所(「ドミシル」)ハ住居(「レシダンス」)ト相殊ナリ、住所ハ一箇ノ權利中ニ成リ立ツ、故ニ假令其所チ違カリ又ハ不在ノコアリトモ之チ保存ス、住居ハ一箇ノ地ニ現ニ居住スル事實中ニ成リ立ツ、故ニ其地チ離レ他ニ移居スルキハ之チ失フナリ、住所ハ人權及ヒ動産ノ物權ニツキ、一箇ノ人ノ被告タルベキ裁判所(第五十九條見合セ)人口稅チ拂フヘキ邑(千八百三十二年四月二十一日ノ法律ノ第十三條見合セ)及ヒ遺産相續チ創ムヘキ地(第一百十條見合セ)チ定ム

第二百二條 民權チ行フニ付テノ各佛蘭西人ノ住所トハ其首タル建造物ノアル地チ云フ(民九、十三、七四、一六五、一二四七、訴二、五〇、五九、六八、四二〇、治九一、刑一八四、森一〇五、

本條ハ唯民事住所ノ所在チ示スノミニシテ、其義ノ如何チ解スルニ至ラズ、且民法ノ規定スルチ得サル政事上ノ住所ニ論及スルコナシ、日雇チ以テ人ニ使用セラル、所ノ工夫、又ハ土地家屋及ヒ工業モ有ラサル者ノ爲メニ

ハ、定リタル住居チ以テ首タル建造物ト看做ス、

第二百三條 是迄ノ住所外ノ地ニ現ニ居住チ爲シ且其地ニ首タル建造物チ定メントスル意アル時ハ移住シタルト爲ス可シ(民一〇四、一〇七、一〇八)

住所チ轉移センカ爲ニハ、其事實ト其移シタル地ニ住居チ定メントスルノ意アルコトノ兩事具備スルチ必要トス、故ニ現在他ニ住居チナセシノミカ、又ハ首タル建造物チ定メントスルノ意アルノミニテハ、未タ住所チ轉移シタルモノトセス、

第二百四條 此意アルコトヲ證スルニハ其去ラントスル邑ノ官吏ト其移ラントスル邑ノ官吏トニ別段其申述チ爲ス可シ(民一〇三、一〇五)

實際ニ於テハ本條ノ申述チ爲スコナシ、蓋シ邑廳ニハ此申述チ受ケテ記録スヘキ簿冊ノ設ケアラサレハナリ、

第二百五條 其申述ニキ時ハ其時ノ摸樣チ以テ其意アルノ證ト爲ス可シ(民一〇四)別段ノ申述アラサル時、住所チ移轉スルノ意アルヤ否ヤノ摸樣チ監定スルハ裁判官ノ專任トス、之カタメ裁判官ハ住所チ判定セントスル所ノ者、一ノ邑内ニ於テ或ル職業チ

營ムカ或ハ其政權ヲ行フカ、不動産ヲ所有スルカ、其邑ニ於テ護國兵タルカ、租稅ヲ納ムルカ、殊ニ人口稅ヲ納ムルカヲ考査スベシ、

第六六條 定期ノ時間其職ニ在ル公務ノ任又ハ免黜スルヲ得ベキ公務ノ任ヲ受タル者ハ別段其住所ヲ移ス可キ意ヲ申述ヘサル時其元來ノ住所ヲ有ス可シ(民一〇三、)

定期アル公務トハ代議士ノ任ノ如キ期限アル時間ノ者ヲ云ヒ、免黜スルヲ得ベキ公務トハ州長、檢事、治安裁判役ノ職務ノ如キ政府之ヲ免黜シ得ヘキ者ヲ云フ、

第六七條 終身ノ公務ノ任ヲ受ケタル者ハ其住所ヲ其職務ヲ行フ可キ場所ニ直ニ移シタルト爲ス可シ

民事裁判所ノ裁判官ノ職務ノ如ク、畢生間免黜スヘカラサル職務ヲ受クル所ノ者ハ、其奉職ノ爲メ誓ヲ述フレハ、即時ニ其住所ヲ其職務ヲ行ントスル地ニ轉移ス、畢生間ノ職務ニシテ、其職ヲ行フノ前別ニ誓ヲ述フルヲ要セサルニ於テハ、一箇ノ書面ヲ以テ奉職ノ旨ヲ示ス時、或ハ別段奉職ノ旨ヲ示サ、ル時ハ現實其職務ヲ行ヒ始メシ時、直ニ住所ノ移轉ヲナス者トス

第六八條 婚姻シタル婦ハ其夫ノ住所ヲ以テ己レノ住所ト爲ス可シ○未タ後見ヲ免レサル幼者ハ其父母又ハ後見人ノ住所ヲ以テ己レノ住所ト爲ス可シ○治産ノ禁ヲ受ケタル丁年者ハ其後見人ノ住所ヲ以テ己レノ住所ト爲ス可シ(民二一四、三〇六、四五〇、五〇七、五〇九、一四四九、)

婚姻ヲ行ヒタル即時ニ、婦ハ其夫ノ住所ヲ己ノ住所トス、假令夫ノ住所現ニ婚姻ヲ行ヒシ場所ヨリ遠隔ノ地ニアリテ、婦未タ曾テ其地ヲ踏マサルモ、婦ヲシテ夫ノ保護權ニ從ハシムル如キ親密永久ナル一致和合ノ後ハ、婦タル者別ニ自己固有ノ住所ヲ有スルヲ能ハス、但裁判上ニ於テ夫婦ノ分居ヲ言渡シタル場合ニ於テハ格別ナリトス、蓋シ夫婦ノ分居ハ決シテ婚姻ヲ分離スルヲナシト雖モ、之レカ爲メニ大ニ交情ヲ薄カラシメ、且婦其夫ノ住所ヨリ遠隔シタル場所ニ住居シテ職業ヲ營ムル屢々ナルカ故ニ、其相續ヲ創ムルヲモ其夫ノ住所ニ於テスルヲ得ス、加之婦ノ一身ニ關スル呼出狀(裁判所ノ)ハ婦ノ住居ヘ送達セサルヘカラズ、右ノ如ク取除ノ場所アルニ因リ、本條ニ掲ケサルモ婦其夫ノ住所ト殊ナル住所ヲ有スル事アルヲ見ルベシ、

一ノ保護權ニ從ヒ、自己ノ民權モ其保護權ニ賴リテ行フ所ノ者ハ、其保護者ノ住所ヲ以テ己ノ住所ト爲ス可シ、故ニ幼年ナル子ハ、其父ノ住所ヲ己ノ住所トシ、後見ヲ受クル所ノ幼者及ヒ治産ノ禁ヲ受ケシ者ハ、其後見人ノ住所ヲ以テ己ノ住所トス、然レモ何レノ方法ニ付テモ、幼者或ハ治産ノ禁ヲ受ケシ者、其後見ヲ免ル、時ハ自己ノ舊住所、即後見ノ始マリシ時有セシ所ノ住所ヲ復有ス、之ニ反シテ婦ハ夫ノ死去ノ後ト雖モ夫ノ住所ヲ保有ス、

第百九條 平常他人ノ家ニテ使用ヲ受ケ又ハ工作ヲ爲ス丁年者ハ其使用ヲ爲ス者又ハ工作ヲ爲サシムル者ノ住所ヲ以テ己レノ住所ト爲ス可シ(民一〇八、)

平常他人ノ家ニテ使用ヲ受ケ或ハ工作ヲ爲ス者、未ダ後見ヲ免カレサル幼者ナル時ハ、依然其父或ハ後見人ノ家ヲ己ノ住所トス、若其者丁年ナルカ又ハ後見ヲ免カレタル幼者ナル時ハ、其主或ハ其長ノ家ヲ己ノ住所トス、何トナレハ其者住居スル所ノ家ニ、其住所ヲ定ムルノ意アリト思度スレハナリ、此場合ニ於テ婚姻シタル婦ハ、仮令其夫ノ主或ハ長ノ家ニ住居セス他家ノ使用ヲ受クルト雖モ、毎ニ其夫ノ主或ハ長ノ家即チ夫ノ住居

ヲ以テ己ノ住所トス、

第百十條 遺物相續ヲ爲ス可キ場所ハ住所ニ因リテ定ム可シ(民七七〇、七八四、七九三、八一、二、訴五九、)

死去シタル人若シ相續人一人ノミテ遺ス時ハ、其死去ノ即時ニ其住所ヲ此相續人ノ方ニ移シタル者ト看做ス、蓋シ此相續人ハ死者ノ諸權ヲ悉皆繼有スレハナリ、然ルニ死者若シ相續人數人ヲ遺留セシ時ハ其相續ハ死者ノ住所ニ於テ創メ、其住所ハ遺產分配ノ時迄之ヲ保有スル者トス、故ニ此場合ニ於テ遺產分派ノ訴訟、又ハ遺產確定ノ分派ニ至ルマテ贈遺ノ物件ヲ請取ランカ爲メノ請求、及死者ノ負債償還ノ請求ハ、死者ノ住所所在ノ裁判所ニ告訴スベキヲ要ス(第八百二十二條訴第五十八條見合セ)

第百十一條 一箇ノ證書ニ記シタル約定ヲ行フニ付キ其契約ヲ結ヒシ雙方又ハ一方ノ者其證書上ニ現今所在ノ住所外ニ於テ更ニ他ノ住所ヲ擇ム可キヲ記シタル時ハ其證書ニ付テノ呼出狀ハ其特ニ擇ミタル住所ニ送達ス且其證書ニ付テノ訴訟モ亦其特ニ擇ミタル住所ノ地ノ裁判所ニ爲スヲ得可シ(民一七六、一一三四、一一五六、二一四八、二一五二、訴五

九六一、四二〇、四二二、四三五、五五九、五八四、六三七、六七三、九二七、

撰定ノ住所若シ債主ノ便益ノ爲ノミニナシタル時ハ、債主己ノ欲スル所ニ從ヒ撰定住所ノ裁判所又ハ尋常ノ住所ノアル地方ノ裁判所ニ訴フルヲ得ヘシ、若シ債主ノミニ便益、或ハ雙方ノ便益ノタメ擇ミタル時ハ、債主其撰定ノ住所ノアル地方ノ裁判所外他ノ裁判所ニ訴フルニハ、負債主ノ承諾ヲ必要トス、時トシテハ雙方ノ者撰定住所ヲ爲スノ代リニ、唯其證書ニ記シタル約定ノ執行ヲ照管スヘキ所ノ裁判所ヲ指示スリアリ、蓋シ此場合ニ於テ其契約ハ雙方ノタメ法律トナルベシト雖モ、呼出狀其他トモ雙方ノ尋常ノ住所ニ送達スルヲ要ス、撰定ノ住所ハ尋常ノ住所ト殊ニシテ、一箇ノ契約ノタメ特別ナルモノナレハ、其契約ヲ結ヒタル一方ノ承諾ナク之ヲ變スルヲ得ズ、且既ニ得有シタル一箇ノ權利トナレハ、雙方ノ者死去ストイヘモ依然保存シテ相續人隨意ニ之ヲ變更シ又ハ取消ス可能ハス、

佛民法註釋第一冊終り

正誤

緒言四丁ノ第七行 一千八百〇四年ハ 一千八百〇三年ノ誤

同 第十二行 數目ハ 條目ノ誤

四丁第三行 リハ テノ誤

六丁第十一行 ナリシハ ナセシノ誤

十丁第八行 手ハ ニノ誤

十一丁第一行 人事法ハ肉ノ骨ニ於ケル如シハ 人事法ハ肉ノ骨ニ於ケル如シノ誤

十七丁第三行 「オンス」ハ 「オンム」ノ誤

二十丁第八行 波蘭人ハ 波蘭人ノ誤

廿九丁第六行 訴ハ訟ハ 訴訟ハノ誤

四十五第三行 且ハ 具ノ誤

四十六第九行 人遺産ノ下ニ(チ)ノ字ヲ脱ス

五十七第七行 身上ノ誤

佛國 山崎直胤譯
民法註釋
 第二冊

六十第四行	疵疫ハ	疵癘ノ誤
六十四第九行	會社ハ	社會ノ誤
同 第十一行	官吏ハ	官吏ノ誤
七十一第三行	姓各ハ	姓名ノ誤
七十三第三行	第三章ノ上ニ〇ヲ脱ス	
八十第二行	事件ノ下ニ(チ)ノ字ハニ	
八十六第九行	シーハ	ミ一ノ誤
八十八第十二行	契約ノ下ニ(書)ノ字ヲ脱ス	
百〇五第十行	アノケートハ	アノケートノ誤
百〇七第八行	裁決テハ	裁決チノ誤
百一十一第十一行	ドリジョースハ	ドリジョースノ誤

山崎直胤譯
 佛 國
 民法註釋
 第二冊

六十第四行	疵疫ハ	疵癘ノ誤
六十四第九行	會社ハ	社會ノ誤
同 第十一行	官吏ハ	官吏ノ誤
七十一第三行	姓各ハ	姓名ノ誤
七十三第三行	第三章ノ上ニ〇ヲ脱ス	
八十第二行	事件ノ下ニ(チ)ノ字ハニ	
八十六第九行	シーハ	ミーノ誤
八十八第十二行	契約ノ下ニ(書)ノ字ヲ脱ス	
百〇五第十行	アノケイトハ	アンケイトノ誤
百〇七第八行	裁決テハ	裁決チノ誤
百一十一第十一行	ドリジョースハ	ドリジョースノ誤

○第四卷 失踪(千八百三十三年三月十五日決定同月二十日下達)

「アブサン」(失踪)ト云フ詞ハ唯不在ト云フ意味ナリト雖也、此所ニ於テハ人其住所ヲ去リシ後更ニ消息ナク、生死ノ如何モ知レサル者ヲ指シテ云フ、

失踪ノ時間ヲ三期ニ分ツ、第一失踪思度ノ期、第二失踪公告ノ期、第三失踪者ノ財產ヲ他人ノ所有ト爲サシムル期、民法上種々配慮ノ目的タル失踪者ノ權利ハ、民法編纂以前ノ法制ニ於テハ少シモ保護セラレシコトナク、親族及本國ヲ遠サカリ旅行ヲ爲ス所ノ佛人ヲ視ルコト深切ナラス、蓋シ失踪者ノ資益及財產ヲ保護スル爲メ、別段規定ノ備ハラサリシヲ以テナリ、

○第一章 失踪ヲ思度スル事

人其住所ヲ去リ消息ナシト雖也、其失踪ノ公告ナキノ間ハ、只失踪シタルト思度スルノミ、此思度ハ生死ヲ懸念スルニ始マリ、存生ノ證或ハ死去ノ證或ハ失踪公告ノ裁判申渡アルカニヨリテ終ル所ノ第一期中ニ於テハ、死去シタリト看做サスシテ存生シタルモノト看做セハナリ、

第百十二條 失踪ノ思度ヲ受ケタル者名代人ヲ任セサル時其遺留シタル財産ノ全部又ハ一部ヲ支配ス可キ用意ヲ爲スノ必要ナルニ於テハ其思度ヲ受ケタル者ニ管セシ者ノ願ヲ以テ初告裁判所ヨリ其用意ヲ爲ス可キヲ言渡ス可シ(民二八、一一四、一一五、一二二、一二三、二〇九三、訴八五九、八六〇、)

失踪ノ思度ヲ受ケシ者ニ管セシ者ノミ、失踪ノ思度ヲ受ケシ者ノ遺留財産ノ管理ヲ用意スベキヲ願ヒ得ベシ、其管セシ者トハ失踪ノ思度ヲ受ケシ者ノ債主、其者ト財産ヲ共有スル者、財産共通ノ配遇者ノ如キ既有ノ權利アル所ノ者ヲ云フ、子モ亦其内ニ在リ蓋シ子ハ養料ヲ受クルノ權利アルノミナラス、法律上遺物ノ定分ヲ得ルノ權利アレハ、其父母ニ屬スル財産ノ共有者ノ如ク看做サルレハナリ、然レ尋常一般ノ相続人、遺囑ノ贈遺ヲ受クベキ者、及婚姻ノ契約書ヲ以テ定メタル贈遺ヲ受クベキ者ノ如キ、失踪ノ思度ヲ受ケタル者ノ死去ニ因リ、其權ノ生スル所ノ者ハ、本章ニ於テ之ヲ管シタル者トセス、(最親ノ相続人ハ之ニ管シタル者トシ、財産管理ノ用意ヲ願フノ權アリトノ説モアリテ一定セス)失踪ノ思度ヲ受ケシ者ニ管スル者ナキカ、又ハ之アリトモ自己ノ資益ヲ

保存スルコトニ注意セサル者ナルトハ檢察官モ亦財産保護ノ處分ヲ要求シ得、何トナレハ第百十四條ニ於テ檢察官ハ失踪ノ思度ヲ受ケシ者ノ資益ヲ監護スルノ任アレハナリ其財産保護ノ處分ヲ要求シ得ベキコトハ其必要ノ場合ニ限ル可シ、蓋シ急迫ノコトアラサルカ又ハ必要ノ處分ヲナスカ爲メ充分ノ權アル名代人アルカノトハ、此必要ノ場合アルコトナシ、

事ニ管セシ者ノ願ヲ受理スル權アル裁判所ハ、民事裁判所ニシテ財産所在ノ地ノ裁判所ニアラス、即チ失踪ノ思度ヲ受ケシ者ノ住所ノ裁判所ナリ、此件ハ頗ル論說多ク一定セスト雖レ、之ニ反對ノ説ハ總テ大ナル不都合ヲ生スルコト屢ナリ、

第百十三條 其裁判所ニ於テハ失踪ノ思度ヲ受ケシ者ニ管シタル者ノ中最初ニ訴出シタル者ノ願ニ應シ其思度ヲ受ケシ者管係アル財産ノ目錄諸件ノ算計遺物ノ分派會計ノ完清等ノ諸事ニ付キ其思度ヲ受ケタル者ニ代ル可キ證書人ヲ任ス可シ(民一三五、一三六、八一、八三八、八四〇、一八七二、訴九二八、九三一、九四二、)

本條ハ失踪ノ思度ヲ受ケシ者、其家出ノ時開始シタル或ル遺物ノ相続又ハ或ハ財産共

通ノ會社中ニ於テ、既得ノ權利ヲ有シタルモノト思度シタルナリ、故ニ其相續本人家出
 ノ後ニ開始シタル時ハ之ヲ得ルノ權利ナキ者ト看做ス、(百三十六條見合セ)因テ代理
 人ヲ任スルナシ、蓋シ本條ノ如キ場合ニ於テ失踪ノ思度ヲ受ケシ者ト共ニ相續スベキ
 者ハ、其相續シタル遺物ヲ必シモ他ノ相續人ト永ク共有スルニ及ハサルヲ以テ、其者ヨ
 リ失踪ノ思度ヲ受ケシ者ニ代理スベキ證書人ヲ選任アラソク願求ス、而シテ此證書
 人ハ財産ノ目錄、諸件ノ算計、遺物ノ分派及會計ノ完済ノ證書ノ記成人タルヲ得ス、
 第百十四條 檢察官ハ失踪ノ思度ヲ受ケタル者ノ資益ヲ別段ニ監守ス可ク且其思度ヲ受ケ
 シ者ニ管シタル訴訟アル時ハ裁判官必ス此官ノ申立ヲ聽ク可シ(民一一二、一一六、一
 七、一二六、訴八三、九八一)

本條ニ於テハ檢察官モ失踪ノ思度ヲ受ケシ者ニ管シタル者ノ如ク、失踪ノ思度ヲ受ケ
 シ者ノ財産保護ノ爲メ、必要ナル假ノ處分ヲ裁判所ニ向テ要求スルヲ得、

○第二章 失踪ノ公告

失踪ハ裁判申渡ヲ以テ之ヲ公告ス、而後失踪ノ思度ヲ受ケシ者ヲ稱シテ失踪者ト曰フ、

失踪ノ第二期ノ始メナル失踪ノ公告ハ、其家出シタル者死去セリト思料スルヲ力ヲ
 増シ相續人タルベキ者ニ其財産ヲ假ニ所有セシムルノ効アリ、

第百十五條 人其住所又ハ寄留スル場所ニ歸來スルヲナク且四年來其消息ヲ得サル時ハ其
 失踪者ニ管シタル者ヨリ初告裁判所ニ失踪ノ公告ヲ爲ス可キヲ訴出スルヲ得可シ(民
 一一二、一二〇、一二一、訴八五九)

失踪ノ公告ヲ願ヒ得ベキ者ハ、第百十二條ニ記列シタル所ノ失踪ノ思度ヲ受ケシ者ニ
 管シタル者ト異ナリ、入額ヲ所得ト爲サンカ爲メ財産ヲ假ニ所有セント求ムル者、即チ
 最親ノ相續人、死去スルニ因テ權利ヲ有スヘキヲ現然タル者、(例ヘハ生存中ノ贈遺ヲ
 受ケシ者)及一般ノ資益ノ爲メ從事スル所ノ檢察官等ナリ、遺囑ノ贈遺ヲ受クヘキ者ハ
 失踪ノ公告ヲ願フヲ得ヘキ者ノ中ニ算入セス、何トナレハ遺囑ノ贈遺ヲ受クヘキ者
 ハ、遺囑贈遺ノ開始スル時(失踪ノ公告ノ後)ニ至ルマテハ決シテ自己ノ資益ノ成立チ
 シヲ證據立ツルヲ得サレハナリ、(第百二十三條見合セ)(遺囑ノ贈遺ヲ受クベキ者ハ
 失踪ノ公告ヲ願ヒ得ザルモノナリトセハ、假ノ相續人ノ謀計ニ因テ其權利ヲ妨害セラ

ル、トアラシキヲ恐ル、故ニ其者ハ檢察官ニ依頼シテ其事ニ參預スルヲ求ルノ方便アリ、此場合ニ於テ檢事ハ一面其遺囑贈遺ハ確實ナリト推考シ、一面假ノ相續人徒ニ遺囑贈遺ノ開始ヲ遷延スルカ爲メニ、之ヲ受クル者ノ權利ヲ妨害スルノ情狀アリト推考スルトキハ、失踪ノ公告ヲ求ム可シ)

失踪公告ノ願ヒハ、最終ノ消息アリシヨリ四年、若又名代人ノアルトキハ十年(第二百一十一條)ノ後ニアラサレハ、代書人ノ記シタル願書ヲ以テ、家出シタル者ノ住所ノ裁判所ニ之ヲ出願スルヲ得ス、最終ノ消息アリシヨリト云フ期限ハ、消息到達ノ日ヨリ起算スルニアラス、書翰ヲ記シタル日ヨリ起算ス、蓋シ家出セシ者ノ生死如何ノ懸念ハ實ニ此日ヨリ始マレハナリ

第二百十六條 裁判所ニ於テハ其受取リタル證書及書類ヲ取調ヘタル上失踪ヲ證ス可キ爲メ失踪者ノ住所ノ郡中ニ於テ檢事立會ノ上證人吟味ヲ爲ス可キヲ言渡ス可シ若シ其住所外ニ寄居スル場所アル時ハ其場所ノ郡中ニ於テモ亦檢事立會ノ上證人吟味ヲ爲ス可キヲ言渡ス可シ(民一〇二、一一四、訴二五五、二五六、)

證人吟味トハ原被兩造中ノ一方ニテ承認セサル一個ノ事件ニツキ、證人ノ申述ヲ聽クヲナリ、本條ニ於テノ證人ハ原告即願人ヨリ之ヲ指示シ、家出シタル者ノ血屬又ハ姻屬證人トナルヲ得、蓋シ血屬又ハ姻屬ハ家出セシ者消息ヲ爲セシヤ否ヲ知ルヲ他人ニ勝ルヲ以テナリ、證人吟味ハ家出セシ者ノ住所ニ於テ爲スベキノミナラス、若シ住所外ノ地ニ居住セシ時ハ、其地ニ於テモ之ヲ爲ス、之カ爲メ家出セシ者ノ住所ノ裁判所ハ、其住居セシ地ノ裁判所ニ托シテ證人ノ述ル所ヲ聽カシム(斯ノ如ク此裁判所ヨリ彼裁判所ニ托シテ辨用セシムルヲ「コンミシヨ」ノロガトアルト云)何レノ場合ニ於テモ檢事ハ事ヲ探偵スルニ有益ナリト思料スル所ノ各人ノ申述ベテ求ムルノ權アリ、

第二百十七條 又裁判所ニテ失踪公告ノ訴ヘアルニ付キ其公告ノ言渡ヲ爲スニハ其失踪ノ緣由及ヒ失踪ノ思度ヲ受ケシ者ノ消息ヲ得ルノ妨トナル可キ原由ニモ亦注意スベシ
裁判所ニ於テハ家出セシ者ノ初メヨリ長キ旅行ノ積リヲ以テ出發セシニアラサルヤ、戰爭或ハ傳染病ノ爲メ往復ノ困難ナル場所ニアラサルヤ吟味シ、其場合ニ因テ可否ノ申渡ヲ爲スベシ

第百十八條 檢事ハ預審ノ裁判言渡書及ヒ確定ノ裁判言渡書ヲ受取タル毎ニ直チニ之ヲ審判宰相ニ送呈シ其宰相此言渡書ヲ公告セシム可シ(民一一四、一一九、)

預審ノ裁判言渡ハ、一般ニ訴訟ノ本案ノ判決ヲ豫シメ整備スル所ノ言渡ナレド、本條ニテハ證人吟味ヲ命スル所ノ言渡ナリ、確定ノ裁判言渡ハ、一般ニ訴訟ノ本案ヲ判決スル所ノ言渡ナレド、本條ニテハ失踪ヲ言渡ス所ノ言渡ナリ此二個ノ裁判言渡ハ公報日誌ニ記入シテ公告ス、此日誌ハ全地球殆ント到ラサル所ナキカ故、失踪者ノ踪跡ヲ知りテ告知セント欲スル者ハ裁判所ニ告知スベキヲ宣告シ、且失踪者或ハ自己不在中其住所ニ於テ經過スル事柄ヲモ知り得ベキナリ、

第百十九條 失踪公告ノ言渡ハ失踪吟味ノ言渡ヨリ一年ノ後ニ非サレハ之ヲ爲ス可カラズ(民一一六、一一八、)

證人吟味ヲ命スル裁判言渡ノ公告ニ因テ家出者其住所ニ歸來スルカ、或ハ消息ヲ爲スカ爲メニハ、一ケ年ノ期限ヲ以テ足レリトス、

○第三章 失踪ノ効

本章ノ三款ニ於テ失踪ノ効ヲ細説ス、第一失踪者ノ財産、第二失踪中開始シタル遺物相續第三失踪者ノ婚姻、

○第一款 失踪者其家出セシ時所有シタル財産ニ付テノ失踪ノ効

第百二十條 失踪者其財産ヲ支配セシム可キ名代人ヲ任セザルニ於テハ其家出ノ時又ハ其最終ノ消息ヲ得タル時ノ最親ノ遺物相續人當時失踪者ノ所有セシ財産ヲ失踪ヲ公告スル確定ノ裁判言渡ニ依リ假リニ已レノ所有ト爲スノ許ヲ受クルヲ得可シ但シ其相續人ハ其財産ヲ正實ニ支配ス可キ保証ヲ立ツルヲ必要ナリトス(民一一一ヨリ一二四、一三五、一三六、七二三、八一七、二〇一一、二〇四〇、二〇四一、訴五一七、五一八、八五九、八六〇、) 失踪ヲ公告スベキ裁判言渡アレハ、直ニ失踪者ノ財産ヲ假ニ所有スヘキヲ願フベシ、(失踪ノ公告ト失踪者ノ財産ヲ假ニ所有セシムベキヲハ多クハ同一ノ裁判言渡書ヲ以テス)最終ノ消息アリシヨリ後ニ開始シタル遺物相續ノ部分タル財産ハ此財産中ニ算入スベカラズ、蓋シ其遺物相續ノ開始シタル時既ニ失踪者ノ存亡不分明ナルヲ以テ、其者ハ決シテ眞ノ相續人ニアラサル者ト見做ス(第百三十五條見合セ)財産ヲ假ニ所有セン

ト願ヒ得ル所ノ者ハ、失踪者名代人ヲ任セシト否トニ抱ハラス、其家出ノ時又ハ最終ノ消息アリシ時最親ノ相續人ナリ、是ヲ以テ最終ノ消息ノアリシ日ニ於テ最親ノ血屬ナル者、失踪ヲ公告スベキ裁判申渡ノ前ニ死去シタル時ハ、其者ノ相續人、或ハ財産全部ノ遺囑贈遺ヲ受ク可キ者、或ハ別段指定メサル財産ノ一部ノ遺囑贈遺ヲ受ク可キ者、失踪公告ノ日ニ於テ最親ノ相續人ニ代リ、失踪者ノ財産ヲ假有スルノ權利ヲ有ス、

失踪者ノ財産ヲ假有スルノ許シテ受ケタル者ハ、決シテ眞ノ所有者ニアラス、唯専ラ其財産ニ管シタル管理人タルノミ、其管理ヲ正實ニ爲スガ爲メ契約ヲ結ビ得ベキ權利ヲ有シ、且義務ヲ行ヒ得ベキ能力アル者ヲ保證人ニ立ルヲ要ス(第二千四十條見合セ)

第二百一十一條 失踪者名代人ヲ任シタル時ハ其失踪ノ時又ハ其最終ノ消息ヲ得タル時ヨリ滿十年ノ後ニ非レハ其最親ノ遺物相續人其失踪ノ公告ヲ得ルヲ及ヒ其失踪者ノ財産ヲ假リニ己レノ所有ト爲スヲ訴出ス可カラス(民一一五、一二二、)

失踪者家出ノ時、財産及ヒ其他ノ事ヲ管理セシムルカ爲メ名代人ヲ任シタルハ、以テ長ク歸來セサルノ意ヲ示シタルナリ、故ニ此場合ニ於テハ假令其者家出セシ後、或ハ最終

ノ消息アリシ後幾程ナク名代人ノ死去スルヲアリトモ、失踪公告ノ願ヒハ最終ノ消息アリシヨリ十年ノ後ニナラテハ爲ス可カラス、又確定ノ裁判申渡、即失踪公告ノ申渡ハ十一年ノ後ニ非レハ爲スヲ得ス、然レモ一個特別ノ事件ニ付テノ委任ハ、失踪公告ヲ願フカ爲メ必要ナル期限ヲ十年マテ延期スルヲナシトス、

第二百二十二條 其十年ノ時間ニ名代人ヲ任シタル期限ノ終リシ時モ亦前條ニ記スル所ト同一ナリトス但シ此場合ニ於テハ失踪者ノ財産ヲ支配セシム可キ爲メ此卷ノ第一章ニ記シタル如ク處置ス可シ(民一一二、一一三、一二二、)

一般名代ヲ任スルノ時間ニハ定限アリ、例ヘハ二年間名代ヲ任シタル時ト雖モ、最終ノ消息ヨリ十年ノ後ニアラサレハ失踪公告ノ願ヲ爲スヲ得ス、之ニ反シテ名代ノ期限甚ク長ク例ヘハ三十年間任シタル時ト雖モ、亦十年ノ後ニ至レハ公告ノ願ヒヲ爲シ得、

第二百二十三條 失踪者ノ最親ノ遺物相續人其財産ヲ假リニ所有ト爲スヲ得タル時其失踪者ノ遺囑書アルニ於テハ失踪者ニ管シタル者又ハ其地ノ裁判所ノ檢事ノ求メニ因リ其遺囑書ヲ開封シ失踪者ヨリ生存中ノ贈遺遺囑ノ贈遺ヲ受ク可キ者及ヒ其他失踪者ノ死後ニ其

財産ヲ得可キノ權アル者假リニ其權ヲ行フヲ得可シ但シ此事ニ付テハ保證ヲ立ツ可シ
(民一一四、一二四、一三四、六一七、六二五、八九四、九五二、一〇〇四、一〇一一、一〇一四、
一〇八二、一七九五、一八六五、二〇〇三、二〇一一、二〇四〇、訴五一七、五一八、)

若シ最親ノ相續人失踪者ノ財産ノ引渡シテ願ハサルトキハ、ニテフコトキ財産ヲ所有スル名分ノミ
ヲ以テ、生存中ノ贈遺ヲ受ケシ者、死去ノトキハ取戻スベキ約定ヲ以テ財産ノ贈遺ヲ爲
セシ者、婚姻ノ契約ヲ以テ定メタル相續人等、概言スレハ死去ノ要約ニ從ヒ權利ヲ有ス
ル諸人ハ、失踪者ノ資益ノ爲メ要スル所ノ保證人ヲ立ルニ於テハ其權利ヲ行ハシムル
ヲ得、然レモ遺囑ノ贈遺ヲ受ク可キ者ハ遺囑書ノ開封アリシ後ニ非サレハ、失踪者ニ
管シタル者トジテ訴出ルヲ得ス、隨テ己レノ受ケタル遺囑ノ執行ヲ願フヲ得サル者
トス、

第二百二十四條 財産ヲ共通シタル失踪者ノ配偶者失踪公告ノ言渡ノ後猶ホ其財産ノ共通ヲ
繼續セント欲スル時ハ失踪者ノ財産ヲ其遺物相續人ノ假リニ所有トナス事及ヒ失踪者ノ
死シタル後ニ其産財ヲ得可キ權アル者ノ假リニ其權ヲ行フ事ヲ拒ミ配偶者自カラ其失踪

者ノ財産ヲ支配スル特權ヲ得又ハ保ツヲ得可シ○又其配偶者財産ノ共通ヲ假リニ解除
セント求ムルモ其財産ヲ取戻スノ權其法律上ニテ得ル所ノ權其契約シテ得タル所ノ權
ヲ行フヲ得可シ但シ失踪者ノ歸來シタル時還與スベキ財産ニ付テハ保證ヲ立可シ
婦ハ其失踪セシ夫ト財産ノ共通ヲ繼續ス可キ求メテ爲シタル後ト雖モ復タ其財産ノ繼續
ヲ廢スルノ權ヲ保ツ可シ(民一一〇、一二三、一四五三、一四九二、二〇四〇、訴五一七、八
六三)

若失踪者法律上又ハ契約上財産共通ノ法ヲ以テ婚姻セシ者ナルトキハ、其現存ノ配偶
者ハ失踪者ヲ歸リ來ル者トシテ財産ノ共通ヲ其儘繼續セント欲シ、以テ財産ヲ餘人ニ
假ノ所有トナサシムルヲ拒ムルハ、財産ヲ分割シテ管理スルコトノ大ナル不都合、及ヒ
假ニ會計ノ完済ヲ爲スコトニ付テノ無益ナル費用ヲ防クニ足ル、蓋シ其現存スル所ノ者
夫ナル時ハ、財産ノ共通ヲ繼續セント欲スルニ於テハ、財産ノ管理人タル一切ノ權力ヲ
保可シ、若シ其者婦ナルキハ、己レノ固有ノ財産共通ノ財産及夫ノ財産ヲ管理スルヲ
得ベシト雖モ、夫ノ如ク十全ノ權力ヲ有スルヲ得ス、即共通ノ財産ヲ讓渡サントスル

ニハ、必ス裁判所ノ許可ヲ得サルベカラス、然ルニ法律上配偶者ニテ財産管理人タル者ハ、之ヲ正實ニ管理スベキ保證ヲ立ルヲ要セス、故ニ婦モ亦保證ヲ立ルニ及ハサルヲ爲サザルベカラス、(一説ニ財産ヲ管理スル婦ハ相續人タルベキ者ノ如ク保證ヲ立ツルヲ要スト、第二百二十三條第百二十九條見合セ)財産ノ共通ヲ繼續スル間タ夫ノ財産婦ノ財産及共通財産ノ三財産ノ入額ハ始終必ス共通財産中ニ加入ス、故ニ又配偶者ノ諸費用及管理者ノ過失ヨリ生スル損失モ共通財産ノ内ニテ之ヲ擔當ス、然ルニ又失踪シタル者ハ其家出ノ後開始シタル遺物ヲ受クベカラザレハ(第三百三十六條見合セ)其現存ノ配偶者ノ得ル所ノ動産遺物ハ、共通財産ノ内ニ加入セサルモノトシテ假ノ取扱ヲ爲サザルベカラス

現存ノ配偶者財産共通ヲ繼續セント求メタルハ、其配偶者ノ歸リ來ランヲ希望セシナレハ、其希望ノ絶ユル時ハ直ニ財産ノ共通ヲ解除センヲ請求スルヲ得、此時ニ於テハ失踪者ヲ死去セシモノトシテ處置ス、故ニ初メ財産ノ共通ヲ繼續セント欲シ今又之ヲ解除セント欲スル婦モ隨意ニ共通財産ノ半ヲ有センカ爲メ、共通財産ノ出入額ノ

全體ヲ受ケ、或ハ出額入額ヨリ多キカ故ニ、之ヲ拋棄スルヲ得、然レハ財産取引ノ算定ハ失踪者ノ財産ヲ假有セシ者ト同シク假ノ算計ト爲スヲ以テ、失踪者ヲ死去セシ者トシテ已レノ取ルヘキ部分ヲ取ルノ權、及其他ノ諸權ヲ行ヒシ所ノ現存ノ配偶者ハ夫婦中ノ後ニ生存スル者、其財産ノ分派ヲ爲ス前ニ豫メ已レニ取ルヘキ財産トシテ返還スヘキ物件ノ爲ニハ保證ヲ立ツルヲ要ス(財産共通ノ法ヲ以テ婚姻セザル配偶者ハ、其法ヲ繼續シ其配偶者ノ最親ノ相續人ニ財産ヲ假ニ所有セシムルヲ拒ムヲ得ス、且財産上ノ契約ハ解除スト雖モ其婚姻ハ猶存在スルモノト看做ス、抑財産共通ノ夫婦ト財産不共通ノ夫婦トニ於テ斯ク相違アルハ何故ナルヤノ道理ヲ見出サス、何レノ法ヲ以テ婚姻ストモ其財産ノ契約ヲ假ニ保存スベキヤ否ハ現存ノ配偶者ヲ隨意トスル方穩當ナルベク、且之レカ爲メ時トシテ憂フベキ事項ヲ生スベシ、然リト雖モ本條ニ斯ク明記セシ上ハ更ニ復タ他説ヲ容ル、ニ由ナシ、是法ノ欠典ト謂サルヲ得ス)

第二百二十五條 失踪者ノ財産ヲ假ニ所有ト爲スヲ得タル者ハ唯其財産ノ附託ヲ受クルノミニシテ其者ハ失踪者ノ財産ヲ支配スルノ權ヲ得後ニ失踪者ノ歸來スル時或ハ其消息ヲ得

ルコアル時ハ失踪者ニ其失踪中財産ヲ支配シタル算計ヲ爲ス可シ(民一一〇、一二三、一二四、一二七、一二八、一九一五、一九一六、)

失踪者ノ財産ヲ假ニ所有スルニ付テ最親ノ相續人ハ決シテ其財産ノ所有者ニ非ス、唯審判上ノ附託ヲ受クル同様ニシテ、其財産ヲ管理シ入額ノ一部ヲ所得トナス(第二百二十七條見合セ)權利ヲ得ルノミ、

爰ニ注意スベキ一件アリ、即チ失踪者ノ財産ノ期滿得權ハ、最親ノ相續人ノ幼年タルニ因リ最終ノ消息アリシヨリ之ヲ中止スベキニアラス、假ニ所有ト爲サシメシ日ヨリ起算スルコトナリ、失踪者ヨリ他人ニ對シ他人ヨリ失踪者ニ對シテハ期滿得權アリト雖モ、失踪者ノ財産ヲ假ニ所有スル者ト失踪者トノ間ニハ期滿得權ノアルコトナシ、何トナレハ假リニ所有セシ者ハ自己隨意ニ期滿得權ヲ止メ或ハ起スコトノ處分ヲ爲スコト得レハナリ(千八百六十四年八月十日メツ上等裁判所ノ裁決アリ零之)

第二百二十六條 失踪者ノ財産ヲ假リニ所有ト爲スヲ得タル者又ハ失踪者ト財産共通ヲ繼續セント定メタル配偶者ハ初告裁判所ノ檢事ノ面前又ハ檢事ノ擇ミタル治安裁判官ノ面前

ニ於テ失踪者ノ動産及ヒ證書類ノ目錄ヲ記サシム可シ

其動産ノ全部又ハ一部ヲ賣拂フ可キ道理アル時ハ裁判所ヨリ其賣拂ヲ言渡ス可シ○其賣拂ヲ爲シタル時ハ賣拂ニ付キ得タル所ノ金高ヲ失踪者ノ利益トナル可キ方法ニ用フ可シ又失踪者ノ爲ニ得タル入額モ亦同一ノ方法ニ處置ス可シ

失踪者ノ財産ヲ假リニ所有ト爲スヲ得タル者ハ裁判所ヨリ任シタ評價人ヲシテ失踪者ノ不動産ヲ檢視シ其模様ヲ證セシムルコトヲ自己ノ安堵ノ爲メ求ムルヲ得可シ○此評價人ノ記シタル書ハ檢事ノ面前ニ於テ之ヲ確的ノモノト定ム可シ但シ其評價ノ費用ハ失踪者ノ財産中ヨリ取用フ可シ(民一一四、一二〇、一二四、一七三一、三〇二、三〇三、六一七、六一八、九四一、九四二、)

本條ハ四個ノ方法ヲ爲サシメ其入費ハ失踪者ノ財産中ヨリ支用ス、第一證書人ニ依頼シ檢事又ハ治安裁判官ノ面前ニ於テ失踪者ノ一切ノ動産及證書類ノ目錄ヲ記成スルコト、第二失踪者ノ動産損耗スベキ性質ノモノタルカ或ハ之ヲ保存スルニ莫大ノ費用ヲ要スルカニ由リ之ヲ賣拂フコト有益ナリト思考スル時ハ裁判所ヨリ之ヲ賣拂ハシムルコト、

第三賣拂ヒタル動産ノ代價並ニ失踪者ノ爲メニ得タル息銀ヲ失踪者ノ利益トナルベキ方法ニ活用スルコト、何トナレハ失踪者ノ爲メニ得タル息銀ハ其財産ヲ假ニ所有ト爲ス者ニ引渡ス時マテハ失踪者ノ爲メニ之ヲ元金中ニ算入スレハナリ、第四失踪者ノ不動産ノ模様ヲ證スルコト、但シ財産ヲ假ニ所有ト爲シタル者ノ利益ノ爲ノミナル故之ヲ爲スト爲サマルトハ其者ノ隨意トス、

第二百二十七條 失踪者ノ財産ヲ假リニ所有ト爲スヲ得タル者又ハ法律上ニテ支配スルヲ得タル者其失踪者失踪ノ時ヨリ滿十五年内ニ歸來スルニ於テハ其所得ト爲シタル入額ノ五分一ヲ失踪者ニ還シ十五年後ニ歸來スルニ於テハ十分一ヲ還ス可シ

三十年間失踪ノ後ハ其失踪者ノ財産入額ノ全數ヲ其財産ヲ假リニ所有ト爲ス者又ハ法律上ニテ支配スルヲ得タル者ノ所得ト爲ス可シ(民一二〇、一二四、一二九、一三八、六〇五、六〇八、六〇九、六一二、六一三、一四〇一、)

十五年又ハ三十年ノ期限ハ、失踪者ノ財産ヲ假ニ所有ト爲サシメタル日ヨリ起算セスシテ、失踪者家出ノ日又ハ最終ノ消息アリシ日ヨリ起算ス、而シテ入額ノ五分ノ四、十

分ノ九或ハ全部ヲ假ノ所有者ノ所得ト爲スヲ得ルノ期限ハ、財産ヲ假ニ所有ト爲シタル日ヨリ起算ス、蓋シ當日ニ至ルマテノ入額ハ總テ失踪者ノ財産中ニ算入スベキヲ以テナリ、抑入額ノ幾分又ハ全額ヲ假ノ所有者ノ所得ト爲サシムルハ、失踪者ノ最親ノ相續人、又ハ遺囑ノ贈遺ヲ受ベキ者、其他失踪者ノ死去ニ際會シテ權利ヲ享有スベキ者、其財産ヲ管理スルノ勞ニ報イルノ旨意ニ出ツ、故ニ其管理スルコト逾久シケレハ其報逾多カルベシ、何トナレハ財産ヲ假リニ所有スル所ノ者、時ヲ遷スニ隨ヒ眞ノ所有者トナラント欲スルノ念愈切ニシテ財産ヲ修理シ要費ヲ支消スベケレハナリ、

財産ノ共通ヲ繼續セント定メ、法律上ニ於テ財産管理ノ權ヲ有スル所ノ財産共通ノ配遇者モ、其一方ノ者死去セシ時、或ハ死去セシト看做サル、時ヨリハ、共通財産中己レノ出シタル部分ハ勿論其一方ノ者ノ部分ニ付テモ、失踪者ノ財産ヲ假ニ所有ト爲シタル者ト同一ノ利益ヲ受ク、然レモ若シ失踪セシ者歸來スルキハ財産ノ共通ノ未ダ解ケサルハ儘ナリ、而シテ財産ノ共通未ダ解ケサル内ハ共通ノ財産ノミ獨リ其入額及夫婦ノ財産ノ入額ヲ所得ト爲スベケレハ、此場合ニ於テ管財人ノ配遇者ニ、共通財産ニ加入ス

ベキ入額ノ一部ヲ、自己ノ所得ト爲サシムルヲ得ス、

第二百二十八條 失踪者ノ財産ヲ假リニ所有ト爲ス者ハ其失踪者ノ不動産ヲ人ニ贈與シ又ハ賣拂ヒ又ハ書入質ト爲スヲ得ス(民一二五、一三二四、四八、一六八、一四二九、二一四四、二二二六、)

不動産ヲ贈與シ又ハ賣拂フハ即チ其所有權ヲ他人ニ移スナリ、失踪者ノ財産ヲ假ニ所有ト爲ス者ハ其預主ニシテ決シテ其所有者ニ非ス、(百二十五條見合セ)故ニ其不動産ヲ贈與シ又ハ賣拂フヲ得ス、又動産ト雖モ裁判所ノ言渡シナクシテ之ヲ賣拂フヲ得ス(百二十六條見合セ)然レモ動産ニ付テハ良心ヲ以テ正實ニ買受ケシ者ハ失踪者ノ歸リ來リシ時之ニ向テ動産ニ付テハ現ニ之ヲ有スルヲ以テ其所有ノ權ノ證書ヲ有スルニ等シキ効アリ(二千二百七十九條見合セ)トノ格言ヲ主張シ、又不動産ニ付テハ十年若シハ二十年ノ期滿得免ノ權(二千二百六十二條二千二百六十五條見合セ)ヲ主張シテ己レノ權利ヲ保テ得、

失踪者ノ不動産ヲ假リニ所有ト爲ス者ハ、特ニ之ヲ贈與シ又ハ賣拂フヲ得サルノミ

ナラス、(ユサージユ)他人ノ財産ヨリ生スル利益中ヨリ己レニ必要ノ部分ヲ所得トナス(一)ノ權、入額ヲ所得ト爲スノ權ナク、又土地ノ義務ヲ起シ之ヲ失踪者ノ不動産ニ負ハシムルヲ及ヒ其不動産ヲ書入質即チ一個ノ義務ノ抵當ト爲スヲ得ス、然レモ裁判所ニ於テ不動産ヲ賣拂ヒ又ハ書入質ト爲スヲ要用ナルカ、或ハ有益ナリト監定シ許可ヲ與フル時ハ、之ヲ賣拂ヒ又ハ書入質ト爲スヲ得(二千二百二十六條見合セ)且其財産管理ノ一ニ付テハ眞ノ所有者ト同一ノ權ヲ有ス、故ニ第千四百二十九條及千四百三十條ノ規則ニ從ヒ賃貸ノ契約ヲ爲シ得ベキノミナラス、人權及物權動産及不動産ノ諸訴訟ヲ爲シ得、

第二百二十九條 失踪者ノ財産ヲ其遺物相續人假リニ所有ト爲スヲ得タル時ヨリ三十年間失踪者ノ歸來セサル時又ハ財産ヲ共通シタル失踪者ノ配遇者其財産ヲ支配シタル時ヨリ三十年間失踪者ノ歸來セサル時又ハ其失踪者ノ生レシ時ヨリ滿百年ヲ經タル後失踪者ノ歸來セサル時ハ裁判所ヨリ其保證ノ免除ヲ言渡シ失踪者ノ財産ヲ得可キ權アル者ハ初告裁判所ニ其財産分派ノ事ヲ訴出シ其財産ヲ眞ノ所有ト爲スノ言渡ヲ受クルヲ得可シ(民

一一〇、一二四、一三二、一三三、八一五、八一六、)

失踪者ノ財産ヲ假ニ所有ト爲サシメシヨリ三十年、又ハ失踪者ノ生レシ時ヨリ百年ノ久シキヲ經タルニ於テハ、裁判所ニテ失踪者ノ財産ヲ眞ノ所有ト爲スベキヲ言渡ス、蓋シ此兩様ノ場合ニ於テハ失踪者ノ死去シタリト、思度スヘキヲ愈深ク殆ント確實ト看做セハナリ、故ニ失踪者ノ財産ヲ假リニ所有ト爲セシ者ノ立テタル保證ハ全ク免除ス、又其財産ヲ眞ノ所有ト爲セシ後、之ヲ買受クル者ハ其所有者トナリ、之ヲ贈與賣買又ハ書入質ト爲スヲ自由ナリトス、

第三百十條 失踪者ノ死去セシ證アル時ハ其時ノ最親ノ遺物相續人ノ爲メ其時ヨリ遺物相續ノ事ヲ爲シ始ム可シ但シ其失踪者ノ財産ヲ假リニ所有ト爲シタル者ハ第二百二十七條ニ記スル所ニ循ヒ其者ノ所得ト爲ス可キ利益ヲ除クノ外其財産ヲ失踪者ノ最親ノ遺物相續人ニ引渡ス可シ(民一一〇、一二四、一三五 一三六、)

失踪者ノ財産ヲ假ニ所有ト爲スヲ得タル者 失踪者ヨリ前ニ死去シタルニ因リ、失踪者ノ遺物ヲ相續セサリシ時ハ、其財産ヲ眞ノ所有トシテ他人ニ引渡ス前若クハ後タリヒ、

失踪者ノ死去セシ確報アリシ日ニ、失踪者ノ最親ノ相續人ハ、其遺物ヲ相續スベキ權アルヲ申立テ得、然レ此相續人ハ失踪者ノ子孫ト等シキ地位ニアルヲナシ、蓋シ失踪者ノ子孫ハ、失踪者ノ財産ヲ眞ノ所有トシテ他人ニ引渡シテ後三十年間ハ失踪者ノ死去ノ時期ヲ證スルヲ要セス、其財産ヲ所有ト爲セシ者ニ向ヒ其返還ヲ要求シ得、(第三百十三條見合、)

第三百十一條 失踪者ノ財産ヲ其相續人ノ假リニ所有ト爲ス時間ニ失踪者ノ歸來スル時又ハ其生存ノ證ヲ得タル時ハ嘗テ爲シタル失踪公告ノ言渡ヨリ生セシ諸件ヲ取消ス可シ但シ此規則ト失踪者ノ財産ヲ支配スル爲メ此卷ノ第一章ニ記セシ如ク財産ヲ保全スル爲メナシタル處置ト相觸ル、ヲナカル可シ(民一一二、一一三、一三二、一三三、)

失踪者ノ財産ヲ假ニ所有ト爲セシ者ハ、失踪者ノ歸來スルカ又ハ其生存ノ證アリシ後、得タル息銀其他ノ入額ハ之ヲ所得トスルノ權利ナキモノトス、

第三百十二條 若シ失踪者ノ歸來スル時、又ハ其生存ノ證ヲ得タル時ハ縱令ヒ其財産ヲ眞ノ所有ト爲シタル者アリシ後ト雖ヒ、其失踪者己レノ財産ヲ其時ノ儘ヲ以テ取戻スヲナ

得可ク、且既ニ賣拂ヒシ財産ノ代金、又ハ其代金ヲ以テ得タル財産モ亦取戻スヲ得可シ

(民一二九、一三二、二二五二、)

失踪者歸來スル時ハ、其財産ヲ眞ノ所有ト爲シタル者アリトモ、何時ニテモ之ヲ取戻サン
ト求メ得、蓋シ其財産ヲ所有ト爲シタル者ハ、失踪者ノ爲ニ預主ト看做セハナリ、然レ
モ其財産ヲ眞ノ所有ト爲サシメタル後歸來スルニ於テハ、其時現存スル己ノノ財産及
其財産ヲ交換シ又ハ賣拂ヒテ得タル所ノ財産ヲ取戻ス權アルノミニテ、既ニ他人ニ贈
與シタル物ノ代價ヲ要求スルヲ得ス、然レモ其財産ヲ所有ト爲セシ者若其財産ヲ有
セサルモハ、必ス己レ固有ノ財産ヲ以テ爲サ、ルヲ得サル子女ノ嫁資ヲ其財産ヲ以テ
辨シタル如キ類ニテ、格別己レノ利益ト爲セシアル時ハ此限ニアラス、

失踪者歸來ノ時、其財産ヲ眞ノ所有ト爲セシ者、之ヲ還付スルノ資力ナキ場合ニ於テ、
其財産ヲ買受ケタル者ニ向テ、之ヲ取戻ス爲メ何レノ訴ヲモ爲スノ權ナシトス、

第三百三十三條 又失踪者ノ子及ヒ宗系ノ卑屬ノ親ハ其失踪者ノ財産ヲ眞ノ所有ト爲シタル、
者アル時ヨリ三十年間前條ニ記セシ如ク其財産取戻ノ訴ヲ爲シ得可シ(民一二九、一三二)

二二五二、)

失踪公告ノ言渡ノ時其者ノ宗系ノ卑屬ノ相續人アルヲ未ダ知レサリシカ、又ハ存在セ
サシカニテ、其財産ヲ所有ト爲スヲ得サリシ者ナレハ、其財産ヲ眞ノ所有ト爲シタル
者アリシ時ヨリ三十年内ニ訴出ルニ於テハ、其時失踪者ノ財産現存ノ儘取戻スヲ得
可シ、

第三百三十四條 失踪公告ノ言渡ヲ爲シタル後ハ其失踪者ニ對シ訴ヲ爲ス可キ權アル者ヨリ
失踪者ノ財産ヲ假リニ所有ト爲スヲ得タル者又ハ法律上ニテ其財産ヲ支配スルヲ得タル
者ニ對シ其訴ヲ爲ス可シ(民一二〇、一二四 一二九、八一七、)

失踪者ノ財産ヲ假リニ所有ト爲セシ者、又ハ財産ノ共通ヲ繼續セント定メ法律上財産
ノ管理ヲ得シ所ノ配偶者ハ、諸訴訟上ニ於テ失踪者ノ代理人トス、故ニ其訴訟ノ得失ニ
ヨリ諸費用ハ總テ失踪者ノ財産ヲ以テ辨ス、

○第二款 失踪者ニ屬スル事アル可キ權利ニ付テノ失踪ノ効

第三百三十五條 生存ノ分明ナラサル者ニ屬ス可キ權利ヲ己レニ得ント訴フル者ハ嘗テ其權

ノ生シタル時生存ノ分明ナラサル者ノ現ニ生存セシノ證ヲ立ツ可シ但シ其證ヲ立テサル
間ハ其訴ヘテ受理セサルノ言渡ヲ受ク可シ(民一一三、一三六、一三七七二五、七四四、一
〇三九、一九八三、)

畢生間ノ年金又ハ養料トシテ定期ニ或ル金高ヲ請取ルベキ權ヲ有セシ者ノ相續人ハ、
其者ノ死去ノ日ニ至ルマテノ分ハ之ヲ請取ルノ權利アリ、其者死去スレハ此年金及ヒ
養料ハ從テ消滅ス、故ニ其相續人ハ其者ノ生存儘カナルノ間ナラデハ之ヲ求メ得ス、又
其年金若クハ養料ハ失踪者ノ生存中既ニ得ベキ期限ノ來リシコノ證據ヲ出スヲ必要ト
ス

第三百三十六條 生存ノ分明ナラサル者ノ得可キ遺物相續ノコアル時ハ其者ト相與ニ遺物相
續ヲ爲ス可キ權アル者又ハ其生存ノ知レサル者ニ代テ遺物相續ヲ爲ス可キ者ニ全ク其遺
物相續ヲ爲サシム可シ(民一一三、一三五、一三七、一三八、七二五、七三九、七四〇、七四二、
七四四、)

例ヘハ父二人ノ子ヲ遺シテ死ス時ニ其一人ノ子ノ行方知レス、因テ其現在スル所ノ子、

一人ニテ父ノ遺物ヲ悉皆所得トス、然レモ若行方ノ知レサル所ノ者子アル時、其子ハ其
者ニ代リ(第七百四十條見合セ)其遺物ノ半ハヲ得、

第三百三十七條 前二條ノ規則ト失踪者又ハ其名代人又ハ代權人ハ己レニ屬ス可キ遺物相續
ノ權及ヒ其他ノ權ノ期滿得免(第二千二百十九條以下見合セ)ノ期限ニ至ラサル時間此等
ノ權ヲ得ント訴出スルヲ得可キ規則ト相觸ル、コナカル可シ(民一一二、一三五、七九〇
一一六六、一二四〇、一三八〇、一五九九、一九三五、二〇〇五、二〇〇八、二〇〇九、二一八
二、二二六二、二二六五、二二七九、)

失踪者ニ代テ遺物相續ヲ爲ス可キ者ノアラサル時、其遺物及失踪ノ後ニ得タル他ノ權
利ヲ享有スベキ者ハ、附托人ノ名義ヲ以テスルコトナシ、所有者ノ名義ヲ以テ之ヲ享有ス、
故ニ之ヲ返還スベキ爲メ保證人ヲ立ルコトナシ、然レモ若シ己レノ所有ト爲スコトヲ得タ
ル時猶ホ失踪者生存セシコノ證據アル時ハ、三十年内ニ失踪者ノ歸リ來ルニ於テハ失
踪者又ハ其代權人ノアル時ハ之レニ代リテ己ノ所得ト爲セシ者ヲ返還スベキノ言渡ヲ
受ルコトアベルシ、歸來シタル失踪者ハ他人ニ向ヒ、己レノ受クベキ仕拂ヲ失踪中己レノ

財産ヲ所有ト爲シタル者ニ爲シタルコトノ取消シ(千二百四十條見合セ)及動産ノ讓渡ノ取消シヲ訴フルコトヲ得ス、(二千二百七十九條見合セ)然レモ不動産ニ付テハ之ヲ占有スル者、未ダ十年又ハ二十年ノ期滿得免ノ權(二千二百六十五條見合セ)ヲ得サルニ於テハ其不動産ヲ取戻シ得ベキモノトス、然ルニ裁判事例ニ於テハ占有者ノ權利ヲ保護シ此原則ヲ大ニ適施シタルコトハ第千二百四十條ニ至テ詳明ナルベシ、蓋シ其占有者ニ負ハシムベキ過失アラサレハナリ、

第三百三十八條 失踪者ノ得可キ遺物相續ヲ爲シタル者ハ失踪者歸來セサル時間又失踪者ノ權ニ代リ前條ニ記シタル訴訟ヲ爲ス者ナキ時間ニ其正實ニ得タル利益ヲ己レノ所得ト爲スコトヲ得可シ(民五四九、五五〇、二二六八、)

失踪者ノ得可キ遺物相續ヲ爲シタル者、失踪者ノ生存スルコトヲ知ルカ、又ハ失踪者ノ代權人ヨリ訴出セラレタル後得タル利益ハ正實ニ得タルモノニアラス、失踪者ノ生存スルコトヲ知ルマテ又ハ失踪者ノ代權人ヨリ訴出セラル、マテニ得タル入額ハ、全ク之ヲ所得ト爲シ嘗テ其代價ヲ返還スルニ及ハス、

○第三款 婚姻ノ事ニ付失踪ノ効

第三百二十九條 失踪者ノ配偶者再婚ノ契約ヲ結ヒタル時ハ其取消ノ訴ヲ爲シ得ベキ者ハ失踪者自カラ又ハ自己ノ生存ノ證書ヲ與ヘタル名代人ノミニ限ル可シ(民一四七、一八四、一八八、ヨリ一九〇、一九八四、刑三四〇、)

失踪スルコト多年ナルモ之カ爲メニ婚姻ノ解ク可キ者ニ非ス、故ニ現在ノ配偶者失踪シタル配偶者ノ正當ナル死去ノ證書ヲ示サ、レハ再ヒ婚姻ヲ取結フコトヲ得ス、若シ現在ノ配偶者失踪者死去ノ贋造ノ證書ニ依テ欺カレシ時、又ハ獨身ト稱シ自ラ身上證書ノ官吏ヲ欺キ再婚ヲ取結ヒタル時ハ、本條ニ明示スルカ如ク失踪者或ハ其名代人ノミ其再婚ノ取消ヲ訴ヘ得、然レモ失踪者ノ生存果シテ慥ナル場合ニ於テハ、一般ノ道德明倫及婚姻ノ威儀ヲ保チ難キカ爲メ、檢察官ハ其再婚即「ビガミー」(一夫二婦ヲ娶リ或ハ一婦二夫ニ嫁スルコト)ノ醜行ヲ取消サント訴ヘ得ベキハ皆人ノ訴ス所ナリ、(失踪者又ハ其名代人ノミ再婚ノ取消ヲ訴ヘ得ベシト記セシハ、要スルニ失踪者ノ生存不分明ナル時ハ總テ再婚取消ノ訴ヲ爲サシメサルカ爲メナリ、然レモ失踪者歸來スルカ若

クハ確實ナル消息アリテ其生存明白ナル時ハ、其再婚取消ヲ訴へ利益ヲ得べき者ハ、何人タリト之ヲ許サ、ルノ理ナシ、況ンヤ一般ノ道德明倫ヲ監護スヘキ檢察官ニ於テヤ

第百四十條 若シ失踪者ノ遺物相續ヲ爲スコトヲ得可キ血屬ナキ時ハ其配遇者其財産ヲ假ニ

所有ト爲スコトヲ得ント訴フルヲ得可シ(民一一〇、七二三、七六七、)
死者ノ遺物相續ヲ爲シ得可キ血屬及私生ノ子ノ非サルニ於テハ、其配遇者其相續ヲ爲シ得(第七百六十七條見合セ)故ニ亦失踪ノ公告ヲ受ケタル一方ノ配遇者ノ財産ヲ假ニ所有ト爲スベキヲ得、

○第四章 父ノ家出ノ時幼年ノ子ヲ管督スルコト

第百四十一條 若シ父其夫婦ノ間ニ舉ケタル幼年ノ子ヲ遺留シ家出シタル時ハ其母其子ノ管督ヲ爲シテ其子ノ教育及ヒ其財産ヲ支配スルニ付キ父ノ權ヲ行フ可シ(民一四九、三七三、三七六、三七七、三八一、三八四、三八九、商二、)
母ノ家出シタル時父其子ニ對シ父ノ權ヲ保續スルハ勿論ナリ之ニ反シテ父ノ家出シタ

ル時ハ母其父ニ代リ其子ヲ教育シ其財産ヲ管理ス、此場合ニ於テハ失踪ノ公告アラサルカ又財産ヲ共通セシニ於テハ現在ノ配遇者其共通ヲ解除セサルノ間ハ後見人並ニ後見人ノ監察者ヲモ要セス、

第百四十二條 父ノ家出ノ時母既ニ死去シタル時ハ六ヶ月ノ後又ハ父ノ失踪ヲ公告スル前ニ母ノ死去セシ時ハ親族會議ニ因リ其子ノ管督ヲ其最親ノ尊屬ノ親ニ任ス可シ若シ其最親ノ尊屬ノ親アラサル時ハ之ヲ假リノ後見人ニ任ス可シ(民一一二、一四三、三九〇、四〇五、四〇六、四二四、)

配遇者ノ一方ノ者家出シ一方ノ者死去セシ時遺留ノ子ノ後見人ハ、其家出ノ時ヨリ六ヶ月ヲ經サレハ設クベカラス、蓋シ家出ノ時直ニ親族ノ事務ニ他人ノ參預スルコトハ法律ノ敢テ好ミスル所ニアラサレハナリ、六ヶ月ノ後此後見人ハ必ス親族會議ニヨリテ之ヲ任シ、失踪ノ公告ノアラサル内ハ假定ノ者トス、(六ヶ月ノ中其子ハ事ニ管シタル者及檢事ノ求メニ因リ、裁判所ニ於テ適當ト監定スル者ニ委托シテ監護セシムベシ、又親族會議ニヨリテ任シタル後見人モ、必シモ一人ニテ其子ヲ管督スルヲ要セス、之ヲ二人

ニ分任スルヲ得、

第四百十三條 家出ノ夫又ハ婦其前婚ニテ舉ケタル幼年ノ子ヲ遺留シタル時モ亦前條ト同一ナリ(民一四二、三九〇、三九五、三九六、)

家出シタル夫又ハ婦、其前婚ニテ舉ケタル幼年ノ子ノ爲メニモ、亦前條ニ同シク家出ノ時ヨリ六ヶ月ノ後、其子ニ假ノ後見人ヲ附スルヲ要ス、再婚ノ夫又ハ婦ハ其前婚ニテ舉ケタル子ニ對シ父ノ權ヲ行フノ權利ナシト雖モ親族會議ニ於テハ之レニ後見ヲ任シ得可シ、(繼父母ハ他人ヲ以テ論ス)

○第五卷 婚姻ノ事(千八百三年三月十七日決定同月二十七日下達)

(千七百八十九年ノ革命ニ於テ政府ト寺院ノ分立ヲ布告セザリシ以前、即チ教法ト民法ト全ク分離セサリシ以前ハ、民法教法互ニ關涉スルヲ至密ニシテ婚姻ハ民事上ト宗教上トノ兩契約ヲ以テ成リ、政令ト教令トニ並ヒ從ハサレハ之ヲ正當ノモノト爲スヲ得サリキ、又上下貴賤ノ別アリテ貴族ト平民トノ結婚ヲ嚴禁シタリキ、然ルニ今日ニ至テハ此兩件廢棄シテ全ク民事上ニ歸シ婚姻ヲ正當ト爲スニハ唯身上證書ノ官吏ノ面前

ニ於テ其執行ヲ爲スヲ要シ、宗教上ノ儀式ハ法律ノ曾テ問サル所トナレリ、故ニ宗教上ノ儀式ハ敢テ婚姻ヲ正當トナラシムルヲナク、又之ヲ爲サ、ルモ民事上ノ効ヲ妨グルヲナキモノトス)婚姻ハ人種ヲ繼續シ相互ノ扶救ニ因リ生計ノ責任ヲ協同シ、生運ノ憂樂ヲ與ニセンガ爲メ、分離スベカラサルノ結縁ニ因リ一致シタル男ト女トノ社會ナリ、然レモ此諸件必シモ具備スルヲ要セス、故ニ年齡ニ因リ子ヲ有スル能ハサル所ノ人ト雖モ、相互ニ扶救ヲ受與スルカ爲メ結婚スルヲ得ベシ、婚姻ハ第千三百八十七條ヨリ第千五百八十一條ニ記ルス所ノ婚姻ノ契約ト殊ナリ、身上證書ノ官吏ノ面前ニ於テ一度婚姻ヲ執行フモ其夫婦父母及子ノ間ニ種々ノ權利及ヒ義務ヲ生ス、而シテ此權利及義務ハ世治ニ緊要ナルヲ以テ夫婦ニ於テ何レノ變更ヲモ爲スヲ得ス(第千三百八十八條見合セ)ト雖モ、婚姻ノ契約ハ婚姻ヲ行フノ前證書人ノ面前ニ於テ之ヲ爲シ、以テ婚姻ノ附屬物トシテ夫婦產財上ノ社會ヲ營理ス、其規則ニ至テハ夫婦ニ於テ隨意ニ之ヲ定ムルノ權ヲ有ス(第千三百八十七條見合セ)

○第一章 婚姻ヲ取結ブニ必要ナル諸件

第四百十四條 滿十八歲ニ至ラサル男及ヒ滿十五歲ニ至ラサル女ハ婚姻ヲ取結フヲ得ス

(民一四五、一八四、一八五、一八六、一一〇、一一〇八)

婚姻ノ要トスル所ハ子ノ生産ニ在リ、故ニ男女情實、未タ開ケザレハ生産ノ効ヲ生スル能ハス、其情實ノ開クハ土地ノ氣候ト各人成長ノ早晚トニ從テ異同アリト雖モ、世治上ニ於テ立法者一般ノ規格ヲ以テ、婚姻ノ爲メ必要ナル年齢ヲ定ムルヲ緊要トセリ、其年齢女ハ滿十五歲男ハ滿十八歲トス、(古來婚姻ニ異同アリ、羅馬ノ法及ヒ佛國ノ古法ニ於テハ女ハ十二歲男ハ十四歲トシ、其中法ニ於テハ女ハ十三歲男ハ十五歲トシ、民法編纂ノ時ニ至ツテ本條ニ明記スルカ如ク、女ハ滿十五歲男ハ滿十八歲ト定メタリ、蓋シ婚姻早キニ過レハ夫婦ノ健康其子ノ體格ニ害アリ、且一度結婚スレハ家事ヲ擔當スルノ重任アルヲ豫メ了解シ得ベキヲ肝要ナレハナリ)

第四百十五條 然レモ至重ノ事故アル時ハ皇帝ヨリ未タ其齡ニ至ラサル者ヲシテ婚姻ヲ取結フノ允許ヲ爲スコヲ得ベシ(民四四、一六四、一六九)

婚齡ニ至ラサル者ニ結婚ヲ許スノ原由、多クハ女滿十五ニ至ラスシテ懐胎シタルニ在

リ、凡ソ婚齡ニ至ラスシテ結婚セント欲スル者ハ、明カニ其原由ヲ願書ニ記載シ、夫婦トナラントスル者、及婚姻ノ爲メ必用ナル許諾ヲ得ベキ者アル時ハ其者之ニ姓名ヲ手署シ、當然確的ナリト認テ受タル夫婦トナラントスル者ノ出產證書ノ寫又婦トナラントスル者ノ懐胎シタル時ハ、醫師ノ診斷書ヲモ併ニ檢事ニ差出スベシ、檢事ハ之ニ己ノ意見ヲ附シテ審判宰相ニ送致ス、審判宰相ハ之ヲ上申シテ皇帝ノ制可ヲ請フ、而シテ之ヲ允許スル勅書ハ、其婚姻ヲ行フベキ場所ノ民事裁判所ノ書記局ノ簿冊ニ登記シテ後願人ニ下附ス、

第四百十六條 夫婦トナル可キ雙方ノ者ノ承諾アラサル時ハ婚姻シタルト爲スコカラス(民一八〇、一八一、二〇一、二〇二、三二二、五〇二、一一〇九、一一二五、刑三五七)

承諾トハ同一ノ物ニ付二人以上ノ心意一致セシテ云フ、故ニ結婚セントスル双方ノ内一方ノ承諾ヲ欠ク時ハ其婚姻ハ嘗テ成立セサルモノトナル、是ヲ以テ一方ノ者風癩痴呆ナルカ、又ハ治産ノ禁ヲ受ケシ者ナルカノ時ハ婚姻ノ成立サルモノトス(第五百〇二條見合セ)然レモ裁判所ヨリ命シタル補佐人アル者ノ婚姻ハ正當ノ者トス、何トナレハ

婚姻ハ其者ノ爲スベカラサル行爲中ニアラサレハナリ、(第四百九十九條第五百十三條見合セ)全ク承諾ナキニ非ラスシテ其承諾ニ只過失ノアリシ時ハ、其婚姻ハ成立ツトテ得ベシト雖モ或ル場合ニ於テハ取消トナリ得、但シ全ク承諾ナキ婚姻ヲ行フコトハ實際上殆ント嘗テアラサルコトス、

婚姻取消ノ訴ヲ爲シ得ベキ承諾ノ過失ハ、強迫及人違ヒトニ在リ、(第一百八十條千百九條千百十條千百十一條千百十二條千百十三條千百十六條見合セ)詐欺モ亦契約ヲ取消ス一個ノ原由トナスベシト雖モ、婚姻ノコトニ限り取消ノ原由トナサス、蓋シ婚姻ハ通常契約ノ關係ヨリ稍ヤ貴重ナル權利及義務ヲ生スベキ端嚴ナル所爲ナルヲ以テ、契約ト同視スヘカラサレハナリ

人ト結婚セント約シ且一個ノ罰條ニ因リ其約ヲ踐ミ行ハサルニ於テハ幾莫ノ金額ヲ拂フベキコトヲ約定セシ者ハ、必ス其約ノ如ク爲サルベカラサルノ義務アリヤ曰ク否ラス其約定ハ必ス適意ノ所爲タル婚姻ヲ強テ取結ハシムルノ効ナシ、況ヤ結婚セサルニ於テハ、或ル金額ヲ拂フベシトノ約定ハ、不意詐欺若クハ情欲ノ爲ス所ト看做シ之ヲ取消

スベシ何トナレハ一方ノ者己レノ不幸ヲラント思考スル所ノ婚姻ヲ強テ爲サシムベカラザレハナリ(婚姻ノコトニ付テノ承諾ハ、身上證書ノ官吏ノ面前ニ於テ其夫婦トナラントスル者互ニ明言シタルニアラサレハ確定ノ者トセス)然レモ取消シ得ベキ正當ノ事由ヲ示スコトナクシテ其約定ヲ踐行シ肯セサル時ハ、他ノ一方ノ者既ニ婚姻支度ノ爲メ費用シタル金額アルニ於テハ、之ヲ賠償スベキ言渡ヲ受ケシメ得ベシ、

第四百十七條 前婚ヲ解カサル以前ニ再婚ヲ取結フ可カラス(民一三九、一七二、一八四、一八七、一八八、二〇一、二〇二、二二七、二二八、刑三四〇、)

前婚ノ解ケサル以前ニ再婚ノ結約ヲ爲ス者ハ「ピガミー」(二妻或ハ二夫アル人)ト稱ス、「ピガミー」ハ其子及他ノ一方ノ配偶者ノ權利ヲ侵シ人倫ヲ亂ルモノナレハ、之ヲ罪犯トシテ其首從共ニ五年ヨリ二十年ニ至ル懲役ニ處ス、(刑法第三百四十條見合セ)(土耳其格ニ於テハ今日猶「ピガミー」ヲ許ス)

離婚ニ因リ婚姻ノ解ケタル外國人ハ、佛國ニ於テ再タヒ佛人ト結婚シ得ベキヤノコトニ付テハ論說頗ル紛々タリシニ、巴里上等審院ハ千八百五十九年七月四日ノ裁決ヲ以テ

離婚ヲ禁スル所ノ法律ハ世治ノ爲メ設立セシモノナレハ佛國ニ於テハ何人タリヒ之ニ從フコト拒ミ得ストシテ、否ト決セリ、然ルニ覆審院ハ千八百六十年二月二十八日裁決ヲ以テ左ノ趣意ニ因リ、巴里上等審院ノ裁決ヲ破毀シテ可ト決セリ、曰ク佛國ニ於テ婚姻ヲ取結フカ爲メ外國人ノ身位ハ、其本國ノ法律ト其法律ニ從ヒ其國ニ於テ行ヒタル事實トニ因リテ判定セサルベカラス、故ニ離婚若クハ其他ノ理由ニ依リ其本國ニ於テ其婚姻ヲ正當ニ解キシニ於テハ、全ク其自由ヲ得シ者故己ノ適意ニ居住セントスル所ニ於テ其自由ヲ行ヒ得ト、

僧職ヲ解キシ「カトリキ」宗ノ僧徒ハ婚姻ヲ取結フコト得サキルヤノコトニ付テハ、可ト決シシ裁決少カラス、就中千八百四十七年二月二十三日覆審院ノ裁決ヲ以テ、佛國ニ於テ順守スル教則ハ聖職ニ登ル者ノ婚姻ヲ禁ス、而シテ法律中此教則ヲ廢棄スルノ明條ナシトノ趣意ニ依テ可ト決シタリ、

在役ノ軍人ハ陸軍宰相ノ許可ナクシテ結婚スルコトヲ得ス、但シ兵卒ノ爲メ之ヲ許可スルハ極テ稀ナリトス、

第四百四十八條 滿二十五歳ニ至ラサル男及滿二十歳ニ至ラサル女ハ其父母ノ許諾ヲ得スシ

テ婚姻ヲ取結フ可カラス若シ其父母互ニ異議アル時ハ父ノ許諾ノミヲ以テ足レリトス
(民七三 一四九、一五〇、一六〇、一八二、一八三、一八六、刑一九三、一九五、)

父母ノ許諾ヲ要スルハ、其子未タ世事ヲ經驗セサル所ノ不足ヲ補ヒ、其永久不斷ノ縁ヲ取結ハントスルニ當リ、情欲ニ流レテ其配遇者ノ人選ヲ誤ルコトアランヲ恐ル、カ爲メナリ、父母或ハ其他ノ親ヲ有スル所ノ男ハ、滿二十五歳ニ至ラサレハ婚姻ノ爲メ丁年者トナラス、女ハ婚姻其他ノ行爲ノ爲メニモ滿二十一歳ニ至レハ丁年者トス、蓋シ女子ハ成長スルコト及ヒ其少壯ノ過シルコト男子ヨリ早シ其家族ヲ統括スルノ重任ナシ、又子其姓ヲ繼稱スルコトナキニ因リ、其年少ナルヲ以テ其家資ノ至重ナル一部トス、(男ハ其尊屬ノ親ノ姓ヲ繼稱シ、其婚姻自ラ親族ノ榮譽ニ關係スルカ故、女ヨリ稍ヤ永ク尊屬ノ親ノ監督ニ處シ置クコトヲ要ス、)

父母ノ間ニ異議アルトキハ、父ノ承諾ノミヲ得テ結婚スルコトヲ得、然レモ此場合ニ於テハ母ノ異議ヲ證スルカ爲メ、アクトレスベクナユ尊敬ノ書ヲ呈スルコトヲ必要トス、蓋シ婚姻ハ大切ナル事項

ニツキ、母ノ意見ヲ請ヒシヲ公正ノ書ヲ以テ證スルヲ肝要ナレハナリ、

第四百九條 父母ノ中既ニ死去スル者アル時又ハ生存スルト雖モ其意ヲ表スルヲ能ハサル者アル時ハ他ノ一方ノ者ノ許諾ヲ以足レリトス(民二五、一一二、一一三、一四一、一五〇、一五五、一五八ヨリ一六〇、一八二、一八三、五〇二、刑二九、一九三、一九五、)

夫婦トナラントスル者ハ、其父或ハ母ノ死去ノ證書ノ抄出書ヲ示シテ其死去ヲ證ス、若其抄出書ヲ示スヲ能ハサル時ハ第七十三條ニ引説シタル參議院ノ意見ニ依リテ之ヲ補フ、又父母中一個ノ承諾ヲ得ルヲ能ハサル時ハ、其施設及加辱ノ刑ニ處セラレ法律上民權ヲ行フノ禁ヲ受ケタル所ノ裁判申渡、(刑法二十九條見合セ)又ハ失踪ヲ公告シタル所ノ裁判申渡、未ダ失踪ヲ公告セサル場合ニ於テハ家出シタルヲ證スルノテリエテ「」ノ證書等(第一百五十五條)ヲ示シ、以テ父或ハ母ノ許諾ヲ得ルヲ能ハサルノ原由ヲ證ス、

第五百十條 若シ父母共ニ既ニ死去シタル時又ハ其意ヲ表スルヲ能ハサル時ハ祖父母之ニ代ル可シ又本宗外族ヲ問ハス其祖父ト祖母ト互ニ異議アル時ハ各其祖父ノ許諾ヲ以テ足

若シ本宗ノ祖父母ト外族ノ祖父母ト互ニ異議アル時ハ其異議アル事ノミヲ以テ即チ許諾シタルト看做ス可シ(民七三、一一二、一一三、一四二、一八二、一八三、五〇二、刑二九、一九、一九三、一九五)

本宗ノ祖父婚姻ヲ肯セス、外族ノ曾祖母許諾スル時ハ、其本宗ト外族ノ親ノ種々ノ等級、及男女ノ間ノ異議ニ即チ可否相半スルモノトシテ之ヲ許諾シタルモノト看做ス、(本宗又ハ外族ノ内一方ノ親ノミ存スル時ハ、其許諾ヲ以テ足レリトス)

第五百十一條 子ハ第四百八條ニ記シタル所ノ齡ニ至ルト雖モ婚姻ヲ取結フ前ニ公然タル尊敬ノ證書ヲ以テ父母ノ存意ヲ聞ク可シ若シ父母既ニ死去シタル時又ハ其意ヲ表スルヲ能ハサル時ハ其祖父母ノ存意ヲ聞ク可シ

(第五百十二條第五百十三條第五百十四條第五百十五條第五百十六條第五百十七條ハ千八百四年三月十二日決定同月二十二日布告ス)(民二五、一一二、一一三、一五二、一五三、一五七、三七五、五〇二、刑二九、)

婚齡ニ至リシ者ハ、最早其父母ノ許諾ヲ得ルヲ要ストセサレモ、凡ソ子タル者ハ其年

齡ニ係ハラス父母ヲ尊敬セサルベカラザル(第三百七十一條見合セ)ニ因リ、婚姻ハ縁
屬及等親ノ源淵タルヲ以テ、其配遇ノ爲メ若シ父母ノ許諾アラサル時ハ、尊敬ノ書ヲ以
テ其存意ヲ聞クヲ要ス、尊敬ノ書トハ結婚セント欲スレハ其父母又ハ尊屬ノ親之ヲ許
諾セサル時、其子ヨリ送呈スル所ノ報告書ナリ、

第一百五十二條 第四百十八條ニ定メタル齡ニ至リシ後男ハ三十歳ニ至ル迄女ハ二十五歳ニ
至ル迄ノ時間前條ニ記スル所ノ尊敬證書ヲ出シ其承諾ヲ得サル時ハ其後月ヲ逐テ更ニ二
次其書ヲ出シ最後ノ書ヲ出セシ時ヨリ一月ノ後ニ至リ婚姻ヲ行フヲ得可シ(民一五一、
一五三、一五四、一五七、一五八、)

男ハ滿二十五歳ヨリ滿三十歳迄、女ハ滿二十一歳ヨリ滿二十五歳迄、月ヲ追テ三次尊敬
ノ證書ヲ出スヲ要ス、第一次ノ書ヲ出シテヨリ婚姻ヲ行フ迄テハ、少クモ三ヶ月ノ猶豫
ヲ要ス、此猶豫ハ夫婦トナラントスル者及親族ニ熟考セシメ、不良ノ決心ヲ改更セシム
ル爲メノ時間トス、若親族ニ於テ其婚姻ヲ承諾セサルコトニ付キ重大ナル趣意アル時ハ、
猶其故障ヲ述ベ得、

第一百五十三條 三十歳ノ齡ニ至リシ後ハ一次尊敬ノ證書ヲ出シ其承諾ヲ得スト雖モ一月ノ
後ニ至リ婚姻ヲ行フヲ得可シ、(民一五二、)

本條ハ男ハ三十歳女ハ二十五歳ノ齡ニ至リシ後ハ一次云々ト補正スベシ、此齡ニ至レ
ハ男女既ニ稍ヤ世態ニ慣熟スレハ其婚姻モ稍ヤ急ナルコトアルベシ、故ニ其親族ノ意ニ
反シテ契約シタル婚姻ヲ成就スルカ爲メ鄭重ナル法式及永キ猶豫ヲ要セス、

第一百五十四條 尊敬ノ證書ハ證書人二員ヨリ又ハ證書人一員ト證人二員トヨリ第一百五十一
條ニ記シタル尊屬ノ親一人又ハ數人ニ送達ス可シ

但シ此事ニ付キ記ス可キ調書ニハ其尊屬ノ親ノ答ヲモ亦記入ス可シ

婚姻ニ付存意ヲ聞クヲ要スル所ノ父母、及其他ノ尊屬ノ親ニハ各通ノ尊敬ノ證書ヲ
送達スルヲ要ス、設ヘ父母タリモ兩人ニ壹通ヲ送達スルモハ法律ノ目的ニ抵触ス、尊敬
ノ證書ハ使更ノ手ヲ經ルコトナク證書人ニ頼テ送達ス、蓋シ此場合ニ於テハ證書人ニ頼
ル方稍穩便ナルコト多キカ故ナリ、其送達ノ時子ノ現在スルハ、却テ害トナリ得ベキカ故
ニ其現在ハ必用トセス、若シ證書人其送達スベキ所ノ者ヲ見出サ、ル時ハ、其旨ヲ尊敬

ノ證書中ニ記シテ、其副本壹通ヲ近隣ノ者又ハ邑長ニ渡シ置ク、

第百五十五條 若シ尊敬ノ證書ヲ出ス可キ尊屬ノ親失踪シタル時ハ其失踪公告ノ言渡書ヲ出シ又其言渡書アラサル時ハ失踪吟味ノ言渡書ヲ出シテ婚姻ヲ行フヲ得可シ若シ又其吟味ノ言渡書アラサル時ハ尊屬ノ親ノ最終ノ住所ノ地ノ治安裁判官ヨリ渡シタル「ノトリエター」ノ證書ヲ出シ婚姻ヲ行フヲ得可シ○其「ノトリエター」ノ證書ニハ其裁判官職務ヲ以テ呼出シタル證人四員ノ述フル所ヲ記ス可シ(民七〇、ヨリ七二、一〇二、一一六、一一九、一四一、一四二、二五七、)

父母ノ内一方ノ者死去シ他ノ一方ノ者ノ失踪シタル時ハ、夫婦トナラントスル者其證據ヲ示シ、且他ノ尊屬ノ親ノ許諾ヲ得、又ハ其存意ヲ聞クヲ要ス、尊屬ノ親ノ最終ノ住所分明ナラサルニツキ、本條ニ掲グル「ノトリエター」ノ證書ヲ出スヲ能ハサル時ハ、既ニ第七十三條ニ引説シタル參議院ノ意見ニ從フベシ、

第百五十六條 滿二十五歳ニ至ラサル男又ハ滿二十一歳ニ至ラサル女ノ取結ヒタル婚姻ニ付キ其父母又ハ祖父母ノ許諾又ハ親族ノ許諾ヲ得ルノ必要ナル時ハ其許諾アリシヲ婚

姻ノ記セシテ其婚姻ヲ行ハシメタル身上證書ノ官吏ハ此婚姻ニ管セシ者ノ訴ト其婚姻ヲ行フタル地ノ初告裁判所ノ檢事ノ申立トニ因リ第百九十二條ニ記シタル罰金ノ言渡書ヲ受ケ且六月ヨリ少ナカラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラル可シ(民七三、七四、一四八、一五七、一八二、一八三、治一、六三、一八二、刑一九三、一九五、)

第百九十二條ニ掲ケタル三百「フランク」ニ過キサル所ノ罰金ハ十六「フランク」ニ減シ得、且六ヶ月ヨリ少キヲ得サル所ノ禁錮ハ一年ニ迄増シ得、(刑法第百九十三條見合セ)本條ノ文中ニ自ラ見ユル如ク、身上證書ノ官吏許諾ヲ記入スルヲ遺脱シタル時、此二重ノ罰ハ及ハサルベシト雖モ、其許諾ノ證據ヲ求メス婚姻ヲ行ハシメタルニ於テハ、本條ノ如ク二重ノ罰ヲ受クベシ、即刑法第百九十三條ニ於テ之ヲ明ラカニセリ、元來父母其他ノ尊屬ノ親又ハ親族會議ノ許諾ヲ記入セサルハ、嘗テ其許諾ヲ得サリシトト思度スルニ足ルベキカ故、身上證書ノ官吏ハ必要ナル其許諾ノアリシヲ證明セサルニ於テハ、二重ノ罰ヲ通ル、トナカルベシ、

第百五十七條 尊敬ノ證書ノ必要ナル時其書ナクシテ婚姻ヲ行ハシメタル身上證書ノ官吏

ハ同上ノ罰金ノ言渡ヲ受ケ且一月ヨリ少ナカラサル時間禁錮ノ刑ニ處セラル可シ(民一五一、ヨリ一五五、刑一九三、一九五、)

尊敬ノ證書ノ在ラサルコトハ、幼者ノ結婚ニ必用ナル許諾ノ證書ノ在ラサルカ如ク、婚姻ヲ取消スベカラス、(第百八十二條見合セ)故ニ尊敬ノ證書ノ在ラサルコトニ付テハ身上證書ノ官吏ノ罰稍ヤ輕カラサルヲ得ス、是禁錮ヲ減シテ一ヶ月トナス所以ナリ、

第百五十八條 第百四十八條第百四十九條ニ記シタル規則及ヒ尊敬ノ證書ノ事ニ付キ第百五十一條第百五十二條第百五十三條第百五十四條第百五十五條ニ記シタル規則ハ私生子ヲ法ニ循ヒ我子ナリト認メタル者ニモ亦通シテ用フ可シ(民三三四、三三五、)

法ニ循ヒ我子ナリト認メタル私生子ハ、公生ノ子ト等シク其父母ヲ尊敬セサルベカラサレハ、婚姻ニ付キ未タ幼者ナレハ己ヲ認メシ所ノ父母ノ許諾、又婚姻ニツキ既ニ丁年者ナレハ其存意ヲ聞クコトヲ結婚スルヲ得ス、本條ニ父母ノアラサル時ハ祖父母ノ許諾ヲ要スル所ノ第百五十條ヲ揭ケサリシハ、蓋シ私生子ノ子ノ認メハ之ヲ認ムル父母ト認メラル、子ノ間ニノミ其効ヲ生スレハナリ、

第百五十九條 私生子ノ子ノ未タ子ナリト認メラレサル者又ハ既ニ認メラレタル後父母ヲ亡ヒシ者又ハ父母ノ其意ヲ表スルコト能ハサル者ハ滿二十一歳ニ至ラサル以前其者ノ爲メ任シタル別段ノ後見人ノ許諾ヲ得スシテ婚姻ヲ取結フ可カラス(民二五、一一二、一一三、一六〇、四〇五、四〇六、五〇二、刑二九、)

滿二十一歳ニ至ラス、且父母共ニ死セシ所ノ私生子ノ子ハ、結婚スルカ爲メ別段ノ後見人、即チ婚姻ニ付キ其許諾ヲ與フルカ爲メ、特ニ任シタル後見人ノ許諾ヲ得ルヲ要ス、後見人ハ私生子ノ子ノ一般ノ後見人ヲ任シタル所ノ親族會議ニテ任ス、

第百六十條 滿二十一歳ニ至ラサル男女其父母及ヒ祖父母共ニアラサル時又ハ共ニ其意ヲ表スルコト能ハサル時ハ其親族會議ノ許諾ヲ得スシテ婚姻ヲ取結フ可カラス(民二五、四〇五、四〇六、五〇二、訴八八三、刑二九、)

尊屬ノ親ナキ公生ノ子ハ、滿二十一歳ニ至レハ結婚ノ爲メ何レノ許諾ヲモ尊敬ノ證書ヲモ要セサレト未タ此齡ニ至ラサル時ハ親族會議ノ許諾ヲ要ス、而シテ親族會議ニテ許諾スルコト肯セサル時、其決議ハ無上專決ニシテ之ヲ裁判所ニ訴フルコト得ス、若シ

親族會議ニテ許諾スル時ハ、幼年ノ子ハ親族會議ノ議決書ノ副本ヲ身上證書ノ官吏ニ差出シ、以テ婚姻スルコトヲ得、但シ親族會議ノ員連合シテ婚姻ヲ行フ場所ニ到ルコト嘗テナシ、

第六十一條 宗系ノ親ニ於テハ法ニ適シタル尊屬及ヒ卑屬ノ親ト法ニ適セサル尊屬及ヒ卑屬ノ親トヲ問ハス互ニ婚姻ヲ爲ス可カラス又宗系ノ姻屬ノ親互ニ婚姻ヲ爲ス可カラス
(民一八四、一八七、一九〇、三四八、七三六、七三七、)

血屬ヲ分ツテ宗系傍系ノ二トナス、尊卑ノ親ノ直ニ相連ナルヲ宗系ト稱ス、父ト子、祖父ト孫、曾祖父ト曾孫トノ如キ是ナリ、同一ノ尊屬親ヲ有スル所ノ親ノ相連ナルヲ傍系ト稱ス、兄ト弟ト伯叔父ト甥トノ如キ是ナリ、親ノ相連ナルモノニ級アリ、宗系ニ於テハ代数ニ應シテ級ヲ定メ、父ト子トハ一級ノ親、祖父ト孫トハ、二級ノ親トス、傍系ニ於テハ、此人ヨリ其所出ノ者ニ至リ其者ヨリ彼人ニ至ル代数ニ應シテ級ヲ立ツ、兄ト弟トハ相互ニ二級伯叔父ト甥トハ三級、兄弟ノ子又ハ姉妹ノ子ハ相互ニ四級ノ親トス、法ニ適セサル血屬トハ公正ノ婚姻ニ因テ生セス、不正ノ交接ニヨリ生スル所ノ者ヲ云

姻屬トハ配遇者双方ノ血屬ノ間互ニ稱スル所ニシテ同級ナルモノトス、夫婦ハ血屬トモ又姻屬トモ稱セス、蓋シ婚姻ニ因テ混合シタル一人ト看做セハナリ、本條ニ依レハ、宗系ニ於テハ法ニ適スルト適セサルトヲ問ハス、血屬又ハ姻屬ハ互ニ結婚スルヲ禁ス、

第六十二條 傍系ノ親ニ於テハ法ニ適シタル兄弟姉妹ト法ニ適セサル兄弟姉妹トヲ問ハス互ニ婚姻ヲ爲ス可カラス同上ノ級ノ姻屬ノ親互ニ婚姻ヲ爲ス可カラス(民一六四、一八四、一八七、一九〇、三四八、七三六、七三八、)

法ニ適シタル兄弟姉妹トハ公正ノ婚姻ニ因テ生レタルモノニシテ、其父母共ニ同シキ者ヲ同父母兄弟ト稱シ、父ヲ同シウシ母ヲ異ニスレハ同父異母兄弟姉妹ト稱シ、母ヲ同ウシ父ヲ異ニスレハ同母異父兄弟姉妹ト稱ス、法ニ適セサル兄弟姉妹ハ、不正ノ交接ニヨリ生シタル者ニシテ、其父母ヨリ其兄弟姉妹タルノ認メテ受ケザレハ法律上ニ於テハ他人ト看做ス(第三百三十四條見合)故ニ事實道德上ノ規格ヲ犯スト雖モ、互ニ結婚スルニ於テ妨ナシトス、同級ノ姻屬ノ親トハ、姉妹ノ夫、及ヒ兄弟ノ妻ヲ云フ、第六六

十四條參照スベシ、(千八百三十二年四月十六日ノ法律ヲ以テ至重ノ道理アル時ハ姻屬ノ兄弟姉妹互ニ結婚スルノ禁ヲ除去スルコトヲ聽サ、ル前ハ、弟ノ死去シテ後兄其妻ヲ娶ル等ノコトヲ爲ス能ハサリキ、)

第六十三條 又伯叔父姑姪ト互ニ婚姻ヲ爲ス可カラス(民一六四、一八四、一八七、一九〇、七三六、七三七、)

本條ハ前條ノ如ク法ニ適セサル傍系ノ親、即三級ノ姻屬ノ親ノコトヲ掲ケス、因テ三級ノ姻屬ノ親ハ結婚スルコトヲ得、法ニ適シタル血屬ノコトニ付テハ、千八百八年五月七日ノ勅書ニ基ツキ多ク左ノ規格ニ因ル、即チ夫婦トナラントスル者ノ一方、傍系ニ於テ同一ノ所出者ヨリ一級ノ親タル時ハ、尊屬ノ親ニ准シ互ニ結婚スルコトヲ禁ス、故ニ大伯叔父ハ其姪孫ヲ娶ルヲ得ス、大姑ハ姪孫ニ嫁スルヲ得ス、

第六十四條 (千八百三十二年四月十六日左ノ如ク改ム)然レモ至重ノ事故アル時ハ第六十二條ニ記シタル姻屬ノ兄弟姉妹互ニ婚姻ヲ爲スノ禁及ヒ第六十三條ニ記シタル伯叔父姑ト姪ト互ニ婚姻ヲ爲スノ禁ヲ皇帝ヨリ除去スルコトヲ得可シ(民一四五、一六二、一

六三、一六九、)

至重ノ事故トハ懐胎ノコト、伯叔父ヲ父トシ伯叔母ヲ母トスルニ付テ子ノ資益アルコト、大ナル至益ノ關係アル一個ノ建造物ノ保全、費用多キ訴訟ヲ落着セントノ意、又ハ双方ノ損害タル財産ノ分派ヲ防カントスルノ意等ナリ、(千八百三十二年四月二十九日宰相ノ廻達)血屬又ハ姻屬ノコトニ付キ結婚ノ禁ヲ除去スルコトノ願ハ、既ニ第一百四十五條ニ説明セシ、婚齡ニ至ラサル者ノ結婚ノ願ト同一ノ手續ヲ以テ之ヲ爲シ、加フルニ出產ノ證書及ヒ双方ノ血屬又ハ姻屬ノ級ヲ確定スル爲メニ必要ナル婚姻ノ證書ヲ示スヲ要ス、且「カトリッキー」宗ノ者ナル時ハ、其寺院ヨリ既ニ結婚ヲ許シタルコトヲ證スルヲ要ス、(千八百二十四年五月十日宰相ノ廻達)

○第二章 婚姻ヲ行フニ付テノ法式

第六十五條 婚姻ハ夫婦トナラントスル者ノ中一方ノ住所ノ身上證書ノ官吏ノ面前ニ於テ公ケニ之ヲ行フ可シ(民六三、一〇二、一六七、一九一、一九三、刑一九九、二〇〇、) 婚姻ハ夫婦トナラントスル者ノ一方、六ヶ月以上絶エス住居シタル邑ノ、身上證書ノ官

吏ノ面前ニ於テモ亦行フコトヲ得、(第七十四條見合セ)(一説ニ婚姻ハ夫婦トナラントスル者ノ能ク通知サレタル場所ニ於テナラデハ行フコトヲ得ベカラス、婚姻ノ爲メノ住所ハ六ヶ月間絶エス住居シタル場所ニ限ルコトナリ、本條ノ旨趣モ亦是ナリト、)公ケニ之ヲ行フトハ、婚姻ノ公告ヲ爲シタル後、夫婦トナラントスル者ノ一方ノ邑ノ邑廳ニ於テ、日中門戸ヲ開キ人ノ出入ヲ禁セス、證人四員ヲ出席セシメテ之ヲ行フコトナリ、蓋シ道徳上ノ爲メ及ヒ婦タルベキ者ハ自今隨意ニ契約ヲ取結フノ權利ヲ失フヘク、夫タルベキ者ノ不動産ハ、婦ノ爲メ法律上ノ書入質トナルベキコトヲ、他人ニ知ラシムル爲メナリ、

第六十六條 第六十三條(身上證書ノ卷)ニ記シタル二次ノ公告ハ夫婦トナラントスル者ノ住所ノ邑廳ニ於テ之ヲ爲ス可シ(民七四、七五、九四、一〇二、一〇三、一六七、一六九、)婚姻ヲ公ケニスルコトヲ必要トシタルハ重大ナル道理アルニ因リ、其公告ハ双方各個ノ住所ニ於テ之ヲ爲スヲ要ス、

第六十七條 若シ又現今所在ノ住所ニ居ルコト六月ニ滿タサル時ハ其地ニ移住セシ前ノ最終ノ住所ノ邑廳ニ於テモ亦其公告ヲ爲ス可シ(民七四、一〇二、一〇三、一六六、)

住所ヲ定メシニ未タ六ヶ月ヲ經過セサル時ハ、其舊ノ住所ニ於テモ亦公告ヲ爲ス可シ、六ヶ月以上住居セシ邑内ニ於テ結婚セントスル時ハ、其住居スル邑ト其住所ノ邑トニ同シク公告ヲ爲スヲ要スレド、若シ其住所ノ邑ニ於テ結婚セントスル時ハ、其住居ノ邑ニハ公告スルニ及ハサルコトス、

第六十八條 婚姻ヲ爲サントスル双方ノ者又ハ一方ノ者婚姻ノ事ニ付キ人ノ指令ヲ受ク可キキハ其指令ヲ爲ス者ノ住所ノ邑廳ニ於テモ亦其公告ヲ爲ス可シ(民一〇二、一〇三、一四八、一四九、一五八、一五九、一六〇、三七二、)

男又ハ女婚齡ニ至ラスシテ婚姻セント欲スル者ハ、其指令ヲ受クル者ノ住所ノ邑ニ於テ其公告ヲ爲スヲ要ス、然レド婚姻ノ爲メ既ニ丁年者ナルキハ之ヲ要セス、何トナレハ丁年者ハ最早他人ノ指揮ヲ受ケス、唯尊敬ノ證書ヲ以テ其父母若クハ他ノ尊屬ノ親ノ存意ヲ聞キ、假令婚姻ヲ拒ムコトアルモ結婚シ得ヘケレハナリ、

第六十九條 至重ノ事故アル時ハ皇帝又ハ皇帝ノ特ニ任シタル官吏第二次ノ公告ヲ免除スルコトヲ得可シ(民六三、六四、一四五、)

第二次ノ公告ヲ免除スルコトヲ得ヘキ至重ノ事故トハ、例ヘハ夫婦トナラントスル者大病ニシテ、其既ニ生レ又ハ受胎シタル子ヲ公生ノ者ト爲サントスル時、又ハ急ニ出立シテ長ク旅行セントスル時、又ハ女ノ妊娠シタル時等ノコトヲ云フ、此免除ヲ皇帝ニ願ヒシ者未タ曾テ之レ有ラス、何トナレハ免除ヲ得ンカ爲メニ、却テ第二次ノ公告ヲ爲スヨリ多クノ時間ヲ要スレハナリ、故ニ其免除ハ婚姻ヲ行フ可キ地ノ初告裁判所詰ノ檢事ニ於テ之ヲ聽許ス、檢事ハ其旨趣ヲ審判宰相ニ具狀スルヲ要ス、第二次ノ公告ヲ免除シタル場合ト雖モ第一次ノ公告ヲ爲シタル日ヨリ三日ヲ經サル内ハ、婚姻ヲ行フコトヲ得ス、

第七十條 外國ニ於テ佛蘭西人等ノ互ニ取結ヒタル婚姻又ハ佛蘭西人ト外國人ト互ニ取結ヒタル婚姻ハ其國ニ於テ用フル所ノ法式ヲ以テ之ヲ行ヒ且預メ第六十三條(身上證書ノ卷)ニ記シタル公告ヲ爲シ其佛蘭西人前章ニ記シタル規則ニ違背スルコトナキ時ハ其婚姻ヲ法ニ適シタルモノト爲ス可シ(民三、四七、四八、一四四ヨリ一六四、一七一、一九二、一九四、)

外國ニ於テ佛蘭西人相互ニ、又ハ佛蘭西人ト外國人ト互ニ取結ヒタル婚姻ハ、佛蘭西人

ノ住所及ヒ指揮ヲ受クベキ者ノ住所ニ於テ爲スベキ公告、(第六十三條、百六十七條百六十八條見合セ)夫婦トナラントスル者ノ年齢、尊屬ノ親ノ許諾若クハ存意、血屬姻屬ノ爲メ配遇ヲ禁シタルコト等ニ付テハ、佛國ノ法律ニ從フベキナリ、(婚姻ノコトニ付テノ規則ハ、既ニ前述セシ如ク「スタチュエメルツチール」(人權)ナレハ、佛蘭西人ノ到ル處ハ何處迄モ其身ニ附從シ、法式ヲ除ク外佛蘭西人ノ爲メ佛國ニ於テ一個ノ障碍トナルコトハ、外國ニ於テモ亦障碍トナルナリ、)夫婦トナラントスル者ノ雙方共ニ佛蘭西人タル時ハ、佛蘭西ノ交際懸官吏ノ面前、或ハ其國ノ官吏ノ面前ニ於テ、其國ノ法式ヲ以テ婚姻ヲ行ヒ得ベシト雖モ、若シ夫婦トナラントスル者ノ一方外國人タル時ハ、必ス其現ニ結婚セントスル處ノ國ノ法式ニ因ルヲ要ス、

第七十一條 佛蘭西人ハ佛蘭西ノ領地内ニ歸リ來リシ時ヨリ三月内ニ外國ニ於テ爲シタル婚姻ノ證書ヲ其住所ノ地ノ婚姻ノ證書ノ簿冊ニ登記ス可シ(民四〇、四一、一〇二、)

外國ニ於テ結婚シタル佛蘭西人、佛國ノ領地内ニ歸來セシ時ヨリ三ヶ月内ニ其住所ノ身上證書ノ簿冊ニ其婚姻ヲ行ヒタル證書ヲ登記セサルキト雖モ、之カ爲メ其正當ナル

婚姻ヲ取消スコトナシ、只法律上ノ登記ヲ爲サ、リシ懈怠ノ罰ハ、婦其夫ノ許諾ナク又裁判所ノ免許モナク正實ノ意ナル他人ニ對シ契約ヲ取結ヒタリト雖モ、婦ヨリ其取消ヲ訴フルコトヲ得ス、又夫ノ不動産ハ婦ノ爲メ法律上ノ書入質タルコトニ付テハ、結婚ノ後書入質ニ取リシ債主ノ權ヲ害スルコトナキニ止ル、

佛蘭西人佛國ニ於テ公告ヲ爲スコトナク、外國ニ於テ取結ヒタル婚姻ハ、公告ヲ爲サ、リシニヨリ必シモ取消ト爲スコトナク、其正當ナルト否トハ全ク審司ノ監定ニ任ス、

○第三章 婚姻ノ故障ヲ述フル

婚姻ノ故障ヲ述フルコトハ、夫婦トナラントスル者及ヒ身上證書ノ官吏ニ、其婚姻ニ付キ障碍アルコトヲ報知スルコトニテ、其故障ヲ述ヘ得ヘキ者ハ、其再ヒ結婚セントスル者ノ一方ノ配遇者、又ハ夫婦トナラントスル者ノ尊屬ノ親、(子ハ尊屬ノ親ニ對シ尊敬ヲ盡サ、ルベカラサル者故、尊屬ノ親ノ婚姻ニ付故障ヲ述フルコトヲ得セシメス、)或ハ傍系ノ親、及後見人ナリ、檢事モ亦其權アリ、蓋シ檢事ハ或ル場合ニ於テハ婚姻ノ取消ヲ要メ得ベキ(第百八十四條百九十條百九十一條見合セ)カ故ニ、若シ風俗ニ反シタル婚姻

ノ取結ヒアル時、故障ヲ述ヘテ之ヲ拒ミ得ルハ勿論ナリ、畢竟惡事ヲ行ヒテ後之ヲ罪セシメリ、豫メ之ヲ防クコト有益ナレハナリ、故障ヲ述ルコトノ法式ハ第六十六條以下ニ就テ見ル可シ、

第百七十二條 婚姻ノ故障ヲ述フル權ハ婚姻ヲ爲サントスル者ノ中一方ノ配遇者ニ屬ス可シ(民六六、六七、一四七、一七六、一七九、)

配遇者ハ其一方ノ配遇者ノ結婚ヲ拒ムコトニ付資益アルハ勿論ナリ、蓋シ一方ノ配遇者更ニ結婚セハ「ピガミー」ノ罪ヲ犯スノミナラス、己レノ最モ大ナル侮辱タルベケレハナリ、然レモ凡ソ結婚ノ約ハ婚姻ヲ公ケニ行ハサル内ハ、必行スベキノ義務ニアラサルヲ以テ結婚ノ約ヲ有スル者ハ故障ヲ述ルノ權ナキモノトス、

第百七十三條 又父若シ父ナキハ母又父母共ニナキ時ハ祖父母ヨリ其子及ヒ卑屬ノ親ノ齡二十五歳以上ナル時ト雖モ其婚姻ノ故障ヲ述フルコトヲ得可シ(民六六、六七、一四八、一四九、一五二、一五三、一七六、一七九、)

父ナキ時母云々ニ據レハ、父死去セシ時又ハ其意ヲ表スルコトヲ得サル時ナラデハ、母ハ

其子ノ婚姻ニ付、故障ヲ述フルノ權ナキモトス、又尊屬ノ親モ其婚姻セントスル者ノ最近ノ尊屬ノ親ノアラサル時ナラデハ故障ヲ述ルヲ得ス、婚齡ニ至ラサル者ノ婚姻ニ付、尊屬ノ親ノ故障ハ必ス動カスベカラスト雖モ、婚齡ニ至リシ丁年者ハ其故障法ニ適シタル原由ヨリ出サル時ハ、之ヲ廢棄スベキヲ求メ得、然レモ斯ノ如キ故障ハ双方充分ニ熟考セシムルノ時間ヲ與フルモノナレハ、多ク之ニ因テ其婚姻ノ企テ止メシムルヲアリ、

第百十四條 尊屬ノ親ナキ時ハ丁年ノ兄弟姉妹伯叔父姑從兄弟從姉妹左ノ二個ノ場合ニ於テハ婚姻ノ故障ヲ述フルヲ得可シ

第一 第百六十條ニ於テ必要ナリト定メタル親族會議ノ許諾ヲ得サル時

第二 婚姻ヲ結ハントスル者ノ狂頓ナルヲ以テ其婚姻ノ故障ヲ述フル時但シ其故障ヲ述フル者ハ婚姻ヲ結ハントスル者ヲシテ治産ノ禁ヲ受ケシムルノ訴ヲ爲シ裁判所ニテ定メタル期限内ニ其言渡ヲ得ルノ手續ヲ爲スニ非レハ裁判所ニテ其故障ノ申述ヲ聽ルス可カラス又故障ヲ述ルト雖モ裁判所ニテ全ク之ヲ止メシムルノ言渡

ヲ爲スヲ得可シ(民一六〇、一七六、一七九、四八九、四九〇、訴八九〇、八九一、)

婚姻ニ付故障ヲ申述フルノ權アル人ニ制限アリ、婚姻セントスル者ノ卑屬ノ親、姪及夫婦トナラントスル者ノ姻屬ノ親ハ其限内ニアラス、何トナレハ此等ノ者ハ、其尊屬ノ親ニ對シ尊敬ヲ盡サ、ルベカラサルト、其資益ノ關係ナキトヲ以テ、其尊屬ノ親伯叔姑及其姻屬ノ婚姻ニ付、故障ヲ述フルヲ得ス、

尊屬ノ親ノアラサル時、故障ヲ述ベ得ル所ノ兄弟姉妹伯叔父姑從兄弟從姉妹モ、本條ニ明記シタル二箇ノ場合ニアラサレハ其權ナシ、抑親族會議ノ許諾ヲ得サル婚姻ハ、身上證書ノ官吏ニ於テ決シテ之ヲ行ヒ得サルヲ以テ、本條ニ記列セシ所ノ兄弟姉妹等ニ於テ故障ヲ述ルニ及ハサルガ如シト雖モ、或ハ親族會議ノ許諾ノ偽書、若クハ夫婦トナラントスル者婚齡至リシト思察セシムベキ出産ノ偽證ヲ示シ、身上證書ノ官吏ヲ欺キ、以テ婚姻ヲ行ハシムル者アレハナリ、

第百七十五條 前條ニ記シタル二箇ノ場合ニ於テ管財人又ハ後見人ハ其職務ヲ行フ時間親族會議ヲ爲サシメ其許諾ヲ得タル上ニ非レハ婚姻ノ故障ヲ述フルヲ得ス(民一七四、四

○五、四〇六、訴八八三、八八四、)

幼者ノ後見人及管財人ハ傍系ノ親ノ如ク、前條ニ掲ケタル二箇ノ場合ニアラサレハ、婚姻ノ故障ヲ述フベカラス、且右ノ場合ト雖モ必ス親族會議ノ許諾ヲ得ルヲ要ス、然レモ後見人ニ於テ、夫婦トナラントスル者狂癪ノ形狀アルニヨリ、既ニ婚姻ノ許諾ヲ與ヘタル所ノ親族會議ヨリ其爲メ許諾ヲ得タル上ハ、故障ヲ述ベ得ベキヤ、曰ク然リ極メテ稀ナル左ノ場合ニ於テハ然ル可シ、即チ既ニ婚姻ノ許諾ヲ與ヘシ親族會議ノ節出席セサリシ後見人ニ於テ、夫又ハ婦トナラントスル者狂癪ノ形狀アリト視察シ、治安裁判官ニ請求シテ親族ノ會議ヲ催ス而シテ其會員後見人ニ向テ曰ク、今若シ夫又ハ婦トナラントスル者狂癪ノ現狀アリト思考セラルモ、我輩ヨリ既ニ與ヘタル婚姻ヲ取戻スコトハ敢テ爲サス然レモ事ノ難易損失總テ之ヲ擔當シ君ノ名ヲ以テ故障ヲ述ベ、且夫又ハ婦トナラントスル者ヲシテ治産ノ禁ヲ受ケシムルノ訴ヲ爲スコト聽ルス、但事ノ成否ハ裁判官ノ監定ニアルベシト、

第七十六條 婚姻ノ故障ヲ述フル書ニハ之ヲ述フルノ權ヲ生ス可キ身分ト婚姻ヲ行ハ

トスル地ニ別段住所ヲ擇ミタルコトヲ記ス可シ又尊屬ノ親ヨリ故障ヲ述ヘタル時ノ外ハ亦其趣意ヲ記ス可シ若シ此規則ニ背ク時ハ其故障ヲ述フル書ヲ取消シ且ツ其書ニ姓名ヲ手署シタル官吏ハ定期間其職ヲ罷ラル可シ(民六六ヨリ六九、一一一、一七九、)

故障ヲ述フル書ハ左ノ三件ヲ具備セサルモハ取消シトス 第一故障ヲ述フル書ノ副本ヲ渡スベキ者ヲシテ、故障ヲ述フル者ハ果シテ其權アルコトヲ知ラシムルカ爲メ故障ヲ述フル者ノ身分、第二婚姻ヲ行フベキ場所又夫婦トナラントスル者ノ住所各異ナルモハ、其對シテ故障ヲ述ヘントスル夫又ハ婦トナラントスル者ノ住所ノアル地ニ別段住所ヲ擇フコト、第三故障ヲ述フル書ノ副本ヲ渡スベキ者ヲシテ、其故障ノ根據スル道理ヲ知ラシムルカ爲メ故障ノ旨趣、此第三ノ要件ハ尊屬ノ親ニ於テハ不用トス、何トナレハ尊屬ノ親ハ卑屬ノ親ノ婚姻ヲ拒ム旨趣ヲ秘隱スルコトニ付、親族ノ大ナル利益ヲ有シ得レハナリ、

故障ヲ述フル書ノ副本ヲ受取リタル身上證書ノ官吏ハ、裁判所ニ於テ其故障ヲ止ムベキ言渡ヲ爲サ、ル内ハ其婚姻ヲ行フコトヲ拒ミ得、然レモ必要ト定メタル式ヲ背クカ、又